

日本認知心理学会 第 18 回大会

2021 年 3 月 2 日 (火) ベーシック & フロンティアセミナー

2021年3月3日(水)-3月4日(木) 第18回大会

オンライン開催

日本認知心理学会第 18 回大会準備委員会

委員長神宮英夫(金沢工業大学情報フロンティア学部)

副委員長 松井三枝 (金沢大学国際基幹教育院)

プログラム委員会

委員長 田中吉史 (金沢工業大学情報フロンティア学部)

小島治幸 (金沢大学人間社会研究域) 滝口圭子 (金沢大学人間社会研究域)

荷方邦夫(金沢美術工芸大学美術工芸学部)

佐々木康成 (金沢星稜大学教養教育部)

坪見博之 (富山大学人文学部)

石黒千晶 (金沢工業大学情報フロンティア学部)

事務局

事務局長 伊丸岡俊秀 (金沢工業大学情報フロンティア学部)

渡邊伸行 (金沢工業大学情報フロンティア学部)

松本圭(金沢工業大学基礎教育部)

田中孝治 (金沢工業大学情報フロンティア学部) 加藤樹里 (金沢工業大学情報フロンティア学部)

表紙写真 渡邊伸行

目次

大会についく		I
スケジュールおよび実施場所	2	
事前準備	3	
発表者むけ情報	4	
ベーシック & フロンティアセミナー		5
大会シンポジウム 1		6
大会シンポジウム 2		6
企画ワークショップ 1		7
企画ワークショップ 2		7
口頭セッション 1:感情・動機 1		8
口頭セッション 2:感情・動機 2		9
口頭セッション 3:知覚・感性		10
口頭セッション 4:注意		11
口頭セッション 5:社会的認知		12
口頭セッション 6:記憶		13
アブストラクト		27
口頭セッション 1: 感情・動機 1	28	
口頭セッション 2: 感情・動機 2	30	
口頭セッション 3: 知覚・感性	32	
口頭セッション 4: 注意	34	
口頭セッション 5: 社会的認知	36	
口頭セッション 6: 記憶	38	
ポスター:1日目	39	
ポスター:2日目	56	
協賛企業広告		73

にんちしん かなざわ 2020

大会について

大会期日

3/2 (火): ベーシック & フロンティアセミナー

3/3 (水): 大会 1 日目 3/4 (木): 大会 2 日目

大会受付と使用するシステムについて

本大会は全てオンラインでの実施となります。以下のシステムを使用します。それぞれにアクセスするための情報は、大会 1 週間前を目処に、参加申込時にご登録いただいたメールアドレスに送付します。参加申込したにも関わらず、2/26(金)の正午の時点でメールが届いていない場合は、御手数ですが大会準備委員会(cogpsy2020@mlist.kanazawa-it.ac.jp)まで連絡してください。

大会において特に受付は設けません。送付された情報をもとに、参加したいプログラムにアクセスしてください。

1. Zoom ウェビナー

全ての口頭発表セッションおよび大会前日のベーシック&フロンティアセミナーを実施します。

2. Zoom ミーティング

大会に関する案内やポスターアピール動画の再生を行います。

3. Slido

ポスター発表1件につき、1つのページを用意し、質疑応答などのために使用します。ポスター発表者はここへの質問に答えることで発表の必要要件の一部を満たします。

- 4. Gather town
- a. ポスター発表のライブ質疑で使用します。ポスター発表者はここへの質問に答えることで発表の必要要件の一部を満たします。
- b.1 日目夕方の懇親会で使用します。
- c. 大会協賛企業による展示を行います。
- 5. 大会 Web サイト

1-4 の各システムの他、大会 Web サイト (https://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/cp2020/web/) ではポスター発表のポスター掲示に加え、大会に関する情報提供などを随時行う予定です。

優秀発表賞推薦について

本大会では日本認知心理学会会員の皆様に発表賞の推薦を行っていただきます。推薦は Google フォームで実施します。審査用 URL は参加申し込み時にご登録いただいたメールアドレスに大会期間中に送付します。優秀発表賞には新規性部門、技術性評価部門、社会貢献度評価部門、発表力評価部門、国際性評価部門、総合性評価部門があります。

ヘルプデスク

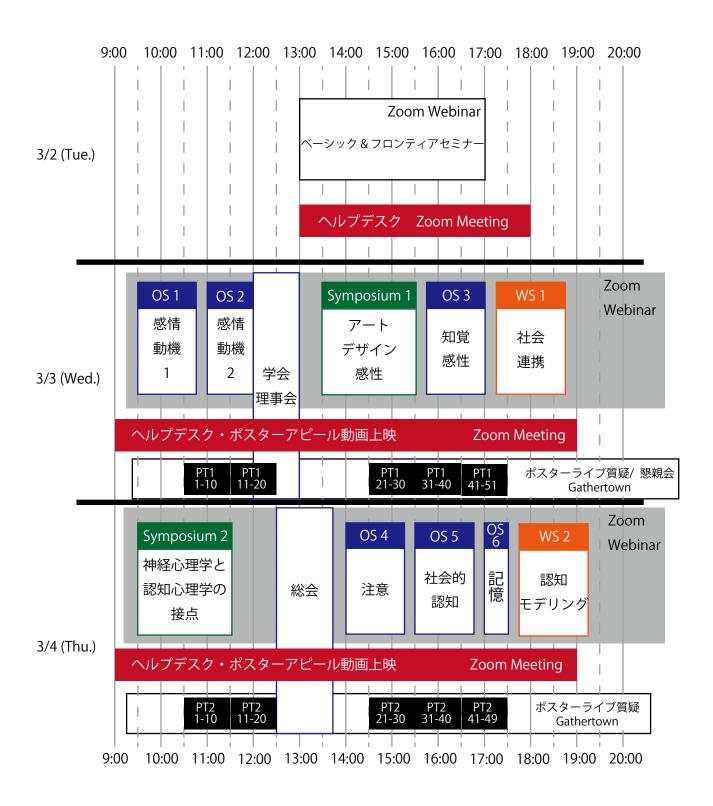
大会前日午後から大会期間を通して、Zoomミーティング上にヘルプデスクを設けます。発表や大会で使用するシステムに関して不明な点がある際にご利用ください。また、同じミーティングでは事前に任意で提出していただくポスター発表のアピール動画をリピート再生しますので、暇な時間に来ていただくのもよろしいかと思います。

懇親会

大会 1 日目の 3/3 夕方から、Gather town での懇親会を予定しております。詳細は未定ですが、参加者間の交流ができる工夫を考えておりますので、多くの皆さまにご参加いただけると幸いです。

スケジュールおよび実施場所

PDF 版では各プログラムへのリンクが張ってあります



事前準備

予約参加登録を済ませている方

参加予約登録と参加費の払い込みを済ませている方には、大会前に必要なURL等の情報を大会1週間前(2/24正午の予定)までにメールにてお知らせしますので、連絡をお待ちください。準備委員会からの連絡はこれまでも数回行っています(例えば2021年1月28日)。これまで、準備委員会からのメールが届いていなかったという方は、恐れ入りますが準備委員会まで至急お知らせください。

大会準備委員会:cogpsy2020@mlist.kanazawa-it.ac.jp

※ 2021 年 1 月 28 日に大会準備委員会から大会参加・発表申込者向けにメールでお知らせした通り、事前に発表申込と予約参加登録を済ませ、発表に必要な情報を提出済みの発表は大会プログラムに記載されていますが、大会時点で参加費の振込がない場合は【発表が認められません】。下欄をご参照の上、必ず大会前に参加費の支払いをお済ませください。

当日参加の方

当日参加の場合にも、大会前に参加費の振込をお願いします。2021年3月1日までに下記口座まで参加費をお振り込みの上、Google フォームに必要事項を入力してください。準備委員会で確認後、参加に必要な情報をお送りします。参加費などの情報については下記をご確認ください。

振込先

記号番号: 00730-4-102100

口座名称: 日本認知心理学会第 18 回大会準備委員会

なお、ゆうちょ以外からの振込みの場合は下記でお願いします。

銀行名:ゆうちょ銀行

種目: 当座

店名:○七九(ゼロナナキユウ)

口座番号:0102100

当日参加申し込み用 Google フォーム URL: https://forms.gle/2g6JnrrihM9SKXG2A



会員種別	当日参加費
会員 (一般)	¥7,000
会員(院生)	¥4,000
非会員(一般)	¥10,000
非会員(院生)	¥5,000
学部生	無料 *
論文集	¥2,500

^{*}学部生の方は参加費は不要です。登録のため、Google フォームに必要事項をご入力ください。

発表者むけ情報

口頭発表について(シンポジウム・ワークショップ・口頭セッション)

口頭発表は原則として Zoom ウェビナーを用いて、ライブでの実施とします。プログラムを確認の上、当該セッション開始の 15 分前までには、発表資料等をご準備の上、必ず Zoom ウェビナーセッションにログインしてください。セッション情報は大会 1 週間前(2/24 正午の予定)までには発表者・参加者にお知らせします。なお、発表者の方であることが分かるよう、アクセス後、表示名を「所属・氏名」のような内容にご変更ください。 Zoom ウェビナーの録画および後日公開の予定はありません。

口頭発表は質疑3分を含め、1件あたり15分の持ち時間となります。

ポスター発表について

ポスターセッションでは下記、(1)-(4) の発表・質疑方法を用意します。そのうち、(1) は必須とし、それに加え (2) あるいは (3) を満たすことを本大会での発表要件とします。(4) は希望者のみの任意としますが、大会を盛り上げるためにも、是非ともご活用ください。

- (1). 事前のポスターファイル提出 (PDF 形式): 大会 1 週間前 (2/24 AMO:00) までに大会準備委員会まで、メールでご提出 ください。お送りいただいたポスターは大会 Web サイト等で公開します。提出はメール添付でも受け付けますが、できるだけ Dropbox などのファイル共有サービスをご利用いただき、その URL をお知らせいただけると助かります。ファイル提出は全てのポスター発表者に必須の要件となります。この際、ファイル名を以下のように設定してください。 発表番号が PT1-1 の場合: PT1-1poster.pdf
- (2). Slido での質疑応答:発表ごとに Slildo の質疑ページを用意し、アクセス情報を事前にメールでお知らせします。定められた期間内にそのページに寄せられた質問にお答えください。(3) の Gathertown での質疑に参加せず、かつ Slido への質問がなかった発表については大会最終日に準備委員会から在席確認のメッセージを入力しますので、それにお答えいただくことで発表要件を満たすこととします。
- (3). Gathertown での質疑応答:大会期間中、Gathertown にポスター会場を設けます。ポスター番号ごとに質疑応答時間を設定しますのでアクセスしていただき、参加者との議論を行ってください。質疑応答時間内に準備委員が在席確認を実施します。
- (4). アピール動画提出(mp4 形式): 大会 1 週間前(2/24 AMO:00)までに大会準備委員会までお送りください。スライドに 音声を付加する、プレゼンを録画するなど、ポスター発表に関係していれば、どのような内容でも構いません。ただし、時間は3分までとします。お送りいただいた動画は Zoom ミーティングで再生する他、大会 Web サイトからも参照できるようにする予定です。こちらも(1)同様、準備委員会のメールアドレスで受け付けますが、極力 Dropbox などのファイル共有 をご利用ください。こちらへの参加は任意ですので、希望する方のみお送りいただければ結構です。こちらのファイル名は 以下のように設定してください。 発表番号が PT1-1 の場合: PT1-1appeal.mp4

英語発表について

本大会では英語発表だけのセッションを設けていません。英語での発表については質疑応答も含め全て英語でのやり取りが基本となります。日本語での質問があった場合は、発表者は英語発表であることを質問者に理解いただいた上で英語での返答をするようお願いします。質問者もできるだけ英語での質問をするようご留意ください。英語での発表は国際性評価部門の審査対象となります。

優秀発表賞について

口頭発表とポスター発表のすべての発表が優秀発表賞の審査対象となります。

ベーシック & フロンティアセミナー

3/2(Tue.) 13:00-17:00

認知心理学研究に役立つ知識やスキルを提供するセミナーとして、ベーシックセミナーは日本認知心理学会の大会の前日に開催してきました。本年度セミナーは Zoom ウェビナーにて、第1部:優秀発表賞受賞講演、第2部:「研究結果を一般化し、認知を理解するために何が必要か」、の2部構成で行います。学部生や社会人の方も含め、皆様奮ってご参加下さい。

日時: 2021年3月2日(火) 13時00分~17時00分

接続先: Zoom ウェビナー (接続の際, ユーザー名として, 氏名・所属をお示しください)

※事前予約不要・参加費不要,どなたでも参加できます。 URL は後日、大会 Web サイトおよび学会サイトにてお知らせします。

13:00 開会の辞

第1部:日本認知心理学会優秀発表賞受賞講演

司会:永井聖剛(立命館大学)

13:05 「データ駆動処理による顔魅力印象の規定要因の検討-美しい顔とは女性的な顔なのか?-」中村航洋(早稲田大学)、渡邊克巳(早稲田大学)

13:35 「刺激への新奇性付加が単純接触効果に及ぼす影響」

松田憲 (北九州市立大学), 橋口綾乃 (北九州市立大学), 藤野実由 (北九州市立大学), 楠見孝(京都大学)

第2部:研究結果を一般化し、認知を理解するために何が必要か

司会・企画: 上田 祥行(京都大学)

14:20 イントロダクション

14:30 話題提供: 上田 祥行(京都大学)14:55 話題提供: 伊村 知子(東京女子大学)

15:20 話題提供: ロバート・トムソン(北星学園大学)

15:55 話題提供: 大塚 幸生(京都大学) 16:20 総合討論・フロアディスカッション

これまで、認知心理学では多くの場合、限られたサンプルを対象に実験・調査を行い、そこから得られた結果を一般化することを主な手法としてきました。ところが、近年、心理学の主な知見は WEIRD(Western, Educated, Industrialized, Rich and Democratic people)のサンプルを取得したもので、必ずしも普遍的な結果とは言えないという批判もあります。また、ここ1年は、新型コロナの影響で対面実験が難しくなったことがあり、実験室実験だけでなくオンライン実験の手法が取り入れつつあります。このような中、異なるバックグラウンド(言語・生活習慣・文化的背景・年齢)を持つ参加者間で研究結果を比較したり、オンライン実験の結果と実験室実験の結果を比べたりするには、どういったことを考慮する必要があるでしょうか。また、ヒトとチンパンジーなどのように異なる種間で比較や、認知心理学で得られた知見を他分野の知見と繋ぐためには、実験・調査からの示唆をどのように受け止め、どのように結果をまとめるとよいのでしょうか。

このセミナーでは、(1) 異なるバックグラウンドを持つ参加者を対象に行う実験室での心理実験、(2) オンラインを通じた大規模調査の心理実験・調査、(3) さらにメタ的な手法を用いた、心理実験の対象となるトピックの分布や推移、他分野との協調の可能性について講演者に話題を提供してもらい、基礎的な手法とこれらによって生じる問題点をどのように克服するかについて学びます。また、この3つのレベルの手法を行き来することで、「こころ」や「認知」の理解に向けて議論をしたいと思います。

17:00 閉会の辞

大会シンポジウム 1

3/3(Wed.) 13:30-15:30

拡張するアート・デザイン・感性研究:「美」から「意味の生成」まで

企画:田中吉史(金沢工業大学)・荷方邦夫(金沢美術工芸大学)・石黒千晶(金沢工業大学)

感性は、刺激に対する受動的な反応だけでなく、より深い情報の読み取りや想像、といったより能動的な働きも含み、さらに個人差や社会・文化的文脈からの影響をも受ける複雑な過程である。これまでの感性研究は、対象のもつ物理的特性とそれに対する主体の主観的な評価との関係(特にアートやデザインの場合は美的反応)を検討することが多かった。近年、脳機能や生理指標・行動指標の測定技術の発展に伴って、主観評価に限らず様々な反応を多角的にとらえられるようになってきた。一方、近年はデジタルファブリケーションの普及によって、プロではない一般の方がモノのデザインを手軽に行う機会が増えてきている。また美術鑑賞においても、鑑賞者が作品から能動的に情報を読み取り、自分なりの新しい意味を見出すことが重視されるようになってきている。こうした一般ユーザーや鑑賞者の創造的過程における感性のはたらきについては、創造性研究とも関わりながら、新たな研究の可能性を開きつつある。本シンポジウムでは、このように近年拡大しつつあるアート・デザイン・感性をめぐる研究を紹介しながら、感性研究の新たな展開の可能性について議論する。

話題提供:三浦佳世(九州大学),長田典子#(関西学院大学),田中吉史(金沢工業大学)

指定討論:荷方邦夫(金沢美術工芸大学),神宮英夫(金沢工業大学)

大会シンポジウム 2

3/4(Thu.) 9:30-11:30

神経心理学と認知心理学の接点

企画:松井三枝(金沢大学)

神経心理学は、神経学と心理学に基づいて、認知的な技能や能力が中枢神経系においていかに組織化されているかを理解する学問であり、伝統的には、主として脳損傷をうけた人で観察される認知機能の障害について研究されてきた。諸外国において、神経心理学は、心理学のなかの1分野として発展してきている。しかしながら、我が国においては、心理学のなかでの神経心理学的研究は非常に数少ないといえる。今後、この領域における認知心理学からの検討も進められることが期待される。本シンポジウムでは、そういったことを喚起するために、まずは、神経心理学と認知心理学をつなぐものは何かということを討論したいと考える。そのために、これまでこの分野に携わってきた研究者から、話題提供を行っていただき、さらに、認知心理学と神経心理学両者の理解のある指定討論者からのご意見もいただき、この分野の今後の発展のための一助としたい。

話題提供:松井三枝(金沢大学),永井知代子(帝京平成大学),梅田聡(慶應義塾大学)

指定討論:熊田孝恒(京都大学), 月浦崇(京都大学)

企画ワークショップ*´*

3/3(Wed.) 17:15-18:45

認知心理学会の社会連携活動の実現と発展に向けて

企画:篠原 一光 (大阪大学)·日本認知心理学会社会連携委員会

実社会には人間の行動や認知・心理に関連する問題が多々あり、それらに対する研究調査・開発のニーズがある。一方、日本認知心理学会には認知心理学的知見や研究手法を持つ専門家が会員として参加しており、これらの問題解決に資する研究資源を持っていると言える。しかし現状では本会の持つ研究力は実社会において認知されているとは言えず、またニーズに対して十分に対応できる体制が整っているわけではない。認知心理学会が実社会のニーズにこたえてさまざまな社会的問題の解決に具体的に寄与していくことは、本会の社会的意義を高めるとともに、本会会員が研究活動をさらに広げていく機会をもたらすと考えられる。本ワークショップでは本会の社会連携に関する現状について振り返り、会員レベルで行われている社会連携の実践経験を共有するとともに、今後学会として行うべき環境整備や取り組みを討議したい。なお本ワークショップは日本認知心理学会社会連携委員会で企画するものである。

企画者:篠原一光(大阪大学)

登壇者(参加予定者):

西崎 友規子(京都工芸繊維大学)

新井田 統(KDDI 総合研究所)

羽渕 由子(徳山大学)

入戸野 宏(大阪大学)

須藤 智(静岡大学)

企画ワークショップ 2

3/4(Thu.) 17:45-19:15

古典的な実験課題を用いた認知モデリング

企画: 武藤 拓之 (京都大学こころの未来研究センター)

近年、心理学研究における統計モデリングの有用性が注目されつつある。統計モデリングは、データの生成過程を確率モデルで表現し、データに当てはめることによって現象の理解や予測に役立てる手法であり、行動データの背後にある情報処理過程の解明を目指す認知心理学とも相性がよい。しかし、本邦における統計モデリングを利用した認知心理学研究の蓄積は十分とはいえない。そこで本ワークショップでは、認知心理学者にとって馴染み深い実験課題である心的回転課題(武藤)・フランカー課題(小林)・ヴィジランス課題(紀ノ定)・アイオワギャンブル課題(難波)のデータを用いた統計モデリング研究の事例を紹介し、統計モデリングが拓く新たな仮説検証の可能性を示したい。

武藤 拓之 (京都大学こころの未来研究センター)

「心的回転課題の認知モデリング:傾いた文字の正像・鏡像判断における混合プロセス仮説の検証」 小林 穂波 (関西学院大学大学院文学研究科)

「フランカー課題の認知モデリング:刺激間距離が空間的注意による選択に及ぼす影響」

紀ノ定 保礼 (静岡理工科大学情報学部)

「ヴィジランス課題の認知モデリング:運転中における会話が視覚的注意に及ぼす影響の検証」

難波 修史 (理化学研究所)

「アイオワギャンブル課題の認知モデリング:学習・固執・探索・回避する我々」

口頭セッション 1:感情・動機 1

3/3(Wed.) 9:30-10:45

【OS1-1】後悔のインパクト・バイアスに及ぼす課題の性質と評定語の影響

Influence of Task Characteristics and Rating Words on the Impact Bias in Regret

市村 賢士郎 (1); 田岡 大樹 (1); 宮原 里奈 (1) / ICHIMURA, Kenshiro; TAOKA, Daiki; MIYAHARA, Rina

(1) 京都大学 Kyoto University

【OS1-2】 悲しみの対処可能性と音楽の感情価が気分変化に与える影響経時的評定に基づく検討

The Effects of Controllability of Sad Events and Affective Value of Music on Emotional Changes Continuous Evaluation

<u>Using Joystick</u>

平井 志歩 (1); 楠見 孝 (1) / Hirai, Shiho; Kusumi, Takashi

(1) 京都大学教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

【OS1-3】俳句の美的評価を予測する心理状態と個人特性の検討

How Individual States and Traits Predict Aesthetic Appreciation of Haiku Poetry

櫃割 仁平 (1); 野村 理朗 (1) / Hitsuwari, Jimpei; Nomura, Michio

(1) 京都大学大学院教育学研究科 Graduate School of Educaiton, Kyoto University

【OS1-4】なつかしさ傾向性と加齢がなつかしさの機能に及ぼす影響

The effects of nostalgic tendencies and aging on functions of nostalgia

楠見孝(1)/Kusumi, Takashi

(1) 京都大学 Kyoto Univesity

【OS1-5】不明瞭な正答基準が内発的動機づけの過小評価に及ぼす影響

The effects of unclear correct answer criteria on underestimation of intrinsic motivation

蔵冨 恵 (1); 北神 慎司 (2); 村山 航 (3) / Kuratomi, Kei; Kitagami, Shinji; Murayama, Kou

- (1) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University
- (2) 名古屋大学 Nagoya University
- (3) レディング大学 University of Reading

口頭セッション 2: 感情・動機 2

3/3(Wed.) 11:00-12:00

【OS2-1】知識分野による専門家の説得効果

How Does Expertise in Various Academic Fields Affect Persuasiveness?

楊 静ブン (1); 山田 祐樹 (1) / Yang, Jingwen; Yamada, Yuki

(1) 九州大学 Kyushu University

【OS2-2】些細な言語表現の違いで不正行為の抑制力は異なるのか

How subtle linguistic cues prevent unethical behaviors

- 郭ブン (1); 劉 歓緒 (1); 楊 静ブン (1); 莫 宇キ (1); 鐘 サン (1); 山田 祐樹 (2) / Guo, Wen; Liu, Huanxu; Yang, Jingwen; Mo, Yuqi; Zhong, Can; Yamada, Yuki
- (1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
- (2) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

【OS2-3】 オノマトペクラウディングによる感情ブースト

Boosting emotion by crowded ideophones

郷原 皓彦 (1, 2); 米満 文哉 (2, 3); 山田 祐樹 (2) / Gobara, Akihiko; Yonemitsu, Fumiya; Yamada, Yuki

- (1) 立命館大学 Ritsumeikan University
- (2) 九州大学 Kyushu University
- (3) 日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science

【OS2-4】予測的な手がかりの提示による自動走行車両乗車中の不安感の減少及びその効果の年齢差

Predictive cues reduce young but not old passengers' anxiety in autonomous vehicles

- 井上 和哉 (1); 水浪 田鶴 (2); 坂村 祐希 (3); 富田 瑛智 (4); 北原 格 (3); 原田 悦子 (3) / Inoue, Kazuya; Mizunami, Tazu; Sakamura, Yuki; Tomita, Akitoshi; Kitahara, Itaru; Harada, Etsuko
- (1) 東京都立大学 Tokyo Metropolitan University
- (2) 産業技術総合研究所 National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST)
- (3) 筑波大学 University of Tsukuba
- (4) 大阪大学 Osaka University

口頭セッション 3:知覚・感性

3/3(Wed.) 15:45-17:00

【OS3-1】 床清掃行動が気分に及ぼす効果のフロアワイパー製品品質による変調

Modulation of the Effect of Floor Cleaning on Mood Based on Floor Wiper Product Quality

宮崎 由樹 (1); 眞鍋 優佳 (2); 須田 朋和 (2); 釼持 泰彦 (2); 河原 純一郎 (3) / Miyazaki, Yuki; Manabe, Yuuka; Suda, Tomokazu; Kenmochi, Yasuhiko; Kawahara, Junichiro

- (1) 福山大学 Fukuyama University
- (2) ユニ・チャーム株式会社 Unicharm Corporation
- (3) 北海道大学 Hokkaido University

【OS3-2】室温が作業者の不正行為に及ぼす影響 ―事前審査付き事前登録研究―

Heat and fraud: Evaluating how room temperature influences fraud likelihood

- 劉 歓緒 (1); 楊 静雯 (1); 山田 祐樹 (2) / Liu, Huanxu; Yang, Jingwen; Yamada, Yuki
- (1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
- (2) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

【OS3-3】人間のようなロボットが非人間グループに所属する可能性はあるか?

Is it possible that robots like humans belong to a non-human group?

呉雪 (1, 1); 佐々木 恭志郎 (1, 3); 山田 祐樹 (1) / WU, XUE; Sasaki, Kyoshiro; Yamada, Yuki

- (1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
- (2) 早稲田大学 Waseda University
- (3) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

【OS3-4】中性的な香りでも触り心地が良くなる? 香りに対する性別の知覚が触り心地に及ぼす影響

The effect of scent perceived as feminine on touch

井関 紗代 (1, 2); 元木 康介 (3); 坂田 亮佑 (1); 北神 慎司 (1) / Iseki, Sayo; Motoki, Kosuke; Sakata, Ryosuke; Kitagami, Shinji

- (1) 名古屋大学 Nagoya University
- (2) 日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science
- (3) 宮城大学 Miyagi University

【OS3-5】 非計画購買行動を誘発する書体の検討

Which font can stimulate non-planning purchases better?

- 林 美都子 (1); 富塚 汐音 (1) / Hayashi, Mitsuko; Tomizuka, Shione
- (1) 北海道教育大学 Hokkaido University of Education

口頭セッション 4:注意

3/4(Thu.) 14:00-15:15

【OS4-1】外貨建て金融商品パンフレットにおけるリスク表示への注意

Acquiring attention toward risk descriptions in brochures of foreign-currency insurance products

反田 智之 (1); 河原 純一郎 (1) / Tanda, Tomoyuki; Kawahara, Jun

(1) 北海道大学大学院文学院 Department of Psychology, Hokkaido University

【OS4-2】映画視聴における二言語字幕が注意配分と情報獲得に与える影響

Influence of Bilingual Subtitles on Attention Allocation and Information Acquisition during Film Viewing

Yu, Yana (1); Lo, Yaohan (2); Li, Ming (3); Zhang, Xuemin (4)

- (1) Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University
- (2) Department of Psychology and Behavioral Sciences, Zhejiang University
- (3) Collaborative Innovation Center of Assessment for Basic Education Quality, Beijing Normal University
- (4) Faculty of Psychology, Beijing Normal University

【OS4-3】刺激間距離によるフランカー干渉の変化の diffusion モデル

Effects of interstimulus spacing on flanker interference investigated by hierarchical diffusion modeling

小林 穗波 (1); 武藤 拓之 (2, 3); 清水 裕士 (1); 小川 洋和 (1) / Kobayashi, Honami; Muto, Hiroyuki; Shimizu, Hiroshi; Ogawa, Hirokazu

- (1) 関西学院大学 Kwansei Gakuin University
- (2) 京都大学 Kyoto University
- (3) 立命館大学 Ritsumeikan University

【OS4-4】視覚探索の個人差を決める要因

Individual Difference in Visual Search

上田 祥行 (1); 齋木 潤 (1) / Ueda, Yoshiyuki; Saiki, Jun

(1) 京都大学 Kyoto University

【OS4-5】中枢神経系疾患おける認知機能と抑制障害の関連の検討

The relationships between cognitive function and inhibition in central nervous system disease

- 山上 尚彦 (1); 永井 知代子 (2); 園生 雅弘 (2); 斉藤 史明 (2) / Yamagami, Naohiko; Nagai, Chiyoko; Sono, Masahiro; Saito, Fumiaki
- (1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科 Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba
- (2) 帝京大学医学部付属病院 Teikyo University Hospital

口頭セッション 5:社会的認知

3/4(Thu.) 15:30-16:45

【OS5-1】 選択のオーバーロード現象に待機列による焦燥感が及ぼす効果

The effects of impatience by the waiting line on choice overload

松田 憲 (1); 畔津 憲司 (1); 有賀 敦紀 (2) / Matsuda, Ken; Azetsu, Kenji; Ariga, Atsunori

- (1) 北九州市立大学 The University of Kitakyushu
- (2) 広島大学 Hiroshima University

【OS5-2】携帯端末とマトリックス提示はオンライン調査の質を低下させる?

Do mobile device and matrix presentation format spoil quality of data in online survey?

眞嶋 良全 (1); 中村 紘子 (2) / Majima, Yoshimasa; Nakamura, Hiroko

- (1) 北星学園大学 Hokusei Gakuen University
- (2) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University

【OS5-3】言語的確率表現に基づく意思決定確率的信念の違いを生む文脈効果の検討

Decisions based on verbal probabilities The contextual effect of difference in probabilistic beliefs

本田 秀仁 (1); 松香 敏彦 (2); 植田 一博 (3) / Honda, Hidehito; Matsuka, Toshihiko; Ueda, Kazuhiro

- (1) 安田女子大学 Yasuda Women's University
- (2) 千葉大学 Chiba University
- (3) 東京大学 The University of Tokyo

【OS5-4】 逆相関法による政治家の顔ステレオタイプの可視化

Visualizing face stereotypes of Japanese politicians with a noise-based reverse correlation technique

中村 航洋 (1, 2); 浅野 正彦 (3); 渡邊 克巳 (1); 尾野 嘉邦 (4) / Nakamura, Koyo; Asano, Maahiko; Watanabe, Katsumi; Ono, Yoshikuni

- (1) 早稲田大学 Waseda University
- (2) 日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science
- (3) 拓殖大学 Takushoku University
- (4) 東北大学 Tohoku University

【OS5-5】他者の聴空間知覚の理解を支える身体化プロセス 視空間的視点取得との共通性

An embodied process of understanding others' auditory space percepts The common ground with visuospatial perspective taking

武藤 拓之 (1, 2); 永井 聖剛 (3) / Muto, Hiroyuki; Nagai, Masayoshi

- (1) 京都大学こころの未来研究センター Kokoro Research Center, Kyoto University
- (2) 立命館大学 OIC 総合研究機構 Research Organization of Open Innovation and Collaboration, Ritsumeikan University
- (3) 立命館大学総合心理学部 Department of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University

口頭セッション 6:記憶

3/4(Thu.) 17:00-17:30

【OS6-1】ワーキングメモリにおける人種効果の生起因

The cause of cross-race effect in working memory

西村 友佳 (1); 津田 裕之 (2); 小川 洋和 (3) / Nishimura, Yuka; Tsuda, Hiroyuki; Ogawa, Hirokazu

- (1) 関西学院大学大学院文学研究科 Kwansei Gakuin University
- (2) 慶應義塾大学先導研究センター Keio University
- (3) 関西学院大学文学部 Kwansei Gakuin University

【OS6-2】再生に基づく記憶現象のオンライン実験による再現

Replication of recall-based memory phenomena via online experiments

小林 正法 (1) / Kobayashi, Masanori

(1) 山形大学 Yamagata University

PT1-1 ~ 10 ライブ質疑: 3/3(Wed.) 10:30-11:30

【PT1-1】決断できる人ほど意思決定の基準を区別しない 外的基準が内的基準による意思決定に影響する程度と不決断傾向との関連

Decisive people do not clearly distinguish internal and external decision criteria

朱 建宏 (1); 片平 健太郎 (2); 平川 真 (1); 中尾 敬 (1) / ZHU, JIANHONG; KATAHIRA, KENTARO; HIRAKAWA, MAKOTO; NAKAO, TAKASHI (1) 広島大学大学院人間社会科学研究科 Hiroshima University; (2) 名古屋大学大学院情報学研究科 Nagoya University

【PT1-3】 コーヒーとお茶の思考抑制をすると宿題に取り組む学習時間が短くなる

Suppression of intrusive thought about coffee and tea reduces time spent on learning for report task

鍋田 智広 (1) / Nabeta, Tomohiro

(1) 九州女子大学 Kyushu Women's University

【PT1-4】短期間走行データを用いた高齢ドライバのリスク推定

Estimation of incident risks for older drivers applying short-term naturistic driving data

山岸 未沙子 (1) / Yamagishi, Misako

(1) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University

【PT1-5】嘘による認知的負荷が有効視野に及ぼす効果

Effects of Cognitive Load during Lying on the Useful Field of View

後藤 理咲子 (1); 北神 慎司 (1) / Goto, Risako; Kitagami, Shinji

(1) 名古屋大学大学院情報学研究科 Nagoya University

【PT1-6】課題無関連な視覚刺激の高低が発声ピッチ反応の高低に与える影響

The influence of irrelevant visual spatial position on vocal pitch response

鈴木 悠介 (1); 永井 聖剛 (1) / Suzuki, Yusuke; Nagai, Masayoshi

(1) 立命館大学 Ritsumeikan University

【PT1-7】高齢者の転倒事例の心理学的要因としての注意配分特性の解明

The attention allocation characteristics as a psychological factor of falling cases of the elderly Clarification

林田 脩平 (1); 伊丸岡 俊秀 (2) / Hayashida, Shuhei; Imaruoka, Toshihide

(1) 金沢工業大学大学院 Graduate School of Engineering, Kanazawa Institute of Technology; (2) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology

【PT1-8】 内発的, 外発的注意が持続時間知覚と時間的定位に及ぼす影響

Effects of endogenous and exogenous attention on duration perception and temporal localization

勝又 綾介 (1); 一川 誠 (2) / Katsumata, Ryosuke; Ichikawa, Makoto

(1) 千葉大学大学院融合理工学府 Chiba Univ. Graduate School of Science and Engineering.; (2) 千葉大学人文科学研究院 Chiba Univ. Faculty of Humanities

【PT1-9】注意範囲の縮小における文脈不一致の影響

An influence of the contextual incongruent to the attentional narrowing

武野 全恵 (1); 北神 慎司 (1) / Takeno, Masae; Kitagami, Shinji

(1) 名古屋大学 Nagoya University

【PT1-10】 二肢強制選択課題における視線手がかり効果

Gaze cueing effect in two-alternative forced choice task

満田隆(1); 田中晴哉(1)/Mitsuda, Takashi; Tanaka, Hareruya

(1) 立命館大学 Ritsumeikan University

PT1-11 ~ 20 ライブ質疑: 3/3(Wed.) 11:30-12:30

【PT1-11】色情報の活性化が単語処理に及ぼす影響

The Influence of Typical Colors during Word Processing

林韻(1)/LIN, YUN

(1) 広島大学 Hiroshima University

【PT1-12】物語における三度のくり返しと結末の予測性 交差的妥当性の検証

Predictability of outcome by three times repetition in folktales a cross-validation

井関 龍太 (1) / Iseki, Ryuta

(1) 大正大学 Taisho University

【PT1-13】文章理解において生成される知覚的表象に関する研究文章の視点の違いによって生成される表象は異なるのか?

On the generation of perceptual representations during sentence comprehension Do the perspectival differences of sentences generate different representations?

細川 亜佐子 (1); 永井 淳一 (1) / Hosokawa, Asako; Nagai, Junichi

(1) 聖心女子大学 University of the Sacred Heart, Tokyo

【PT1-14】 若年者との相談は高齢者の信頼性判断の学習を支援する 若年者側のコストとしての顔再認記憶成績の分析 Chattering with a young partner facilitate older adults' trustworthiness learning Young participants' memory score as

a cost for chattering with older adults

原田 悦子 (1); 鷹阪 龍太 (1, 2); 田中 伸之輔 (1); 水浪 田鶴 (1); 須藤 智 (3) / Harada, Etsuko; Takawaki, Ryuta; Tanaka, Shinnosuke; Mizunami, Tazu; Suto, Satoru

(1) 筑波大学 University of Tsukuba; (2) 静岡大学 Shizuoka University; (3) 東洋大学 Toyo University

【PT1-15】目的論的信念の直観性の検討

Investigating the intuitiveness of teleological belief

中村 紘子 (1); 真嶋 良全 (2) / Nakamura, Hiroko; Majima, Yoshimasa

(1) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University; (2) 北星学園大学 Hokusei Gakuen University

【PT1-16】 自己と他者に関する未来思考におけるポジティブバイアスの違い

The difference of positivity bias between self and other oriented future thinking

伊藤 友一 (1, 2); 田仲 祐登 (1); 辻 幸樹 (1, 2); 品川 和志 (1); 柴田 みどり (1); 寺澤 悠理 (1); 梅田 聡 (1) / Ito, Yuichi; Tanaka, Yuto; Tsuji, Koki; Shinagawa, Kazushi; Shibata, Midori; Terasawa, Yuri; Umeda, Satoshi

(1) 慶應義塾大学 Keio University; (2) 日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science

【PT1-17】不確実な状況における学習と気質特性計算論モデリングと行動抑制系 / 行動賦活系

Learning under uncertainty and personality traits Computational modeling and BIS/BAS

河原 哲雄 (1) / Kawahara, Tetsuo

(1) 埼玉工業大学 Saitama Institute of Technology

【PT1-18】健常高齢者の局所脳体積に対する PICMOR の介入効果に関する予備的検討

A Pilot Study to Examine the Intervention Effects of PICMOR on Regional Brain Volume in Healthy Older Adults

杉本 光 (1); 大武 美保子 (1) / Sugimoto, Hikaru; Otake, Mihoko

(1) 理化学研究所革新知能統合研究センター RIKEN Center for Advanced Intelligence Project

【PT1-19】予定の想起に伴う経験に及ぼす想起順序と加齢の影響

Effect of sequential order of remembering and aging on experience associated with remembering of plans

森田 泰介 (1) / Morita, Taisuke

(1) 東京理科大学 Tokyo University of Science

【PT1-20】時間的展望のバランスが高い者ほどモニタリングのエラーを経験しにくいのか?

The relationship between balanced time perspective and reality monitoring error

- 橋本 淳也 (1); 柏原 志保 (1, 3); 小林 亮太 (1, 3); 本多 樹 (1); 朱 建宏 (1); 原口 優輔 (1); 山本 一希 (1); 岩佐 康弘 (1); 中川 莉沙 (1); 庵 野 真代 (2); 孫 玥澤 (1); 難波 修史 (1); 中尾 敬 (1)/ Hashimoto, Junya; Kashihara, Shiho; Kobayashi, Ryota; Honda, Tatsuru; Zhu, Jianhong; Haraguchi, Yusuke; Yamamoto, Kazuki; Iwasa, Yasuhiro; Nakagawa, Risa; Anno, Mayo; Sun Yueze; Namba Shushi; Nakao Takashi
- (1) 広島大学大学院教育学研究科 Graduate School of Education, Hiroshima University; (2) 広島大学教育学部 School of Education, Hiroshima University; (3) 日本学術振興会特別研究員 Japan Society for the Promotion of Science

PT1-21 ~ 30 ライブ質疑: 3/3(Wed.) 14:30-15:30

【PT1-21】既知人物の顔の証言に基づく似顔絵描画の検討

Face composite sketch based on testimony of familiar face

渡邊 伸行 (1); 中嶋 敏博 (2); 大久保 敏子 (2); 井上 朝陽 (1); 井上 一浩 (1); 濱村 浩三 (2) / Watanabe, Nobuyuki; Nakashima, Toshihiro; Okubo, Toshiko; Inoue, Asahi; Inoue, Ikko; Hamamura, Kozo

(1) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology; (2) 石川県警察 Ishikawa Prefectural Police

【PT1-22】日常における「うっかり忘れ」の事例分類

Case classification of everyday inadvertently forgotten: Memory of lapse with cued/spontaneous retrieval

都賀 美有紀 (1) / Toga, Miyuki

(1) 立命館大学 Ritsumeikan University

【PT1-23】IRTree モデルを用いた記憶手がかりの形成過程の検討

Examination of the formation process of mnemonic cues using IRTree model

山根 嵩史 (1) / Yamane, Takashi

(1) 川崎医療福祉大学医療福祉学部 Kawasaki University of Medical Welfare, Faculty of Health and Welfare

【PT1-24】 意図・偶発学習課題を用いた虚再認の検討

The influence of source monitoring instruction on false recognition using intentional/incidental learning task

中山 友則 (1) / Nakayama, Tomonori

(1) 中央大学 Chuo University

【PT1-25】意図的忘却に及ぼす手がかりと代替思考の連合強度の影響

The effect of associative strength between cues and thought substitutions on intentional forgetting

深井 健登 (1); 井上 和哉 (1) / Fukai, Kento; Inoue, Kazuya

(1) 東京都立大学 Tokyo Metropolitan University

【PT1-26】音声の言語的符号化が話者同定の成績に与える影響音声の特徴や印象とセリフ内容に着目して

<u>Influence of verbalization of voice on speaker identification performance Focused on voice feature-impression and</u> contents of utterance

井上 晴菜 (1) / Inoue, Haruna

(1) 法政大学大学院 Hosei University Graduate school

【PT1-27】既有知識に反する誤りの学習の持続性

Persistent effect of learning errors that contradict prior knowledge

関口 貴裕 (1); 野本 佳弘 (2) / Sekiguchi, Takahiro; Nomoto, Yoshihiro

(1) 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 The united graduate school of Education, Tokyo Gakugei University; (2) 東京学芸大学大学院教育学研究科 Graduate school of education, Tokyo Gakugei University

【PT1-28】 視覚的イメージスタイルと空間的配置の記憶能力との関係

Relationship between visual image style and spatial memory performance

田中光 (1); 中條和光 (1); 貞國 そら (2) / Tanaka, Hikaru; Chujo, Kazumitsu; Sadakuni, Sora

(1) 広島大学教育学研究科 Hiroshima University Graduate School of Education; (2) 広島大学教育学部 Hiroshima University School of Education

【PT1-29】日常生活場面での記憶自己効力感と検査室場面での記憶成績の予測

Memory self-efficacy in everyday life and prediction of memory performance in test rooms

清水 寬之 (1) / Shimizu, Hiroyuki

(1) 神戸学院大学 Kobe Gakuin University

【PT1-30】非日本語母語話者による再認実験での正確さと確信度評定の関連性

Relationship between accuracy and confidence ratings in recognition judgments by non-Japanese native speakers.

日隈 美代子 (1); 久保田 貴之 (1); 漁田 武雄 (1) / Higuma, Miyoko; Kubota, Takayuki; Isarida, Takeo

(1) 静岡産業大学経営学部 Shizuoka Sangyo University, School of Management

PT1-31 ~ 40 ライブ質疑: 3/3(Wed.) 15:30-16:30

【PT1-31】 ネガティブ画像の記憶は誤情報の影響を受けやすい Porter, ten Brinke, Riley, & Baker (2014) の追試研究 Emotionally negative pictures increase the susceptibility to misinformation A replication of Porter, ten Brinke, Riley, & Baker (2014)

丹藤 克也 (1) / Tandoh, Katsuya

(1) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University

【PT1-32】検索誘導性忘却と自伝的記憶の想起内容との関連

The Relationship Between The Retrieval-Induced-Forgetting Effect and The Autobiographical Memories

蘇心寧 (1); 兵藤宗吉 (2) / SU, Xinning; HYODO, Muneyoshi

(1) 中央大学文学研究科 Graduate School of Letters, Chuo University; (2) 中央大学文学部 Faculty of Letters, Chuo University

【PT1-33】語り直しにおける認知転換能力の高さは内的な問題解決能力を予測するのか

Does tendency to use cognitive change with biased retelling predict internal problem-solving ability?

池田 和浩 (1); 佐藤 拓 (2); 川崎 弥生 (3) / Ikeda, Kazuhiro; Sato, Taku; Kawasaki, Yayoi

(1) 尚絅学院大学 Shokei Gakuin University; (2) 明星大学 Meisei University; (3) 早稲田大学 Waseda University

【PT1-34】自伝的懐かしさ・文化的懐かしさが購買意図に与える影響

The effects of autobiographical nostalgia and cultural nostalgia on intention to purchase

向居 暁 (1) / Mukai, Akira

(1) 県立広島大学 Prefectural University of Hiroshima

【PT1-35】自伝的記憶特性質問紙 (AMCQ) 日本語版開発の試み (1)

A Development of the Japanese Version of Autobiographical Memory Characteristics Questionnaire (1)

山本 晃輔 (1); 槙 洋一 (2); 瀧川 真也 (3); 清水 寬之 (4) / Yamamoto, Kohsuke; Maki, Yoichi; Takigawa, Shinya; Shimizu, Hiroyuki

(1) 大阪産業大学 Osaka Sangyo University; (2) 北海道大学 Hokkaido University; (3) 川崎医療福祉大学 Kawasaki University of Medical Welfare; (4) 神戸学院大学 Kobe Gakuin University

【PT1-36】情動喚起語に対する評定による符号化の効果 Ⅲ 喚起された覚醒度と刺激に内包された覚醒度との比較 Effects of encoding by rating for emotional words Ⅲ Comparing evoked arousal to inherent arousal

藤田 哲也 (1); 加藤 みずき (2) / FUJITA, Tetsuya; KATO, Mizuki

(1) 法政大学 Hosei University; (2) 多摩大学 Tama University

【PT1-37】情動喚起語に対する評定による符号化の効果 IV 喚起された感情価と刺激に内包された感情価との比較 Effects of encoding by rating for emotional words IV Comparing evoked valence to inherent valence

加藤 みずき (1); 藤田 哲也 (2) / KATO, Mizuki; FUJITA, Tetsuya

(1) 多摩大学 Tama University; (2) 法政大学 Hosei University

【PT1-38】 乾杯動作における眼・手腕協調過程

Eye-hand coordination when doing a toast

江口 健太 (1); 福井 隆雄 (1) / Eguchi, Kenta; Fukui, Takao

(1) 東京都立大学大学院 Tokyo Metropolitan University

【PT1-39】空間的視点取得と他者の心的経験の推測との関連 透明性錯覚パラダイムを用いて

A link between spatial and social perspective taking An investigation with the illusion-of-transparency paradigm

神原 歩 (1); 武藤 拓之 (2, 3) / Kambara, Ayumi; Muto, Hiroyuki

(1) 京都先端科学大学 Kyoto University of Advanced Science; (2) 京都大学こころの未来研究センター Kokoro Research Center, Kyoto University; (3) 立命館大学 OIC 総合研究機構 Research Organization of Open Innovation and Collaboration, Ritsumeikan University

PT1-41 ~ 51 ライブ質疑: 3/3(Wed.) 16:30-17:30

【PT1-41】メディアの視聴経験がリスク認知に及ぼす影響

Effects of media viewing experience on risk perception

富髙 智成 (1); 山本 晃輔 (2) / TOMITAKA, Tomonari; YAMAMOTO, Kohsuke

(1) 京都医療科学大学 Kyoto College of Medical Science; (2) 大阪産業大学 Osaka Sangyo University

【PT1-42】駅コンコースに存在するリスクに対する駅係員の認知とその影響要因について

Station staff's recognition of the risks in station concourse

小倉 有紗 (1); 和田 一成 (1) / OGURA, Arisa; WADA, Kazushige

(1) 西日本旅客鉄道株式会社 安全研究所 Safety Research Institute, West Japan Railway Company

【PT1-43】懐かしい自伝的記憶の共有が会話や相手の印象に及ぼす影響

Influences of sharing nostalgic autobiographical memory on impressions of the conversation and the partner

杉森 絵里子 (1); 楠見 孝 (2) / SUGIMORI, Eriko; KUSUMI, Takashi

(1) 早稲田大学(人間科学学術院);(2) 京都大学

【PT1-44】 視覚 - 嗅覚の多感覚知覚が視覚探索に与える影響の検討

The effect of the odor on visual attention in multi-sensory perception

山﨑 好純 (1, 2); 山口 真美 (1) / Yamazaki, Yoshizumi; Yamaguchi, Masami

(1) 中央大学文学部人文社会学科 Faculty of Letters, Chuo Univ.; (2) 京都大学大学院人間・環境学研究科

【PT1-45】 形容語 - 名詞句の理解に対する名詞の属性の影響

The influence of noun's attributes on understanding adjective-noun phrase

安陪 梨沙 (1); 服部 雅史 (2) / Abe, Risa; Hattori, Masasi

(1) 立命館大学大学院人間科学研究科 Ritsumeikan University Graduate School of Human Science; (2) 立命館大学総合心理学部 College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University

【PT1-46】 若年者と高齢者の忘れたことに関する記憶の比較

Comparison of memory for forgotten events between young and older adults

松田 崇志 (1) / Matsuda, Takashi

(1) ルーテル学院大学

【PT1-47】親子ペアの色と形の連合が似ているか?

Children and their parents share color-shape associations?

陳娜(1): 渡邊 克巳(2) / Chen, Na; Watanabe, Katsumi

(1) 国立障害者リハビリテーションセンター研究所;(2) 早稲田大学

【PT1-48】懐かしさが時間評価に与える影響

Effects of nostalgia on time estimation

大寺輝 (1); 田中章浩 (1) / OTERA, Hikaru; TANAKA, Akihiro

(1) 東京女子大学大

【PT1-49】所属する組織の権威差と個人の知識差が威圧的発言に与える影響

The effect of power and knowledge on intimidating behavior

堀下 智子 (1); 小倉 有紗 (1) / HORISHITA, Tomoko; OGURA, Arisa

(1) 西日本旅客鉄道株式会社 安全研究所

【PT1-50】「拡散者にならないで」は「拡散しないで」よりもコロナの感染拡大防止に効果的なのか?

<u>Is warning 'Don't be a spreader' more effective to prevent the COVID-19 pandemic than 'Don't spread'?</u>

- 米満 文哉 (1, 2); 池田 鮎美 (1, 2); 吉村 直人 (1); 高嶋 魁人 (1); 森 優希 (1); 佐々木 恭志郎 (3); 錢 琨 (4); 山田 祐樹 (5) / Yonemitsu, Fumiya; Ikeda, Ayumi; Yoshimura, Naoto; Takashima, Kaito; Mori, Yuki; Sasaki, Kyoshiro; Kun, Qian; Yamada, Yuki
- (1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University; (2) 日本学術振興会特別研究員 Japan Society for the Promotion of Science; (3) 関西大学総合情報学部 Faculty of Informatics, Kansai University; (4) 九州大学持続 可能な社会のための決断科学センター Institute of Decision Science for a Sustainable Society, Kyushu University; (5) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

【PT1-51】 COVID-19 流行による衛生マスク効果の変容

The COVID-19 epidemic has altered the sanitary-mask effect

鎌谷 美希 (1); 伊藤 資浩 (2, 3); 宮崎 由樹 (4); 河原 純一郎 (1) / Kamatani, Miki; Ito, Motohiro; Miyazaki, Yuki; Kawahara, Jun-ichiro (1) 北海道大学 ; (2) 東京大学 ; (3) 日本学術振興会 ; (4) 福山大学

PT2-1 ~ 10 ライブ質疑: 3/4(Thu.) 10:30-11:30

【PT2-1】VR 実験心理学研究:仮想身体の触覚が身体所有感に及ぼす影響 アバターに対するフルボディイリュージョンを用いた検討

VR experimental psychology: The effect of tactile sensation to virtual body on ownership The examination using full-body illusion for avatar

花島 諒 (1, 2); 大山 潤爾 (1, 2) / Hanashima, Ryo; Ohyama, Junji

(1) 産業技術総合研究所 National Institute of Advanced Industrial Science and Technology; (2) 筑波大学大学院人間総合科学研究群 Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

【PT2-2】「四季」と「色」のイメージ的結びつきによって誘発されるストループ様効果

An image connection between season and color can elicit a Stroop Like effect

朝岡 陸 (1); 浅倉 萌楓 (2); 小島 治幸 (2) / Asaoka, Riku; Asakura, Moeka; Kojima, Haruyuki

(1) 東北大学 Tohoku University; (2) 金沢大学 Kanazawa University

【PT2-3】VR 空間における移動物体の手腕モデルへの衝突による擬似触知覚

Subjective feeling of pseudo-haptics induced by collision of a moving object with arm-hand model in virtual reality

品田 涼平 (1); 福井 隆雄 (1) / Shinada, Ryohei; Fukui, Takao

(1) 東京都立大学大学院 Tokyo Metropolitan University

【PT2-4】内受容感覚の個人差が身体イメージ変換過程に与える影響

Effect of individual differences in interoception on the transformation process of body imagery

笹岡 貴史 (1); 廣瀬 健司 (1) / Saoka, Takafumi; Hirose, Kenji

(1) 広島大学脳・こころ・感性科学研究センター Brain, Mind, and KANSEI Sciences Research Center, Hiroshima University

【PT2-5】方向音痴を誇りたい 町並み評価課題による検討

A mechanism of "no sense of direction" Examination on sensory evaluation of a townscape

伊丸岡 俊秀 (1); 松村 信哉 (1) / Imaruoka, Toshihide; Matsumura, Shinya

(1) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology

【PT2-6】フォントが香りの印象に与える影響

The effect of font type on fragrance impression

中村 樹 (1); 西山 めぐみ (1) / Nakamura, Miki; Nishiyama, Megumi

(1) 人間環境大学 University of Human Environments

【PT2-7】ヒーローは右上を向くか?顔の向きが印象に及ぼす影響の文化差

Do people tend to judge that a person looking up-and-right looks more heroic?

作田 由衣子 (1) / Sakuta, Yuiko

(1) 実践女子大学 Jissen Women's University

【PT2-8】 自我同一性(斉一性・連続性)の認知的基礎

Cognitive bases of Ego-identity (Sameness-Continuity)

板垣 文彦 (1) / Itagaki, Fumihiko

(1) 亜細亜大学 Asia University

【PT2-9】 人工オブジェクトの機能カテゴリは上位カテゴリよりも速く活性化する? Go-noGo 課題による反応時間の比 較

<u>Do functional categories of man-made object activate faster than superordinate categories? Comparison of reaction</u> times by Go-noGo task

太田 直斗 (1); 北神 慎司 (1); 厳島 行雄 (2) / Ota, Naoto; Kitagami, Shinji; Itsukushima, Yukio

(1) 名古屋大学大学院情報学研究科 Graduate School of Informatics, Nagoya University; (2) 日本大学文理学部 College of Humanities and Sciences, Nihon University

【PT2-10】物体の大きさを喚起する意味情報が到達把持運動に及ぼす影響

Effect of semantics on reach-to-grasp movements

保田 晃人 (1); 福井 隆雄 (1) / Hota, Akito; Fukui, Takao

(1) 東京都立大学大学院 Tokyo Metropolitan University

PT2-11 ~ 20 ライブ質疑: 3/4(Thu.) 11:30-12:30

【PT2-11】電車内の動的案内表示における最適呈示時間と認知速度の関連性

Relationship between appropriate presentation duration and recognition speed in dynamic train quide display

高瀬 愛理 (1, 2); 大山 潤爾 (2, 1) / Takase, Airi; Ohyama, Junji

(1) 筑波大学大学院 University of Tsukuba; (2) 産業技術総合研究所 National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST)

【PT2-12】左向きの物体画像は右向きの物体画像よりも好まれる

The left-side view of a familiar object is preferred to the right-side view of the same object

水原 啓太 (1); 柴田 春香 (2); 入戸野 宏 (1) / Mizuhara, Keita; Shibata, Haruka; Nittono, Hiroshi

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科 Graduate School of Human Sciences, Osaka University; (2) 大阪大学人間科学部 School of Human Sciences, Osaka University

【PT2-13】「蛇の回転」錯視における刺激位置・画像ぼけ・移動方法の効果

The effect of stimulus position, blur, and motion type on the rotating snakes illusion

鐘 サン (1); 光藤 宏行 (1) / ZHONG, CAN; Mitsudo, Hiroyuki

(1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

【PT2-14】ア・カペラのコーラスに対する協和感評価に"音色"が及ぼす影響声音とピアノ音の和音の比較

An Influence of "Timbre" for Estimation of Feeling of Consonance of Chorus in A Cappella A Comparison between Voice Sound Chord and Piano Sound Chord

後藤 靖宏 (1) / GOTO, Yasuhiro

(1) 北星学園大学 Hokusei Gakuen University

【PT2-15】オブジェクトの抽出と強調処理による高臨場感画質の開発

Development of high presence image by object extracting and emphasis processing

武田 信治 (1); 上泉 悠 (1); 廣田 健 (1); 宮嶋 進 (1); 山本 洋紀 (2); 延原 章平 (3); 齋木 潤 (2); 熊田 孝恒 (3) / Takeda, Shinji; Kamiizumi, Haruka; Hirota, Takeshi; Miyajima, Susumu; Yamamoto, Hiroki; Nobuhara, Shohei; Saiki, Jun; Kumada, Takatsune

(1) パナソニック株式会社 Panasonic Corporation; (2) 京都大学大学院人間・環境学研究科 Kyoto University, Graduate School of Human and Environmental Studies; (3) 京都大学大学院情報学研究科 Kyoto University, Graduate School of Informatics

【PT2-16】 バイオロジカルモーションの知覚処理過程における両眼網膜像差の役割

The role of binocular disparity in perceptual processing for biological motion

陳 聡頴 (1); 光藤 宏行 (1) / CHEN, CONGYING; Mitsudo, Hiroyuki

(1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

【PT2-17】窓外景色と内装スタイルの印象調和が室内雰囲気評価に及ぼす効果

Effects of the harmony between window view and interior style on the evaluations of a room's indoor atmosphere

伊師 華江 (1); 桃澤 崚介 (1) / Ishi, Hanae; Momozawa, Ryosuke

(1) 仙台高等専門学校 National Institute of Technology, Sendai College

【PT2-18】複数の道具使用が身体近傍の空間知覚へ与える影響

The effect of simultaneous use of tools on peri-personal space perception

平澤 直哉 (1); 伊丸岡 俊秀 (1) / Hirasawa, Naoya; Imaruoka, Toshihide

(1) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology

【PT2-19】 歩行運動中の視覚情報が距離知覚に与える影響の方向特異性

Direction specificity of the effect of visual information during walking on distance perception.

粟生山 仁 (1); 伊丸岡 俊秀 (1) / Aoyama, Jin; Imaruoka, Toshihide

(1) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology

【PT2-20】 隠そうとする意図が時間知覚に与える影響

Effects of the intention to conceal on time perception

入戸野 宏 (1); 松本 あや乃 (1); 松田 いづみ (2) / Nittono, Hiroshi; Matsumoto, Ayano; Matsuda, Izumi

(1) 大阪大学 Osaka University; (2) 青山学院大学 Aoyama Gakuin University

PT2-21 ~ 30 ライブ質疑:3/4(Thu.) 14:30-15:30

【PT2-21】 癒しの感覚をもたらす心理的変化 —2 種類の癒しについての検討—

Psychological changes that bring lyashi sensation. —Examination of two types of lyashi—

布井 雅人 (1); 高橋 衿那 (1) / Nunoi, Masato; Takahashi, Erina

(1) 聖泉大学 Seisen University

【PT2-22】攻撃性の種類によって多次元的な共感性との関連は異なるか?

The relationships between the multidimensional empathy and aggression differ depends on the type of aggression

柏原 志保 (1, 2); 難波 修史 (1); 中尾 敬 (1) / Kashihara, Shiho; Namba, Shushi; Nakao, Takashi

(1) 広島大学大学院教育学研究科 Hiroshima University / (2) 日本学術振興会特別研究員 JSPS Research Fellowship for Young Scientists

【PT2-23】シャーデンフロイデの喚起に及ぼす親しさと値する信念の影響

The Role of Closeness and Deservingness in Triggering Schadenfreude

孫詩榕(1); 楠見孝(1) / Sun, Shirong; Kusumi, Takashi

(1) 京都大学 Kyoto University

【PT2-24】マネキン課題を用いた幼児顔に対する潜在的な接近傾向の検討

Measuring Implicit Approach Motivation for Infant Faces by the Manikin Task.

富田 瑛智 (1); 八木 佑都 (1); 入戸野 宏 (1) / Tomita, Akitoshi; Yagi, Yuto; Nittono, Hiroshi

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科 Graduate School of Human Sciences, Osaka University

【PT2-25】嫌悪のスーパースプレッダー —ヒトを介した道徳性嫌悪のベクター感染—

Super-spreaders of Disgust

池田 鮎美 (1); 山田 祐樹 (2) / Ikeda, Ayumi; Yamada, Yuki

(1) 九州大学人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University.; (2) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

【PT2-26】 畏敬の念が拡散的思考に及ぼす影響

Influence of Awe on the Divergent Thinking

澤田 和輝 (1); 野村 理朗 (1) / Sawada, Kazuki; Nomura, Michio

(1) 京都大学大学院教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

【PT2-27】 速聴が思考速度と感情に及ぼす影響

Effects of speed listening on thought speed and emotion.

中村 風雲 (1); 入戸野 宏 (1) / Nakamura, Fuma; Nittono, Hiroshi

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科 Graduate School of Human Sciences, Osaka Univ.

【PT2-28】 無謀な賭けの発生メカニズムの検討 感情ヒューリスティック理論の観点から

Underlying Mechanisms of Reckless Betting from the Perspective of Affect Heuristic Theory

田岡 大樹 (1); 楠見 孝 (1) / TAOKA, Daiki; KUSUMI, Takahi

(1) 京都大学教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

【PT2-29】自伝的エピソードが懐かしさ体験に及ぼす影響

The effects of autobiographical episodes on the nostalgic experiences

池田 寛香 (1); 楠見 孝 (1) / Ikeda, Hiroka; Kusumi, Takahi

(1) 京都大学大学院教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

【PT2-30】セクシュアリティによる性的刺激への反応特性の違い―生物学的性と性的志向の影響―

Differences in responsiveness to sexual stimuli due to sexuality — Effects of biological gender and sexual orientation

小林 麻衣子 (1); 中村 航洋 (1, 2); 渡邊 克巳 (1) / Kobayashi, Maiko; Nakamura, Koyo; Watanabe, Katsumi

(1) 早稲田大学理工学術院 Faculty of Science and Engineering, Waseda University; (2) 日本学術振興会; (3) 慶應義塾大学先導研究センター

PT2-31 ~ 40 ライブ質疑:3/4(Thu.) 15:30-16:30

【PT2-31】映像により喚起する快感情が意思決定に及ぼす影響の検討(1)

The effect of positive emotions elicited by films on decision making (1)

真田 和恵 (1); 門地 里絵 (1); 原水 聡史 (1); 中村 純二 (1); 木村 健太 (2) / Sanada, Kazue; Monchi, Rie; Haramizu, Satoshi; Nakamura, Junji; Kimura, Kenta

(1) 花王株式会社 Kao Corporation; (2) 産業技術総合研究所

【PT2-32】視覚的手がかりによる心的操作能力の補正と環境圧との関連

The relationship between the compensability of mental transformations using visual references and the environmental pressure

景山望(1) / Kageyama, Nozomu

(1) 海上自衛隊潜水医学実験隊 Undersea Medical Center, JMSDF

【PT2-33】中高年者の交通事故における住民検診データに基づく認知機能要因の検討

Population-based study of cognitive factors related to traffic accidents in middle-aged and elderly drivers

木村 貴彦 (1); 岩原 昭彦 (2); 八田 武志 (1) / Kimura, Takahiko; Iwahara, Akihiko; Hatta, Takeshi

(1) 関西福祉科学大学 Kansai University of Welfare Sciences; (2) 京都女子大学 Kyoto Women's University

【PT2-34】Disturbing 画像を構成する意味

The semantic structure in disturbing photographs

Chanthavong souphatta (1); 時津 裕子 (1) / Chanthavong, Souphatta; Tokitsu, Yuko

(1) 徳山大学 Tokuyama University

【PT2-35】 インターネット怪談における意味の構造

The semantic structure of Japanese horror stories on the web.

時津 裕子 (1) / Tokitsu, Yuko

(1) 徳山大学 Tokuyama University

【PT2-36】映像に基づく置き忘れ判定における観察者の着目点の検討

How do we detect left-behind objects based on video images?

小島 隆次 (1); 田中 未来哉 (2); 角所 考 (2) / Kojima, Takatsugu; Tanaka, Mikiya; Kakusho, Koh

(1) 滋賀医科大学 Shiga University of Medical Science; (2) 関西学院大学 Kwansei Gakuin University

【PT2-37】アファンタジア傾向者の視覚イメージ特性に関する一事例研究

A Single-case Study of the Properties of Visual Imagery in Aphantasia

高橋 純一 (1); 行場 次朗 (2) / Takahashi, Junichi; Gyoba, Jiro

(1) 福島大学 Fukushima University; (2) 尚絅学院大学 Shokei Gakuin University

【PT2-38】座席選択行動に与えるパーソナリティの影響

The influence of personality on seat selection

山内 裕斗 (1); 髙橋 亨輔 (2); 小野 史典 (2) / Yamauchi, Hiroto; Takahashi, Kyosuke; Ono, Fuminori

(1) 岡山大学大学院; (2) 山口大学大学院

【PT2-39】変化する表情に対する感情認知特性:系列位置の効果

The effect of serial position on the recognition of dynamic changes in emotional faces

原田 佑規 (1, 2); 大山 潤爾 (2); 和田 真 (1) / Harada, Yuki; Ohyama, Junji; Wada, Makoto

- (1) 国立障害者リハビリテーションセンター研究所 Research Institute of National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities
- (2) 国立研究開発法人産業技術総合研究所 National Institute of Advanced Industrial Science and Technology

【PT2-40】統合失調型パーソナリティと幻覚様体験の媒介要因の探索

Potential mediators between schizotypy and hallucinatory experiences

田上 初夏 (1); 今泉 修 (2) / Tagami, Ubuka; Imaizumi, Shu

(1) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科; (2) お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所

PT2-41 ~ 49 ライブ質疑:3/4(Thu.) 16:30-17:30

【PT2-41】 実時計を用いた intentional binding の計測

Measuring Intentional Binding Effect Using Physical Libet Clock

樋田 浩一 (1); 齋藤 五大 (2) / TOIDA, Koichi; Saito, Godai

(1) 東北大学加齢医学研究所: (2) 東北大学大学院文学研究科

【PT2-42】 視聴覚刺激間の協応関係が同時性知覚の再較正に与える影響

Influence of crossmodal correspondence on the recalibration of audiovisual simultaneity

宇野 究人 (1, 2); 横澤 一彦 (1) / Uno, Kyuto; Yokosawa, Kazuhiko

(1) 東京大学; (2) 日本学術振興会

【PT2-43】ひらがなとカタカナの主観的な複雑さを反映する指標としての周囲長複雑度の妥当性

The validity of perimetric complexity as an indicator of the subjective complexity of hiragana and katakana characters

齋藤 岳人 (1); 樋口 大樹 (2); 井上 和哉 (3); 小林 哲生 (2) / SAITOU, Taketo; HIGUCHI, Hiroki; INOUE, Kazuya; KOBAYASHI, Tessei (1) 所属なし; (2) NTT コミュニケーション科学基礎研究所; (3) 東京都立大学

【PT2-44】操作非関連なオブジェクト応答による自動制御オブジェクトに対する主体感の錯覚的変化

Task-irrelevant object response modulates sense of agency illusorily in automatic control

situation

中島 亮一 (1, 2); 熊田 孝恒 (1, 2) / Nakashima, Ryoichi; Kumada, Takatsune

(1) 京都大学大学院情報学研究科 Graduate School of Informatics, Kyoto University; (2) 理研 CBS-トヨタ連携センタ RIKEN CBS-TOYOTA Collaboration Center

【PT2-45】Intentional Binding 課題のオンライン化

Verifying online form of intentional binding task

中村 杏奈 (1); 田中 章浩 (2) / Nakamura, Anna; Tanaka, Akihiro

(1) 東京女子大学大学院人間科学研究科;(2) 東京女子大学現代教養学部

【PT2-46】映像により喚起する快感情が意思決定に及ぼす影響の検討(2)

The effect of positive emotions elicited by films on decision making (2)

木村 健太 (1); 眞田 和恵 (2); 門地 里絵 (2); 原水 聡史 (2); 中村 純二 (2) / Kimura, Kenta; Sanada, Kazue; Monchi, Rie; Haramizu, Satoshi; Nakamura, Junji

(1) 産業技術総合研究所; (2) 花王株式会社

【PT2-47】触覚感情表出の文化内共通性と参加者間個別性の検討

Commonality and Variety in Tactile Emotional Expression

大屋 里佳 (1); 田中 章浩 (2) / Oya, Rika; Tanaka, Akihiro

(1) 東京女子大学大学院人間科学研究科;(2) 東京女子大学現代教養学部

【PT2-48】離人症者は外的刺激の自己関連づけが困難なのか?

Do people with depersonalization disorder feel difficulty to associate external stimuli with self?

山本一希 (1); 本多 樹 (1); 中尾 敬 (2) / Yamamoto, Kazuki; Honda, Tatsuru; Nakao, Takashi

(1) 広島大学大学院教育学研究科; (2) 広島大学大学院人間社会科学研究科

【PT2-49】その食事どこから見るか? - 摂食動画の視点の違いがもたらす空腹感の変容 -

From where do you see one's eating? The viewpoint of eating movies influence observer's hunger.

高木 あい (1); 佐々木 恭志郎 (2); 中村 航洋 (1); 渡邊 克巳 (1) / Takagi, Ai; Sasaki, Kyoshiro; Nakamura, Koyo; Watanabe, Katsumi (1) 早稲田大学 Waseda University; (2) 関西大学 Kansai University

アブストラクト



口頭セッション 1: 感情・動機 1

(OS1-1)

後悔のインパクト・バイアスに及ぼす課題の性質と評定語の影響

Influence of Task Characteristics and Rating Words on the Impact Bias in Regret

市村 賢士郎 (1); 田岡 大樹 (1); 宮原 里奈 (1)

ICHIMURA, Kenshiro; TAOKA, Daiki; MIYAHARA, Rina

(1) 京都大学 Kyoto University

僅差の失敗時に予期される後悔が実際に経験される後悔よりも過大視されるインパクト・バイアスが知られている。本研究ではこれについてさらなる検討を行うために、1. 参加者内計画による実験の実施、2. 感情の評定語に「悔しい」と「後悔した」を用いた結果の比較、3. 追加報酬の有無による影響の検討を行った。先行研究と同じ要因である失敗の程度(僅差・大差)の実験操作と後悔の種類(予期的・経験)の測定を参加者内要因で実施した。参加者が結果を制御できる課題と制御できない課題の2種類を用いた。実験1では追加報酬ありで実験2では追加報酬なしで実施した。その結果、1. 失敗の程度や課題の種類、評定語によらず後悔のインパクト・バイアスが見られること、2. 「後悔した」は結果を制御できない課題での評定値が低くなること、3. 追加報酬による外発的動機づけや課題の楽しさからくる内発的動機づけが後悔感情に影響しうることが示された。

(OS1-2)

悲しみの対処可能性と音楽の感情価が気分変化に与える影響 経時的評定に基づく検討

The Effects of Controllability of Sad Events and Affective Value of Music on Emotional Changes Continuous Evaluation Using Joystick

平井 志歩 (1); 楠見 孝 (1)

Hirai, Shiho; Kusumi, Takashi

(1) 京都大学教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

本研究では、65人の大学生参加者を対象に、対処可能性の高低を操作した2種類の悲しみ体験によって悲しみを喚起させた後、感情価の異なる音楽を聴かせ、悲しみの対処可能性の高低と音楽の感情価が聴取後の気分変化に与える影響を調べた。また、聴取中の気分についての連続評定値をジョイスティックで測定し、音楽の感情価が聴取中の気分回復の速さに与える影響についても検討した。

実験の結果、悲しみの対処可能性に関わらず明るい音楽と暗い音楽は各々一定の気分回復効果をもたらすこと、及び明るい音楽のほうが暗い音楽よりも早く快方向への気分回復効果がもたらされることが示された。

(OS1-3)

俳句の美的評価を予測する心理状態と個人特性の検討

How Individual States and Traits Predict Aesthetic Appreciation of Haiku Poetry

櫃割 仁平 (1); 野村 理朗 (1)

Hitsuwari, Jimpei; Nomura, Michio

(1) 京都大学大学院教育学研究科 Graduate School of Educaiton, Kyoto University

詩歌の美的評価に影響を与える要因には不明点が多い. 詩歌の心理学研究は萌芽的段階にありながらも、詩歌の美的評価に影響を与える特徴が報告されている. 本研究は、俳句の美的魅力を予測する心理状態と個人特性を判定することを目的とした. 参加者 277 名 (Mage = 38.68, 女性 209 名) は 37 句の俳句をイメージの鮮明性、感情価、覚醒度、感情評定、俳句の美的魅力という 5 つの観点から評価し、さらに個人特性に関する質問紙に回答した. その結果、イメージの鮮明性と感情価が美的魅力を予測し、かつイメージの鮮明性の美的魅力への影響には感情評定が媒介していた. メンタルイメージが感情の喚起を促すように、俳句の鮮明なイメージが主観的な感情強度を高め、美的魅力も上昇した. また、視覚イメージ能力や畏敬の感じやすさ、ノスタルジア傾向の個人特性が俳句の美的魅力を予測した. 以上の結果は、俳句の美的魅力に影響する個人の心理状態や個人特性を新たに示すものである.

(OS1-4)

なつかしさ傾向性と加齢がなつかしさの機能に及ぼす影響

The effects of nostalgic tendencies and aging on functions of nostalgia

楠見 孝 (1)

Kusumi, Takashi

(1) 京都大学 Kyoto Univesity

本研究では、全国の 18-79 歳の 1020 (男 504, 女 516) 人に対してオンライン調査を実施した。過去をなつかしく思う個人差指標であるなつかしさ傾向性を、Southampton ノスタルジア尺度 (Barrett et al., 2010) となつかしさポジティブ - ネガティブ傾向尺度 (楠見, 2014) で測定し、なつかしさの機能をなつかしさの機能尺度 (Cheung et al., 2013) で測定した。あわせて、自尊心、生活満足度、時間的展望を測定した。その結果、ノスタルジア尺度となつかしさポジティブ傾向は、なつかしさの機能である他者とのつながり、自己の過去とのつながり、人生の意味、自己の理解と正相関、自尊心や生活満足度と正相関があった。また、人生の目的をお金と捉えることとは負の相関があった。また、なつかしさの機能に及ぼす加齢の効果は、なつかしさ傾向が低い人に働くことが明らかになった。

[OS1-5]

不明瞭な正答基準が内発的動機づけの過小評価に及ぼす影響

The effects of unclear correct answer criteria on underestimation of intrinsic motivation

蔵冨 恵 (1); 北神 慎司 (2); 村山 航 (3)

Kuratomi, Kei; Kitagami, Shinji; Murayama, Kou

- (1) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University
- (2) 名古屋大学 Nagoya University
- (3) レディング大学 University of Reading

これまでの研究では、動機づけに関するメタ認知的な気づきが不正確であることが示されている。例えば、英文字消去課題、単語並び替え課題、フランカー課題などは、内発的動機づけが過小評価される。しかし、これらの課題は知覚的に正答基準が明確であることから、課題中のポジティブなフィードバックが動機づけを高め、結果的に過小評価を導いているとも考えられる。そこで、本研究では、正答基準が不明瞭な課題が、内発的動機づけの過小評価に及ぼす影響を検討した。具体的には、無意味図形に対する選好課題、あるいは、その無意味図形に対する分類課題を用いて、それらの課題における内発的動機づけを測定した。その結果、いずれの課題においても、内発的動機づけの過小評価は見られなかった。これは、明確な正誤基準がメタ動機づけを不正確にしている可能性を示唆している。

口頭セッション 2: 感情・動機 2

(OS2-1)

知識分野による専門家の説得効果

How Does Expertise in Various Academic Fields Affect Persuasiveness?

楊 静ブン (1); 山田 祐樹 (1)

Yang, Jingwen; Yamada, Yuki

(1) 九州大学 Kyushu University

In previous research, it is hypothesized that information from high-expertise source is more persuasive, while this effect vanishes for issues in which one is highly involved. Given that compared with natural sciences, issues which social sciences study on are generally considered more relevant to life, we predicted that experts' persuasiveness would differ in various academic fields. A 2 (academic field: social sciences vs natural sciences) \times 3 (source expertise: high vs low vs control) design is adopted in the research, in which participants were asked to read 4 articles from 2 academic fields and make evaluations on persuasiveness, scientific level, involvement, difficulty and so on. The results showed that participants were better persuaded by sources with higher expertise and articles from natural sciences, while no interaction between two factors was observed. These findings indicated that source expertise and academic fields influence persuasiveness independently.

(OS2-2)

些細な言語表現の違いで不正行為の抑制力は異なるのか

How subtle linguistic cues prevent unethical behaviors

郭 ブン (1); 劉 歓緒 (1); 楊 静ブン (1); 莫 宇キ (1); 鐘 サン (1); 山田 祐樹 (2)

Guo, Wen; Liu, Huanxu; Yang, Jingwen; Mo, Yuqi; Zhong, Can; Yamada, Yuki

- (1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
- (2) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

微妙な言語表現の違いは、人々の評価や行動に影響を与える。特に、アイデンティティに関する言葉を使うことで、人は望ましいアイデンティティの名詞の内容に沿って行動する。逆に、望ましくない名詞の場合には、その特徴を回避する傾向があるだろう。本研究は、意味的プライミングによる、不正行為の抑制における言語表現の些細な違いの効果を検討した。実験では、警告語呈示条件(嘘をつかない/嘘つきにならない)と警告語非呈示統制条件を設定した。参加者はコインを 10 回投げ、裏が出た回数によって謝礼が受けられる。結果に基づき禁止メッセージの表現が不正行為に及ぼす影響について議論する。

(OS2-3)

オノマトペクラウディングによる感情ブースト

Boosting emotion by crowded ideophones

郷原 皓彦 (1, 2); 米満 文哉 (2, 3); 山田 祐樹 (2)

Gobara, Akihiko; Yonemitsu, Fumiya; Yamada, Yuki

- (1) 立命館大学 Ritsumeikan University
- (2) 九州大学 Kyushu University
- (3) 日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science

我々は漫画を読む際に多数のオノマトペが描き込まれたコマを目にするが、それはコマ全体の印象にどのような影響を与えるのだろうか。これまで高速度を表すオノマトペの多重呈示による速度感の強調が報告されているが(郷原・山田、2017)、それが感情処理においても生じるかは不明である。本研究では感情を表すオノマトペを用い、その個数が視覚刺激の感情価や覚醒度に影響するかを検討した。参加者は「ウキウキ」や「ムカムカ」といった喜びや怒りを表すオノマトペが周辺に2個または8個同時呈示された笑顔や怒り顔のイラストの感情価と覚醒度を評定した。その結果、2個条件より8個条件にて喜び語条件では感情価がよりポジティブに、怒り語条件ではよりネガティブに評価され、覚醒度は両条件ともに8個条件にて高かった。これは、感情情報の処理においてもオノマトペの多重呈示による強調効果が生じることを示唆する。

(OS2-4)

予測的な手がかりの提示による自動走行車両乗車中の不安感の減少及びその効果の年齢差

Predictive cues reduce young but not old passengers' anxiety in autonomous vehicles

井上 和哉 (1); 水浪 田鶴 (2); 坂村 祐希 (3); 富田 瑛智 (4); 北原 格 (3); 原田 悦子 (3)

Inoue, Kazuya; Mizunami, Tazu; Sakamura, Yuki; Tomita, Akitoshi; Kitahara, Itaru; Harada, Etsuko

- (1) 東京都立大学 Tokyo Metropolitan University
- (2) 産業技術総合研究所 National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST)
- (3) 筑波大学 University of Tsukuba
- (4) 大阪大学 Osaka University

自動走行技術が発展する一方で、自動走行車両の乗車に不安を感じる人は少なからず存在する。この理由の一つとして、車の挙動を十分に予測できないことが挙げられる。本研究では、車の挙動の予測を可能にする手がかりを提示することで自動走行車両に乗車中の不安が減少するかを検討した。カートの前方に置かれたスクリーンに、実際の運転場面で撮影した動画を提示した。実験参加者はカートの後部座先から動画を観察し、手元のレバーで不安を絶えず報告することが求められた。車の進路を予測するための手がかりとして映像の道路上に白線をARとして描画した。また、カーブへの到達タイミングを知らせる手がかりとして、カーブの手前で警告音を提示した。その結果、ARや警告音は若齢者の不安感を減少させたが、高齢者の不安感には全く影響を与えなかった。このことから、予測的な手がかりをどのように解釈するかは年齢によって異なることが示唆される。

口頭セッション 3: 知覚・感性

(OS3-1)

床清掃行動が気分に及ぼす効果のフロアワイパー製品品質による変調

Modulation of the Effect of Floor Cleaning on Mood Based on Floor Wiper Product Quality

宮崎 由樹 (1); 眞鍋 優佳 (2); 須田 朋和 (2); 釼持 泰彦 (2); 河原 純一郎 (3)

Miyazaki, Yuki; Manabe, Yuuka; Suda, Tomokazu; Kenmochi, Yasuhiko; Kawahara, Junichiro

- (1) 福山大学 Fukuyama University
- (2) ユニ・チャーム株式会社 Unicharm Corporation
- (3) 北海道大学 Hokkaido University

清掃は気分転換やストレス解消に良いと一般に言われるが、実際には実証的根拠に乏しい。本研究では、フロアワイパー製品の品質によって、清掃が気分に及ぼす効果が変調することを示した。被験者は、日本の一般家庭のダイニングを模した家具や壁の隙間の多い空間で、床の清掃課題を2回行った。1回は壁や家具の隙間を清掃しやすいワイパー(隙間掃除の容易なワイパー)、もう1回は一般的なワイパー(隙間掃除の困難なワイパー)で清掃した。各回の清掃前後でポジティブ・ネガティブ情動、清掃後にワイパーの使用感を測った。その結果、隙間掃除の容易なワイパーでは清掃前に比べ清掃後に、ポジティブ情動は高くなりネガティブ情動は低くなることが示された。一方、隙間掃除の困難なワイパーでは、清掃後にポジティブ情動は低くなりネガティブ情動は高くなった。この気分変動は清掃に要した時間、使用の快適感、楽しさが特に関係していることも明らかになった。

(OS3-2)

室温が作業者の不正行為に及ぼす影響 ―事前審査付き事前登録研究―

Heat and fraud: Evaluating how room temperature influences fraud likelihood

劉 歓緒 (1); 楊 静雯 (1); 山田 祐樹 (2)

Liu, Huanxu; Yang, Jingwen; Yamada, Yuki

- (1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
- (2) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

不正行為をどのように防止するかは社会的に大きな問題であり、不正行為の発生メカニズムについての研究が行われてきた。例えば、部屋の暗さは人間の不正行為を促進することが報告されている。しかし、その他に物理的環境が不正行為に与える影響を調べた研究は極めて少ない。特に、人間の様々な行為に影響を与える「温度」についての実証研究はまた行われていない。そこで本研究は、部屋の温度が不正行為に与える影響を明らかにすることを目的とし、専門家による査読を受けてプロトコルを国際誌に事前登録した。予備実験における効果量を利用した検定力分析に基づき 105 名の参加者を無作為に三群の温度条件に分けてサイコロ課題を実施した。実際の出目と報告された出目の差を従属変数として室温(高、中、低)の効果を分散分析により検定した。結果として有意な主効果は見られなかった。様々な実験上の留意点を明らかにし、知見の一般化可能性について議論する。

(OS3-3)

人間のようなロボットが非人間グループに所属する可能性はあるか?

Is it possible that robots like humans belong to a non-human group?

呉雪(1);佐々木 恭志郎(2);山田 祐樹(3)

WU, XUE; Sasaki, Kyoshiro; Yamada, Yuki

- (1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
- (2) 早稲田大学 Waseda University
- (3) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

The uncanny valley phenomenon is assumed to be due to the anxiety of threat to human distinctiveness. According to previous studies, it is hypothesized that human-like robots are considered as belonging to the out-group, which leads to anxiety. Because the human faces of out-group members are difficult to recognize, we predicted that a similar effect would be obtained. The experiment contained a 2 (category: Human vs Human-like Robot) \times 3 (facial expression: positive, negative and control) within-subject factor. Sixty face images with different expressions were selected through an online survey. In the experiment, observers learned half of the face images randomly. Then after a 5 minutes crossword puzzle, observers saw all the face images and recognized whether it has been learned before. The results showed that recognition performance was better in the negative expression condition than in the other conditions, although the performances were not significantly different between the categories.

(OS3-4)

中性的な香りでも触り心地が良くなる?香りに対する性別の知覚が触り心地に及ぼす影響

The effect of scent perceived as feminine on touch

井関 紗代 (1, 2); 元木 康介 (3); 坂田 亮佑 (1); 北神 慎司 (1)

Iseki, Sayo; Motoki, Kosuke; Sakata, Ryosuke; Kitagami, Shinji

- (1) 名古屋大学 Nagoya University
- (2) 日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science
- (3) 宮城大学 Miyagi University

バラのような女性的な香りが付着した布は、やわらかい、滑らかだと知覚されやすい (e.g., Laird, 1932; 西野他, 2014)。加えて、柔らかい (vs 硬い) ボールをにぎっていると、性別が曖昧な顔は女性だと判断されやすいことも示されている (Slepian et al., 2011)。これらのことから、「女性 = 柔らかい・滑らか」「男性 = 硬い・粗い」というジェンダーに関するメタファーが存在すると考えられる。本研究では、予備調査で選定した中性的な香りに対して、女性(vs 男性)と関連づけた学習をすることで、新たに女性的(vs 男性的)という意味的な連合をつくり、その香りが付着した紙の触り心地に及ぼす影響を検討した。その結果、香りの学習において、女性条件の参加者は、粗い紙の触り心地をポジティブに評価することが示された(vs 男性条件)。したがって、中性的な香りであっても、女性的という意味的連合を新たに獲得することで、その香りは滑らかさの知覚を促進することが示唆される。

(OS3-5)

非計画購買行動を誘発する書体の検討

Which font can stimulate non-planning purchases better?

林 美都子 (1); 富塚 汐音 (1)

Hayashi, Mitsuko; Tomizuka, Shione

(1) 北海道教育大学 Hokkaido University of Education

当初買う予定のなかった商品を店頭の POP 広告に誘発され、うっかり購入することは日常でもよく経験する。本研究では、このような非計画購入を誘発しやすい書体について、主にサーストンの一対比較法を用いて検討した。ミカンやリンゴ、メロンなどの果物名を MS 明朝体、HG 行書体、NemukeMedium 等の 9 種類の書体で一対ずつ左右に並べて印刷し、どちらの書体で印刷されたものがより購入したいか強制的に回答を求める調査用紙を大学生を対象に配布し、100 名分の分析対象データを得た。分析の結果、HG 創英角ポップ体がもっとも購入意欲を喚起し、ついで HG 丸ゴシック M-PRO や MS ゴシックが刺激し、しろくまフォントや 851 チカラヅヨク - かな B フォントはもっとも購入意欲に影響しないことが示された。丸味を帯びた書体の方がポジティブな影響を示したのは、果物が対象であったせいかもしれず、今後の検討課題である。

口頭セッション 4: 注意

[OS4-1]

外貨建て金融商品パンフレットにおけるリスク表示への注意

Acquiring attention toward risk descriptions in brochures of foreign-currency insurance products

反田 智之 (1); 河原 純一郎 (1)

Tanda, Tomoyuki; Kawahara, Jun

(1) 北海道大学大学院文学院 Department of Psychology, Hokkaido University

我々消費者は、商品やサービスを選択する際、事業者側が明記するリスクを理解した上で選択する必要がある。しかし、我々の注意は選択的であるため、リスクが明記してあったとしてもその表記を見落とす可能性がある。本研究では、レイアウトの異なる 2 社の金融商品のパンフレットを用い、リスク表示に被験者が注意・記憶できるかを検討した。被験者はいずれかのパンフレットの指定された範囲を読み、重要と考える点を注意スパン描出法で回答した。ページの見出しでのリスクという語の有無を操作した。リスク表示を検出した人数を比較したところ、見出しあり条件のほうがなし条件よりも多かった。また被験者属性の効果を検討するため、大学生と一般消費を対象に検討したが、結果の傾向は同じだった。これらの結果は、事業者がリスクを明記した場合でも、ページの見出しやレイアウトが消費者のリスクに対する注意と気づきを左右することを示唆している。

[OS4-2]

映画視聴における二言語字幕が注意配分と情報獲得に与える影響

Influence of Bilingual Subtitles on Attention Allocation and Information Acquisition during Film Viewing

Yu, Yana (1); Lo, Yaohan (2); Li, Ming (3); Zhang, Xuemin (4)

- (1) Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University
- (2) Department of Psychology and Behavioral Sciences, Zhejiang University
- (3) Collaborative Innovation Center of Assessment for Basic Education Quality, Beijing Normal University
- (4) Faculty of Psychology, Beijing Normal University

This study investigated the influence of bilingual subtitles on attention allocation and comprehension while watching films with foreign language soundtracks. Eighty-eight college students whose native language was Chinese and second language English participated in the experiment. Two film clips, one with a low amount of scene information, another with a high amount of scene information, were used. Participants watched the clips in no subtitles, monolingual subtitles (Chinese) or bilingual subtitles (Chinese and English) condition, with their eye-movements recorded. An information test about the contents of the film was taken after watching each film clip. The results showed that when the film clip contained a lower amount of scene information, participants tend to spend more time reading English subtitles in bilingual subtitles, and the presence of bilingual subtitles might impair acquisition of scene information. We further discussed the results from the perspective of cognitive load theory.

[OS4-3]

刺激間距離によるフランカー干渉の変化の diffusion モデル

Effects of interstimulus spacing on flanker interference investigated by hierarchical diffusion modeling

小林 穂波 (1); 武藤 拓之 (2, 3); 清水 裕士 (1); 小川 洋和 (1)

Kobayashi, Honami; Muto, Hiroyuki; Shimizu, Hiroshi; Ogawa, Hirokazu

- (1) 関西学院大学 Kwansei Gakuin University
- (2) 京都大学 Kyoto University
- (3) 立命館大学 Ritsumeikan University

We examined selective attention processes involved in the Eriksen flanker task by using hierarchical diffusion models. The model proposed by White, Ratcliff, and Starns (2011) assumed that attention is initially distributed across all stimuli, and that the attentional spotlight narrows to focus on the target stimulus during the time course of a trial. Our study extended this model to account for the well-known effect that the flanker interference decreases as interstimulus spacing broadens. The previous model did not fit the observed data of our experiment well. Therefore, we have proposed an alternative method of calculating the information accumulation rate within a trial, as the ratio of target-related information to all the inputs. Moreover, the model fit was improved by assuming a more converged distribution than the normal distribution as representing attentional distribution.

(OS4-4)

視覚探索の個人差を決める要因

Individual Difference in Visual Search

上田 祥行 (1); 齋木 潤 (1)

Ueda, Yoshiyuki; Saiki, Jun

(1) 京都大学 Kyoto University

視覚探索は日常でよく行われる行動の一つであり、ある場面での注意の働きを調べるのに適した課題として、よく用いられてきた。 視覚探索は、ターゲットと妨害刺激の関係性を操作することで様々な課題を作成することが可能であり、アイテム間のどのような関係 性が探索成績に影響を与えるのかについては多くのことが知られている。その一方で、刺激セットを超えた個人内の成績の一貫性や、 この一貫性を説明するような要因については、未だ不明な点が多い。本研究では、90名の参加者に8種類の視覚探索および個人特性 に関する質問紙を実施し、階層線形モデルを用いてどのような要因が視覚探索の個人差に寄与しているのかを検討した。その結果、探 索効率の低い課題では、共通して、行動抑制システムに関わる指標が成績に強く影響しており、探索効率の高い課題では、新奇性追求 や協調性といった要因が成績に影響していることが示された。

(OS4-5)

中枢神経系疾患おける認知機能と抑制障害の関連の検討

The relationships between cognitive function and inhibition in central nervous system disease

山上 尚彦 (1); 永井 知代子 (2); 園生 雅弘 (2); 斉藤 史明 (2)

Yamagami, Naohiko; Nagai, Chiyoko; Sono, Masahiro; Saito, Fumiaki

- (1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科 Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba
- (2) 帝京大学医学部付属病院 Teikyo University Hospital

一連の行動を計画して実行する「遂行機能」は主として前頭葉がその機能を担っている事が知られている。その遂行機能の一部として、「関連の無い情報への注意や不適切な行動を抑制する能力」が障害される「抑制障害」の機序については不明な点が多い。読解力やワーキングメモリとの関連が示唆される研究例もあるが、基礎的な研究において実験的な手法によって示唆される例が多く、実際の臨床例のデータは少ない。本院の外来において中枢神経系疾患患者の認知機能検査を実施する際に抑制障害が認められた例においては注意能力や記憶能力など様々な認知機能が要因となっている可能性が考えられた。そこで、本研究は本院での外来における中枢神経系疾患患者の認知機能検査の結果と脳画像を、抑制障害の有無に分けて比較し、抑制障害と関連の深い脳部位および認知機能を検討する事を目的とする。

口頭セッション 5: 社会的認知

[OS5-1]

選択のオーバーロード現象に待機列による焦燥感が及ぼす効果

The effects of impatience by the waiting line on choice overload

松田 憲 (1); 畔津 憲司 (1); 有賀 敦紀 (2)

Matsuda, Ken; Azetsu, Kenji; Ariga, Atsunori

- (1) 北九州市立大学 The University of Kitakyushu
- (2) 広島大学 Hiroshima University

選択のオーバーロード現象とは、過剰な商品選択肢は消費者にかえって負担になり、購買意欲を抑制してしまう現象である。 Haynes (2009) は、タイムプレッシャーによって焦燥感を明示的に与えた場合にオーバーロード現象が生起することを示したものの、その後の研究での追試が成功していない。本研究は、選択を待つ他者の存在によって焦燥感を非明示的に与えることで選択のオーバーロード現象が生起するかを検討した。参加者の半数は、10名の待機列が視界に入る状態で4枚ないし12枚の画像の中から欲しい画像の順位付けを行い、その後に全順位付けに対する満足度と後悔度の評定を行った。残り半数の参加者は、待機列のいない状態で同様の手続きで行った。その結果、選択時に待機列があることで選択のオーバーロード現象が生起した。待機列によって生じた焦燥感が認知的制御を妨害し、効用を最大化するような厳密な論理による選択が阻害されたことによると考える。

(OS5-2)

携帯端末とマトリックス提示はオンライン調査の質を低下させる?

Do mobile device and matrix presentation format spoil quality of data in online survey?

眞嶋 良全 (1); 中村 紘子 (2)

Majima, Yoshimasa; Nakamura, Hiroko

- (1) 北星学園大学 Hokusei Gakuen University
- (2) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University

オンライン調査の回答者は、自己の所有する端末を用い、さまざまな環境下で回答を行う。本研究では、端末の種類(モバイル端末 vs PC)および、心理尺度の提示形式(1 問 vs マトリックス)が調査への回答、特にその質にどのように影響するかを検討した。クラウドソーシングサービスを介して集められた参加者(モバイル端末 n = 520, PC n = 485) はランダムに 1 問またはマトリックス条件に割り当てられ、注意チェック (ACQ)、教示操作チェック (IMC)、日本語版自尊感情尺度 (SE)、日本語版 TIPI-J を含む調査に回答した。その結果、モバイル端末を使用した回答者では、IMC の通過率、SE の内的一貫性、TIPI の下位尺度を構成する項目間の相関が低下することが示された。また、心理尺度における回答の質は、1 問形式に比べマトリックス形式において低下することも示された。

(OS5-3)

言語的確率表現に基づく意思決定 確率的信念の違いを生む文脈効果の検討

Decisions based on verbal probabilities The contextual effect of difference in probabilistic beliefs

本田 秀仁 (1); 松香 敏彦 (2); 植田 一博 (3)

Honda, Hidehito; Matsuka, Toshihiko; Ueda, Kazuhiro

- (1) 安田女子大学 Yasuda Women's University
- (2) 千葉大学 Chiba University
- (3) 東京大学 The University of Tokyo

本研究では、言語的確率表現に基づく意思決定について分析を行い、文脈効果を検討した。具体的には、意思決定者の異なる確率的信念を生み出す文脈の違いによって意思決定がどのように変化するかについて検討を行った。この際、文脈効果は Decision by Sampling モデル(Stewart et al., 2006)によって説明できるという仮説のもと、Decision by Belief Sampling という新たなモデルを提案し、行動実験を実施した上で仮説の検証を行った。結果として、文脈の違いによって意思決定は変化し、またこの変化は Decision by Belief Sampling モデルによって説明できることが示された。

(OS5-4)

逆相関法による政治家の顔ステレオタイプの可視化

Visualizing face stereotypes of Japanese politicians with a noise-based reverse correlation technique

中村 航洋 (1, 2); 浅野 正彦 (3); 渡邊 克巳 (1); 尾野 嘉邦 (4)

Nakamura, Koyo; Asano, Masahiko; Watanabe, Katsumi; Ono, Yoshikuni

- (1) 早稲田大学 Waseda University
- (2) 日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science
- (3) 拓殖大学 Takushoku University
- (4) 東北大学 Tohoku University

政治的意思決定や選挙行動は、政治家の掲げる公約や政策の内容だけでなく、有権者の偏見や政治家の容姿といった、政治とは直接的関連の薄い要因にも左右される。しかしながら、人々がどのような容姿を政治家としてふさわしいと感じ、なぜそれが政治的意思決定に影響を及ぼすのかは明らかにされていない。本研究では、逆相関法を用いた顔画像分類から、日本人が心のなかで想像する政治家の顔ステレオタイプを可視化し、政治家らしいと判断される顔の特性について明らかにすることを目的とした。実験では、2016年の参議院議員選挙候補者の平均顔にランダムノイズを付加した2枚の画像を生成し、実験参加者に「内閣総理大臣」あるいは「防衛大臣」にふさわしい顔つきの写真を繰り返し選択してもらう課題を実施した。参加者の画像分類を逆相関法により解析した結果、各大臣としてふさわしい男性顔および女性顔のステレオタイプを可視化することができた。

(OS5-5)

他者の聴空間知覚の理解を支える身体化プロセス 視空間的視点取得との共通性

An embodied process of understanding others' auditory space percepts The common ground with visuospatial perspective taking

武藤 拓之 (1, 2); 永井 聖剛 (3)

Muto, Hiroyuki; Nagai, Masayoshi

- (1) 京都大学こころの未来研究センター Kokoro Research Center, Kyoto University
- (2) 立命館大学 OIC 総合研究機構 Research Organization of Open Innovation and Collaboration, Ritsumeikan University
- (3) 立命館大学総合心理学部 Department of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University

他者の感覚知覚体験を想像する認知過程は知覚的視点取得と呼ばれる。その中でも視空間知覚の想像(視空間的視点取得)を扱ったこれまでの研究では、他者の視点から見た物体の左右位置を判断する際に、他者の位置まで自己の身体を移動させるイメージが用いられることが指摘されている。その証拠として、自己と他者の視点の角度差が増大するほど反応時間が増加する角度差の効果や、他者の向きに近づくように身体を傾けると処理が促進する姿勢一致効果などが挙げられる。本研究では、視空間知覚だけでなく聴空間知覚の想像時にも同様の身体移動イメージが用いられるか否かを明らかにするために、視覚提示または聴覚提示された刺激の左右位置を他者の視点から回答する課題を用いて2つの実験を実施した。実験の結果、聴覚条件においても視覚条件と同程度の角度差の効果と姿勢一致効果が生じ、視空間と聴空間の視点取得が処理を共有していることが示された。

口頭セッション 6: 記憶

(OS6-1)

ワーキングメモリにおける人種効果の生起因

The cause of cross-race effect in working memory

西村 友佳 (1); 津田 裕之 (2); 小川 洋和 (3)

Nishimura, Yuka; Tsuda, Hiroyuki; Ogawa, Hirokazu

- (1) 関西学院大学大学院文学研究科 Kwansei Gakuin University
- (2) 慶應義塾大学先導研究センター Keio University
- (3) 関西学院大学文学部 Kwansei Gakuin University

自人種顔が他人種顔よりも優位に認識できる現象を人種効果と呼ぶ。本研究は顔画像に対する WM 形成過程のタイムコースを検討することで、記憶容量と符号化速度のいずれに人種効果が表れるかを調べた。実験課題は、自人種顔(アジア人顔)または他人種顔(黒人顔)に対する見本合わせ課題で、記憶刺激の呈示時間を 250 ms から 1500 ms までの 5 段階に設定した。分析では、呈示時間に対する記憶成績(Cowan's K)の変化に対して関数当てはめ($K = a\{1 - \exp(-bt)\}$)を行い、記憶容量(パラメータ a)と符号化速度(t = 0 時点の接線の傾き)を算出した。その結果、自人種顔の方が他人種顔よりも記憶容量が大きく、符号化速度が速かった。この結果から、WM における人種効果の生起には記憶容量と符号化速度の両方が関与していると示唆される。

(OS6-2)

再生に基づく記憶現象のオンライン実験による再現

Replication of recall-based memory phenomena via online experiments

小林 正法 (1)

Kobayashi, Masanori

(1) 山形大学 Yamagata University

本邦においてオンラインを介した心理学実験は増加しつつある。これまでの研究によってオンライン実験の妥当性はある程度示されている。このように、オンライン実験は心理学研究における有用な手法の1つであるものの、いくつかの実験手続きや課題はオンライン実験で利用できないというのも事実である。例えば、再生テストは予測変換機能による支援が生じるため、オンライン実験で利用には適していない。近年、この再生テストにおける問題に対応するプラグインが開発された。しかし、このプラグインの妥当性は不明であった。そこで、本研究ではこのプラグインを用いて、再生テストを指標とする記憶現象(虚記憶、検索誘導性忘却)が再現できるかを検証した。実験の結果、虚記憶、検索誘導性忘却ともに再現された。このように、一定の状況下において再生テストを用いたオンライン実験で実施できることが明らかになった。

ポスター:1日目

[PT1-1]

決断できる人ほど意思決定の基準を区別しない 外的基準が内的基準による意思決定に影響する程度と不決断傾向との関連 Decisive people do not clearly distinguish internal and external decision criteria

朱 建宏 (1); 片平 健太郎 (2); 平川 真 (1); 中尾 敬 (1)

ZHU, JIANHONG; KATAHIRA, KENTARO; HIRAKAWA, MAKOTO; NAKAO, TAKASHI

- (1) 広島大学大学院人間社会科学研究科 Hiroshima University
- (2) 名古屋大学大学院情報学研究科 Nagoya University

日常生活では、外的環境における価値基準に沿って判断する場合があれば(外的基準による意思決定、EDM)、自分の好みや信念により判断する場合もある(内的基準による意思決定、IDM)。朱ら(2019)では計算論モデルを用い、EDM を通して学習した価値が IDM に影響することが示唆されたが、その程度には個人差が存在する。本研究では、EDM で学習した価値が IDM に影響する程度と、意思決定の困難さに関する個人特性である不決断傾向との関連を検討した。その結果、不決断傾向が高い人ほど、EDM で学習した価値が IDM に影響しにくいことが示された。不決断傾向の高さはミスを恐れるなどの完全主義と関わっていることが知られており、そのような特性が EDM における価値と IDM における好みとを明確に分けて意思決定を行うことにつながっている可能性がある。

[PT1-3]

コーヒーとお茶の思考抑制をすると宿題に取り組む学習時間が短くなる

Suppression of intrusive thought about coffee and tea reduces time spent on learning for report task

鍋田 智広 (1)

Nabeta, Tomohiro

(1) 九州女子大学 Kyushu Women's University

大学生参加者が論述課題を実施した。課題はふたつの問題から構成され、各問題は用紙1枚に印刷された。問題の各々が思考抑制条件と統制条件に割り当てられ、参加者は両方の問題に回答した。問題用紙には、問題文と教示文、侵入想起の記入欄が印刷された。思考抑制条件の問題の教示文では、コーヒーとお茶を考えないよう記載された。統制条件の問題では思考抑制の教示は記載されなかった。参加者は各問題の開始時と終了時の時刻を問題用紙に記入した。実験の結果、侵入想起頻度は思考抑制条件が統制条件よりも高かった。取り組んだ時間は思考抑制条件が統制条件よりも短かった。この結果は、思考抑制をしながら記述課題をすることで侵入想起の頻度が高まったこと、加えて思考抑制をした問題では取り組む時間が短くなったことを示している。

[PT1-4]

短期間走行データを用いた高齢ドライバのリスク推定

Estimation of incident risks for older drivers applying short-term naturistic driving data

山岸 未沙子(1)

Yamagishi, Misako

(1) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University

高齢ドライバに関して、同じ年齢群ならば年間走行距離の短い方がリスクが高い Low Mileage Bias (LMB) が提唱され、その一因に認知機能低下による制限が挙げられた。近年では、質問紙による走行距離の正確性への疑問から、実際の走行距離でも実証されている。この実走行データは正確ではあるが、年間ともなれば高コストである。短期間データでも LMB が確認できれば、正確かつ早期に高齢ドライバのリスクを評価できる。本研究では、GPS による距離データからドライバを年間 3000 km 未満、3000 km 以上、月間 250 km 未満、250 km 以上の低群、高群に分類すると共に、走行距離、年齢群、性別で高齢ドライバの crash and near-crash (CNC) の発生を推定した。月間データでも LMB がみられれば、低群の CNC は多く、認知機能も低いはずである。その結果、月間走行距離でも低群の CNC が多いという LMB がみられ、Trail Making Test 成績の低下も示唆されたことから、短期間データでの高齢ドライバのリスク推定への可能性が得られた。

[PT1-5]

嘘による認知的負荷が有効視野に及ぼす効果

Effects of Cognitive Load during Lying on the Useful Field of View

後藤 理咲子 (1); 北神 慎司 (1)

Goto, Risako; Kitagami, Shinji

(1) 名古屋大学大学院情報学研究科 Nagoya University

嘘をつく人は真実を話す人よりも認知的負荷が高いことが知られている。本研究では、認知的負荷量を測定することで虚偽検出が可能であるかを検討するため、その方法として有効視野範囲の測定を用いて実験を行った。嘘をつくとその負荷によって有効視野範囲は縮小することが予測された。はじめに参加者を隠蔽あり群となし群にランダムに分け、隠蔽あり群に対しては嘘をつきそれを隠す課題であると教示した。課題は、提示されるカードを記憶した後に、その内容について一致もしくは不一致の内容を指示に従って回答し、直後に画面上に現れる光点を検出することであった。以上を一試行として96試行行った。その結果、視角18°において隠蔽あり群はなし群よりも光点の正答率が低下した。この結果は、嘘をつく課題によって生じる負荷が有効視野を狭めたことを示しており、有効視野範囲の測定が虚偽検出の方法の一つとして提案できる可能性を示唆するものである。

[PT1-6]

課題無関連な視覚刺激の高低が発声ピッチ反応の高低に与える影響

The influence of irrelevant visual spatial position on vocal pitch response

鈴木 悠介 (1); 永井 聖剛 (1)

Suzuki, Yusuke; Nagai, Masayoshi

(1) 立命館大学 Ritsumeikan University

我々は視覚刺激が高い/低い位置に提示されたときに高/低ピッチでの発声を求められるとき、逆の組み合わせよりも、発声までの反応時間が短くなることを見出し空間位置の高低とピッチ高低に関する情報が知覚および運動反応システムにおいて共有されていることが示唆された(鈴木・永井,2019関西心理学会)。本研究では、視覚刺激の空間位置が課題無関連な場合においても、空間位置高低が発声ピッチ反応に影響を及ぼすのか検討した。実験参加者は、高いまたは低い位置に提示される視覚刺激の色(赤または緑)に対し、高いまたは低いピッチの発声を行うことが求められた。色と発声ピッチの組み合わせは実験参加者間でカウンターバランスされた。実験の結果、課題無関連な視覚刺激であっても空間位置の高/低と発声ピッチの高/低に対応が認められ、同効果の頑健性が示された。

[PT1-7]

高齢者の転倒事例の心理学的要因としての注意配分特性の解明

The attention allocation characteristics as a psychological factor of falling cases of the elderly Clarification

林田 脩平 (1); 伊丸岡 俊秀 (2)

Hayashida, Shuhei; Imaruoka, Toshihide

- (1) 金沢工業大学大学院 Graduate School of Engineering, Kanazawa Institute of Technology
- (2) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology

本研究は、歩行時の若年者と高齢者の身体周囲の視覚処理特性を研究しています。これまで転倒の原因として、「身体面」での変化による影響が確認されていますが、それ以外にも「視野の狭さ」といった認知的な要因も影響することが考えられる。今回の実験では、ルームランナーで若年者と高齢者を歩行させながら身体の正面と斜め下方向の2か所にディスプレイを配置し、attentional visual field task を行った。実験の結果、高齢者において目標刺激の位置を正確に判断することは難しかったですが、大まかな位置の判断は可能であることが示されました。目標刺激の位置を正確に判断する場合において、高齢者では斜め下方向での検出成績に比べ、正面方向での成績が下がる傾向が見られた。また、大まかな位置を判断する場合には、ディスプレイ位置条件による違いが見られないことがわかった。

[PT1-8]

内発的、外発的注意が持続時間知覚と時間的定位に及ぼす影響

Effects of endogenous and exogenous attention on duration perception and temporal localization

勝又 綾介 (1); 一川 誠 (2)

Katsumata, Ryosuke; Ichikawa, Makoto

- (1) 千葉大学大学院融合理工学府 Chiba Univ. Graduate School of Science and Engineering.
- (2) 千葉大学人文科学研究院 Chiba Univ. Faculty of Humanities

空間的注意は、内発的注意と外発的注意のどちらも、注意が向けられた空間的位置の知覚を促進する。勝又・一川 (2018) は、内発的注意と外発的注意における持続時間知覚への影響を検討し、外発的注意を向けた時のみ持続時間伸長効果が生じることを報告した。持続時間伸長効果の基礎過程の解明のため、内発的注意、外発的注意それぞれについて、注意によるターゲット刺激への反応時間と刺激オンセットの知覚的時間定位との関係を調べた。内発的注意、外発的注意のどちらにおいても、注意を向けた位置とターゲットの位置の間の関係に、一致、中立、不一致の3条件を設けた。反応時間は一致、中立、不一致条件の順で短くなり、刺激オンセットの時間的定位も同じ順序で前方にずれた。しかしながら、反応時間と時間的定位との間の相関が認められたのは外発的注意のみであった。持続時間知覚における内発的注意と外発的注意の影響の差異の基礎について議論する。

[PT1-9]

注意範囲の縮小における文脈不一致の影響

An influence of the contextual incongruent to the attentional narrowing

武野 全恵 (1); 北神 慎司 (1)

Takeno, Masae; Kitagami, Shinji

(1) 名古屋大学 Nagoya University

注意範囲の縮小は、恐怖や脅威といった覚醒を伴う場合に生じる考えられている。一方で、覚醒を伴わなくとも文脈に不一致な物体が存在することで注意が縮小し、周辺記憶を悪化させるという報告もある。そこで本研究は、文脈の一致不一致が覚醒度の高低に関わらず、注意の縮小を生じさせるのかについて検討した。実験では、非脅威あるいは脅威である物体と背景画像を組み合わせた刺激の呈示後、Navon 課題を用いて注意範囲の変化を測定した。実験1では物体と背景が意味的に一致せず、かつ出現頻度が低い物体を文脈不一致条件とし、時系列かつ意味的な文脈逸脱が注意範囲を縮小させるかについて検討を行った。実験2では、意味的な文脈の操作を行い、時系列的な文脈不一致の影響について検討した。その結果、実験1でのみ、刺激の覚醒度の高低ではなく、文脈不一致条件で注意範囲が縮小し、文脈が意味的に逸脱する場合に注意の範囲が狭まることが示唆された。

[PT1-10]

二肢強制選択課題における視線手がかり効果

Gaze cueing effect in two-alternative forced choice task

満田隆(1);田中晴哉(1)

Mitsuda, Takashi; Tanaka, Hareruya

(1) 立命館大学 Ritsumeikan University

他者が視線を向けた対象の好意度は高くなることが知られている。しかし近年はこの効果を否定する研究報告もある。他者視線を挟むように二つの対象を左右に並べて提示し、二者択一で選好を行わせると大きな効果が観測されることから、他者視線は好意度とは関わりなく選択にバイアスを生じさせる可能性がある。そこで本研究では、二肢強制選択課題における他者視線の影響の大きさを、選好課題、選嫌課題、客観的課題で比較した。実験の結果、選好課題だけで、視線方向の画像がチャンスレベルよりも有意に高く選択された (p=.014)。また、参加者が初めに視線方向の画像を見た割合は3つの課題でほぼ等しかったが (選好: .71, 選嫌: .70, 客観: .69)、初めに見た画像を選択した割合は選好課題のみチャンスレベルより有意に高かった (M=.57, p=.03)。選嫌課題では負のバイアスが見られなかったことから、他者視線が画像の好意度に与える影響には課題依存性があると考えられる。

[PT1-11]

色情報の活性化が単語処理に及ぼす影響

The Influence of Typical Colors during Word Processing

林韻(1)

LIN. YUN

(1) 広島大学 Hiroshima University

近年、言語の処理や理解において、物体の形や色などの多様な経験的痕跡が活性化することを示す研究により、身体性認知理論が多くの支持を得ている。しかし、この影響を逆方向に検討した研究はまだ少ない。本研究では、プライミング法を用い、中国人上級日本語学習者が単語を処理する際、単語における典型色の色情報の活性化が単語処理に及ぼす影響を検討した。また、単語の形態(漢字単語・かな単語)によって色情報の影響に異なる出方があるか否かについても検討した。実験では、ターゲット単語における典型色・非典型色のついた四角形がプライムとして呈示されてからターゲット単語が呈示され、その単語に対する語彙判断課題が求められた。その結果、単語の形態にかかわらず、典型色による促進効果がみられ、経験的痕跡が言語理解において重要な役割を果たすことが再検証された。

(PT1-12)

物語における三度のくり返しと結末の予測性 交差的妥当性の検証

Predictability of outcome by three times repetition in folktales a cross-validation

井関 龍太 (1)

Iseki, Ryuta

(1) 大正大学 Taisho University

昔話や民話では、同じようなエピソードがくり返し現れることがある。『三匹の子豚』や『山姥』など、典型的にはくり返しの回数は三回であることが多い。そのようなくり返しは、登場人物による目標達成のための試みのくり返しを表しているとされる。そのような観点から考えると、試みを実行する登場人物が変わる場合(三人の兄弟など)には、同じ人物が試み続ける場合よりも目標達成の試みが最終的には成功したり、あるいは、先行する人物のふるまいを厳密に踏襲しなかったために失敗したりすることが考えられる。口承民話を収集した『ハンガリー民話集』をこのような観点から分析したところ、くり返しに登場する人物の異同と最終的な成果の変化に明確な関連は見られなかった(井関、2019、日心大会)。しかし、この結果は分析対象が属する文化に依存する可能性も残る。本研究では『ラテンアメリカ民話集』を分析し同様の結論を得た。

[PT1-13]

文章理解において生成される知覚的表象に関する研究文章の視点の違いによって生成される表象は異なるのか?

On the generation of perceptual representations during sentence comprehension Do the perspectival differences of sentences generate different representations?

細川 亜佐子 (1); 永井 淳一 (1)

Hosokawa, Asako; Nagai, Junichi

(1) 聖心女子大学 University of the Sacred Heart, Tokyo

英語圏の研究 (Borghi, Glenberg, & Kaschak, 2004) では、文章理解時、登場人物の視点からその情景を見るような知覚的表象が生成されると示唆されている。他方、文化的認知様式は心理プロセスに影響を及ぼすとされ、文章理解時の知覚的表象の生成でも認知様式の文化差が反映される可能性がある。本研究は Borghi et al. (2004) を日本語で追試し、表象生成過程における文章の視点の効果を確認し、視点の効果は文化的認知様式を反映しているか検討した。文章(「あなたは車を運転しています。」)が示す対象への視点により、文章と対象の構成部位を表す語(「ハンドル」「タイヤ」)との関連性の反応時間に差が生じるか調べた。Borghi et al. (2004) と同様、文章の視点(内側/外側)と語が示す部位(内側/外側)が一致する場合、一致しない場合より反応時間が短かった。視点に関する言語的手がかりにより知覚処理が活性化され、生成された知覚的表象は、認知様式の違いによらず類似した傾向があると示唆される。

(PT1-14)

若年者との相談は高齢者の信頼性判断の学習を支援する 若年者側のコストとしての顔再認記憶成績の分析

Chattering with a young partner facilitate older adults' trustworthiness learning Young participants' memory score as a cost for chattering with older adults

原田 悦子 (1); 鷹阪 龍太 (1, 2); 田中 伸之輔 (1); 水浪 田鶴 (1); 須藤 智 (3)

Harada, Etsuko; Takawaki, Ryuta; Tanaka, Shinnosuke; Mizunami, Tazu; Suto, Satoru

- (1) 筑波大学 University of Tsukuba
- (2) 静岡大学 Shizuoka University
- (3) 東洋大学 Toyo University

Suzuki(2018) は「いい人/悪い人」の行動を複数回体験する投資信頼ゲームにおいて、高齢者は「個別の相手の信頼性」の学習が困難であることを報告したが、その学習支援として原田ら(2020)は、信頼ゲームの際「高齢者が若年成人と相談できる」効果を検証した。その結果、高齢者の投資ゲーム成績は向上し、その要因として若年成人とのペア実施が高齢者の制御焦点に影響を与えた可能性を示唆した。本研究はそうした学習支援がもたらす負の影響として、若年成人の顔写真再認記憶成績の低下を報告し(実験1)、若年成人同士のペア条件との比較から、その成績低下が若年成人群の年齢の効果、あるいはペアでの課題遂行によるものではなく、「高齢者とペアを組むこと」による効果であることを示した(実験2)。高齢者にとっての若年成人との対話がもたらす利益を強調しつつ、そこに生じる若年成人の対話負荷についても注意をする必要性が示された。

[PT1-15]

目的論的信念の直観性の検討

Investigating the intuitiveness of teleological belief

中村 紘子 (1); 眞嶋 良全 (2)

Nakamura, Hiroko; Majima, Yoshimasa

- (1) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University
- (2) 北星学園大学 Hokusei Gakuen University

目的論とは、「水が存在するのは、地球で生命を生き残らせるためである」というように、自然現象が何らかの目的を持って存在するという考えである。目的論的信念は成人でもみられ (Kelemen & Rosset, 2009)、自然科学者であっても認知負荷がかかると目的論的信念を正しいと判断しやすくなるなど (Kelemen et al., 2013)、対象が目的や意図を持つという目的論的信念は直観的であり、人のデフォルトの説明機序である可能性が指摘されている。本研究では日本人参加者を対象に、目的論的信念と認知的直観性・熟慮性との関係を検討した。その結果、認知負荷のある状態では目的論的信念を正しいと判断しやすく、また、認知的熟慮性は目的論的信念と負の傾向に関係にあることが明らかとなった。日本人においても、自然現象を理解する際に、直観的過程では目的論的信念に従った解釈をしやすい可能性が示された。

[PT1-16]

自己と他者に関する未来思考におけるポジティブバイアスの違い

The difference of positivity bias between self and other oriented future thinking

伊藤 友一 (1, 2); 田仲 祐登 (1); 辻 幸樹 (1, 2); 品川 和志 (1); 柴田 みどり (1); 寺澤 悠理 (1); 梅田 聡 (1)

Ito, Yuichi; Tanaka, Yuto; Tsuji, Koki; Shinagawa, Kazushi; Shibata, Midori; Terasawa, Yuri; Umeda, Satoshi

- (1) 慶應義塾大学 Keio University
- (2) 日本学術振興会 Japan Society for the Promotion of Science

人の思考には時間(過去/未来),感情(ネガティブ/ポジティブ),自己/他者など様々な方向性があり,特に未来に関する思考のポジティブバイアスが多くの先行研究で示されている。しかしながら,それらは個人的な未来の想像を主な対象としており,他者の未来の想像でも同様のバイアスが生じるのかは明らかでない。本研究では、「私(彼)は/将来/試験に…」のように文手がかりを,主語,時間,内容の順に呈示し,自己または他者の未来について思考するよう参加者に求めた。このとき思考の感情価は参加者が任意に決定した。ポジティブ思考数がネガティブ思考数より多いことを以てポジティブバイアスとし,その傾向が自己に関する思考と他者に関する思考との間で異なるかどうか検討した。その結果,他者の遠い未来を想像するときにより強いポジティブバイアスが生じており,自己・他者間で異なる感情処理がなされていることが示唆された。

【PT1-17】

不確実な状況における学習と気質特性計算論モデリングと行動抑制系 / 行動賦活系

Learning under uncertainty and personality traits Computational modeling and BIS/BAS

河原 哲雄 (1)

Kawahara, Tetsuo

(1) 埼玉工業大学 Saitama Institute of Technology

健常な大学生を対象にアイオワギャンブリング課題を実施し、不確実な状況における選択反応の学習データを、強化学習の階層ベイズ計算論モデルにフィッティングした。Prospect Valence Learning(PVL)-Delta, PVL-Decay, Value-Plus-Perseverence(VPP), Outcome-Representation Learning(ORL) の 4 つのモデルのうち、ORL モデルの適合度が最も高かった。ORL モデルの個人別パラメータは、獲得額と損失額の分布特性が異なる 4 つのデッキすべてについて、関連があるものが存在していた。一方、ギャンブル課題と同時に取得した BIS/BAS 尺度日本語版の下位尺度得点は、損失リスクの高いデッキ (A と B) と関連するものしか見いだされなかった。強化学習パラメータと BIS/BAS 下位尺度の間には関連が見られなかった。

(PT1-18)

健常高齢者の局所脳体積に対する PICMOR の介入効果に関する予備的検討

A Pilot Study to Examine the Intervention Effects of PICMOR on Regional Brain Volume in Healthy Older Adults

杉本 光 (1); 大武 美保子 (1)

Sugimoto, Hikaru; Otake, Mihoko

(1) 理化学研究所革新知能統合研究センター RIKEN Center for Advanced Intelligence Project

To improve cognitive functions in older adults, we have developed a social activity-based intervention program, named Photo-Integrated Conversation Moderated by Robots (PICMOR). To examine the intervention effects on cognitive functions, we previously conducted a randomized controlled trial for healthy older adults. In this pilot study, we conducted a follow-up experiment using magnetic resonance imaging (MRI) to provide candidate brain regions that could reflect the beneficial effects of PICMOR on the volume. Results showed that the volume of the lateral prefrontal cortex was significantly greater in the intervention group than in the control group. We also identified greater volume in the intervention group in the medial temporal lobe, posterior middle temporal gyrus, and postcentral gyrus. No regions showed greater volume in the control group than in the intervention group. Future research is needed to confirm this possible intervention effect by collecting and comparing MRI data from the pre- and post-intervention periods.

[PT1-19]

予定の想起に伴う経験に及ぼす想起順序と加齢の影響

Effect of sequential order of remembering and aging on experience associated with remembering of plans

森田 泰介 (1)

Morita, Taisuke

(1) 東京理科大学 Tokyo University of Science

本研究では、展望的記憶課題における意図状態に関する情報の想起に伴う経験が、予定の想起順序や加齢によりどのような影響を受けるのかを検討した。105 名の若齢者及び 102 名の高齢者に、翌日以降の 3 日間に予定されていることを 7 件想起するよう求めた。また、予定を想起した際に、各予定を忘れずに実行せねばならないと感じた程度を評定するよう求めた。その結果、高齢者は若齢者と比較して、予定を忘れずに実行せねばならないと感じる程度が有意に高いことが示された。また、若齢者においては予定を忘れずに実行せねばならないと感じる程度が想起順序によって有意に異なるが、高齢者においては想起順序の効果が認められないことが示された。これらの結果について、展望的記憶課題の実行を支える認知機構、特にコミットメントマーカーと加齢との関係の観点から考察した。

[PT1-20]

時間的展望のバランスが高い者ほどモニタリングのエラーを経験しにくいのか?

The relationship between balanced time perspective and reality monitoring error

橋本 淳也 (1); 柏原 志保 (1, 3); 小林 亮太 (1, 3); 本多 樹 (1); 朱 建宏 (1); 原口 優輔 (1); 山本 一希 (1); 岩佐 康弘 (1); 中 川 莉沙 (1); 庵野 真代 (2); 孫 玥澤 (1); 難波 修史 (1); 中尾 敬 (1)/ Hashimoto, Junya; Kashihara, Shiho; Kobayashi, Ryota; Honda, Tatsuru; Zhu, Jianhong; Haraguchi, Yusuke; Yamamoto, Kazuki; Iwasa, Yasuhiro; Nakagawa, Risa; Anno, Mayo; Sun Yueze; Namba Shushi; Nakao Takashi

- (1) 広島大学大学院教育学研究科 Graduate School of Education, Hiroshima University
- (2) 広島大学教育学部 School of Education, Hiroshima University
- (3) 日本学術振興会特別研究員 Japan Society for the Promotion of Science

時間的展望のバランス(以下、BTP)とは、状況や目標に応じて過去、現在、未来それぞれへの指向をうまく切り替えることを指す。この切り替えにはメタ認知能力が重要であり、BTP とメタ認知の関連が示唆されている。しかし、BTP の高い者が実際にメタ認知の関わる情報処理をうまく行うことができているのかについては明らかとなっていない。そこで本研究では、BTP と日常場面における情報源のモニタリングの失敗(リアリティ・モニタリング・エラー;以下、RM エラー)の経験頻度の関連について質問紙調査を行った。その結果、BTP からの逸脱の程度と RM エラーの経験頻度に正の相関が見られた。このことから BTP が高い者ほど RM をうまく行っていることが明らかとなり、BTP が高い者は実際にメタ認知能力を有していることが示唆される。

[PT1-21]

既知人物の顔の証言に基づく似顔絵描画の検討

Face composite sketch based on testimony of familiar face

渡邊 伸行 (1); 中嶋 敏博 (2); 大久保 敏子 (2); 井上 朝陽 (1); 井上 一浩 (1); 濱村 浩三 (2)

Watanabe, Nobuyuki; Nakashima, Toshihiro; Okubo, Toshiko; Inoue, Asahi; Inoue, Ikko; Hamamura, Kozo

- (1) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology
- (2) 石川県警察 Ishikawa Prefectural Police

本研究は、既知人物の顔をどの程度鮮明に記憶していて、それをどのように言語化しているか、似顔絵捜査の手法を用いて検討することを目的とした。実験では、実験参加者を目撃者役として、ターゲット人物を実験参加者の既知人物とした。石川県警察の似顔絵捜査官が、似顔絵捜査と同じ手法で実験参加者からターゲット人物の証言を引き出し、その証言に基づいて似顔絵を作成した。似顔絵描画後に、実験参加者と実験協力者に、似顔絵とターゲット人物の類似度を評定してもらった。実験は7回実施し、最後の1回のみ、実験参加者に直前にターゲット人物の写真を呈示した。実験の結果、第1回〜第6回で描画された似顔絵の平均類似度が50%前後であったが、第7回のみ類似度が60%を上回った。実験参加者の証言に基づいて、既知人物がどのように記憶されているか考察した。

[PT1-22]

日常における「うっかり忘れ」の事例分類

Case classification of everyday inadvertently forgotten: Memory of lapse with cued/spontaneous retrieval

都賀 美有紀 (1)

Toga, Miyuki

(1) 立命館大学 Ritsumeikan University

「しまった。うっかり薬を飲み忘れた」などと後になってふと自身のし忘れを正しく思い出すことがある。日常のし忘れを思い出す ことは、本来は知っているが一時的に思い出せない記憶エラーと考えられる。本研究ではこれをうっかり忘れと呼ぶ。

先行研究では、うっかり忘れは展望的記憶の問題(山中,2006)あるいはワーキングメモリの処理資源の問題(苧阪,2014)と説明される。しかしながら、分類や背景メカニズムについて体系的な記述はこれまで示されてはいない。

そこで本研究では、178名の大学生を対象に自身のうっかり忘れの出来事の自由記述を求めた。2212件の事例 (M=12.43, SD=5.73) を収集し、梅本・大山・岡本・高橋 (2014) の忘却についての5つの分類項目に分けた(評定者2名)。知識や意図の忘却等既存の項目には当てはまらない事例があったため、抑制の失敗や情報の更新等の新規項目を追加した。追加項目は主に実行機能など日常生活の遂行に関わる機能と考えられる。

(PT1-23)

IRTree モデルを用いた記憶手がかりの形成過程の検討

Examination of the formation process of mnemonic cues using IRTree model

山根 嵩史 (1)

Yamane, Takashi

(1) 川崎医療福祉大学医療福祉学部 Kawasaki University of Medical Welfare, Faculty of Health and Welfare

メタ認知的モニタリングの手がかり利用アプローチによると、学習者が自らの学習過程に関する判断を行う際、学習の進行に伴って、ヒューリスティックな判断の手がかり(記憶手がかり)が形成される。本研究では、単語リストの学習-再認テストを繰り返す実験事態において、各再認課題における参加者の反応に対して、意思決定プロセスの分析モデルの1つであるIRTree モデルを当てはめることで、記憶手がかりの形成過程を検討した。再認課題における反応時間に基づいて参加者の反応を分類し、速い反応と遅い反応において、参加者が同様の判断を行なっていることを仮定するモデルと、別種の判断を行なっていることを仮定するモデルをセッションごとに比較したところ、セッションの進行に伴って後者のモデルが支持されるようになり、判断が分化していくことが確認された。この結果は、記憶手がかりの形成過程を反映するものであると考えられる。

[PT1-24]

意図・偶発学習課題を用いた虚再認の検討

The influence of source monitoring instruction on false recognition using intentional/incidental learning task

中山 友則 (1)

Nakayama, Tomonori

(1) 中央大学 Chuo University

本研究は、意図・偶発学習パラダイムと DRM パラダイムを組み合わせ虚再認について検討を行った。さらにソースモニタリング教示を単語リスト呈示前に行い、虚再認が減少するかどうかを検討した。これまでの研究から、ソースモニタリング教示によって虚再生は比較的減少することが示されている。一方、虚再認においては、記憶テスト直前のソースモニタリング教示は有効ではないことが示されている。実験の結果、単語リスト呈示前のソースモニタリング教示は教示が無かった統制条件と比べ虚再認が増加した。また、正再認率も高くなっていることから、単語リスト呈示前のソースモニタリング教示は、記憶テスト時の判断基準を緩めることに繋がった可能性が考えられる。再生と再認で異なる結果が出ていることから、それぞれの課題に合わせた教示の必要性が今後の検討課題である。

[PT1-25]

意図的忘却に及ぼす手がかりと代替思考の連合強度の影響

The effect of associative strength between cues and thought substitutions on intentional forgetting

深井 健登 (1); 井上 和哉 (1) Fukai, Kento; Inoue, Kazuya

(1) 東京都立大学 Tokyo Metropolitan University

Think/No-Think パラダイムより、記憶した単語対(手がかり語ー対応語)について、手がかり語が呈示されたときに対応語を繰り返し考えないようにすることで、その対応語を意図的に忘却できることが示されている。このパラダイムを用いた研究では、対応語を考えないようにするために、対応語とは別の単語(代替思考)を想起するという代替思考方略が有効であることが分かっている。代替思考方略による忘却のメカニズムの一つに干渉説がある。干渉説によると、手がかり語と代替思考の連合強度が手がかり語と対応語の連合強度よりも強くなることで、対応語の想起が阻害され、忘却が生じる。そこで本研究では、代替思考と手がかり語の連合強度によって忘却量が異なるかを検討した。実験では代替思考として、手がかり語と意味的関連性の高い単語と低い単語を呈示し、新たに手がかり語と対連合学習させ、それらの忘却効果を比較した。

[PT1-26]

音声の言語的符号化が話者同定の成績に与える影響 音声の特徴や印象とセリフ内容に着目して

Influence of verbalization of voice on speaker identification performance Focused on voice feature-impression and contents of utterance

井上 晴菜 (1)

Inoue, Haruna

(1) 法政大学大学院 Hosei University Graduate school

音声の特徴や印象を言葉に置き換える言語的符号化は話者の正同定率を低下させることが分かっている。この現象を言語隠蔽効果といい,先行研究では音声の特徴や印象を言語化することでその効果を検討している。しかし,音声には,「特徴や印象」の他,「セリフ内容」の情報がある。このことから,従来の研究で示された音声の言語隠蔽効果は,言語化すること自体による効果なのか,言語化の対象に依存した効果なのかが不明確である。よって,本研究では,音声の特徴や印象を言語化する群,セリフ内容を言語化する群,言語化を行わず計算課題を解く群で検討したが,言語隠蔽効果は生じなかった。その理由として,音声の提示方法が挙げられる。言語隠蔽効果は,本研究のような1つの音声を単独で提示するショウアップ形式より,比較判断が可能な複数の音声を提示するラインナップ形式で顕著に現れる可能性が考えられ,今後これに関する研究が期待される。

【PT1-27】

既有知識に反する誤りの学習の持続性

Persistent effect of learning errors that contradict prior knowledge

関口 貴裕 (1); 野本 佳弘 (2)

Sekiguchi, Takahiro; Nomoto, Yoshihiro

- (1) 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 The united graduate school of Education, Tokyo Gakugei University
- (2) 東京学芸大学大学院教育学研究科 Graduate school of education, Tokyo Gakugei University

意味記憶に関する近年の研究は、一般知識に反する情報に触れることで、それが誤りだと知っているにも関わらず、その後の一般知識テストにおいて誤情報を回答しやすくなることを報告している(既有知識に反する誤りの学習;Bottoms et al, 2010)。先行研究において我々(関口・赤井、2019)は、この現象が、誤情報を正誤判断問題(例:ニュートンはピサの斜塔で落体の法則の実験を行った \rightarrow ×)で提示した場合でも生じることを示した。これを受けて本研究では、正誤判断から一般知識テストまでの遅延期間を操作することで、既有知識に反する誤りの学習の持続性を検討した。その結果、遅延期間 1 週間条件では、5 分条件に比べ、一般知識テストにおける誤情報の回答率は低下したものの、依然として誤情報の回答が見られることが確認され、この現象が短期間で消失するものではなく、少なくとも一週間は持続することが明らかとなった。

(PT1-28)

視覚的イメージスタイルと空間的配置の記憶能力との関係

Relationship between visual image style and spatial memory performance

田中光 (1); 中條 和光 (1); 貞國 そら (2)

Tanaka, Hikaru; Chujo, Kazumitsu; Sadakuni, Sora

- (1) 広島大学教育学研究科 Hiroshima University Graduate School of Education
- (2) 広島大学教育学部 Hiroshima University School of Education

言語的に呈示された空間的な位置関係に関する記憶課題を用い、視覚的イメージスタイル質問紙(Visual Imagery Style Questionnaire: VISQ,川原・松岡(2009))の空間イメージ尺度の内容的妥当性を検討した。同記憶課題では,位置関係を言語的に記憶していても回答可能な非統合問題と,イメージ化して記憶した場合に回答が容易になると考えられる統合問題で構成されていた。大学生,大学院生 43 名を対象に,集団実験として,2 つの物の位置関係を示す刺激文 6 文を読ませ,1 文で示された物の配置について答える非統合問題と2 文の情報を統合した場合に回答可能となる統合問題に回答させた。両問題の成績を目的変数とし,物体イメージ尺度と空間イメージ尺度の評定値を説明変数とした重回帰分析を行った結果,統合問題の成績に対してのみ空間イメージ尺度が有意に正の影響を与えていた。このことから,空間イメージ尺度が空間的な配置を記憶する能力を測定していることの妥当性が示された。

[PT1-29]

日常生活場面での記憶自己効力感と検査室場面での記憶成績の予測

Memory self-efficacy in everyday life and prediction of memory performance in test rooms

清水 寬之 (1)

Shimizu, Hiroyuki

(1) 神戸学院大学 Kobe Gakuin University

本研究は、さまざまな記憶場面状況における記憶のモニタリングとコントロールの機能を認知心理学的に評価しようとする総合的研究の一環として行われた。大学生92名を対象に個別的に、メタ記憶質問紙の一種である成人用メタ記憶尺度(Metamemory in Adulthood questionnaire, MIA)を用いて日常生活場面での記憶自己効力感と、検査室場面でのリバーミード行動記憶検査(Rivermead Behavioral Memory Test, RBMT)における成績予測の正確さとの関係を検討した。その結果、MIAを構成する因子のなかで、「課題」、「不安」、および「支配」において、リバーミード行動記憶検査の特定の下位検査の成績予測の正確さとの間で有意な正の相関があることが示された。

(PT1-30)

非日本語母語話者による再認実験での正確さと確信度評定の関連性

Relationship between accuracy and confidence ratings in recognition judgments by non-Japanese native speakers.

日隈 美代子 (1); 久保田 貴之 (1); 漁田 武雄 (1)

Higuma, Miyoko; Kubota, Takayuki; Isarida, Takeo

(1) 静岡産業大学経営学部 Shizuoka Sangyo University, School of Management

非日本語母語話者による再認実験を行い、日本語母語話者による実験で確認した正答率と確信度評定の乖離が、非日本語母語話者の再認実験でも確認されるのか検討するとともに、日本語母語話者と非日本語母語話者の再認結果の比較を行った.意味的関連性を持たせた学習刺激を聴覚提示し再認実験を行った.実験参加者は、女性話者による録音を用いた聴覚提示により24単語を学習した.保持期間後に48単語(旧項目24単語、新項目24単語)を聴覚提示し、再認判断と確信度評定を行った.その結果、名義的新旧反応では、日隈・漁田(2015)での日本語母語話者による実験結果と同様に、名義的新項目で正答率と確信度評定が乖離した.一方、主観的新旧反応においては、日本語母語話者での結果とは違い、すべての反応で反応率と確信度評定が乖離した.

【PT1-31】

ネガティブ画像の記憶は誤情報の影響を受けやすい Porter, ten Brinke, Riley, & Baker (2014) の追試研究

Emotionally negative pictures increase the susceptibility to misinformation A replication of Porter, ten Brinke, Riley, & Baker (2014)

丹藤 克也 (1)

Tandoh, Katsuya

(1) 愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University

ネガティブ事象の記憶は誤情報の影響を受け歪みやすいという PNE (paradoxical negative emotion) 仮説が提唱されている。Porter et al. (2014) は、同一の画像刺激に対して異なる説明文を呈示することで、喚起される感情を操作する実験手法を用いて、PNE 仮説に一致する結果を報告している。本研究では、Porter et al. (2014) と異なる画像刺激を用いて、彼らの実験結果の再現性を検討した。説明文によって同一の画像刺激に対して異なる感情を喚起した後、画像内容に関して誤情報を含む誘導質問か、誤情報を含まない非誘導質問のいずれかを行った。遅延後に最終的な記憶テストを実施した結果、存在した項目に関する誤情報効果はポジティブ・中性画像と比べてネガティブ画像で大きかった。これらの結果は概ね、PNE 仮説を支持するものであった。

[PT1-32]

検索誘導性忘却と自伝的記憶の想起内容との関連

The Relationship Between The Retrieval-Induced-Forgetting Effect and The Autobiographical Memories

蘇 心寧 (1); 兵藤 宗吉 (2)

- SU, Xinning; HYODO, Muneyoshi
- (1) 中央大学文学研究科 Graduate School of Letters, Chuo University
- (2) 中央大学文学部 Faculty of Letters, Chuo University

検索誘導性忘却で反映された記憶抑制はネガティブな出来事の想起を防ぐと考えられてきた。本研究では、検索誘導性忘却と自伝的記憶の想起内容との関連を検討した。検索誘導性忘却効果はネガティブな出来事の想起数との間には負の相関、想起された記憶の感情価との間には正の相関があると認められた。この結果によって、検索誘導性忘却はネガティブな記憶の想起を抑制するのみならず、想起された記憶内容の感情価がポジティブになることを促進すると示された。つまり、記憶抑制と感情調節との関連性が示唆されたといえる。

[PT1-33]

語り直しにおける認知転換能力の高さは内的な問題解決能力を予測するのか

Does tendency to use cognitive change with biased retelling predict internal problem-solving ability?

池田 和浩 (1); 佐藤 拓 (2); 川崎 弥生 (3)

Ikeda, Kazuhiro; Sato, Taku; Kawasaki, Yayoi

- (1) 尚絅学院大学 Shokei Gakuin University
- (2) 明星大学 Meisei University
- (3) 早稲田大学 Waseda University

本研究では、(1) 記憶の語り直し方略と大学生の自己開示の深さの関係、(2) 語り直し方略と自己制御特性の関係、(3) 語り直し方略と精神健康の関係の 3 点を検証した。167 名の参加者は、Re-TALE 尺度(ネガティブ感情制御(α = .90)、ポジティブ感情拡張(α = .75)、認知転換(α = .87))、ツァン自己評価式抑うつ性尺度,自己開示の深さを測定する尺度(レベル I: α = .84、レベル II: α = .85、レベル III: α = .89、レベル IV: α = .91)、バランス型社会的望ましさ反応尺度(自己欺瞞; α = .78、印象操作; α = .71)、セルフコントロール尺度短縮版(α = .80)に回答した。分析の結果、認知転換の高さは自己欺瞞特性と正の相関を示し精神的な健康の維持に寄与していたが、個人の否定的性格や能力といった深い自己開示には関与しなかった。

[PT1-34]

自伝的懐かしさ・文化的懐かしさが購買意図に与える影響

The effects of autobiographical nostalgia and cultural nostalgia on intention to purchase

向居 暁 (1)

Mukai, Akira

(1) 県立広島大学 Prefectural University of Hiroshima

本研究の目的は、実験的に喚起された「自伝的懐かしさ」や「文化的懐かしさ」が、消費者の購買意図にどのように影響するのかを明らかにすることであった。実験参加者(女性のみ)を、十数年前に人気を博したドラマや漫画などの画像が呈示された「自伝的懐かしさ群」、昭和30年代の映画などの画像が呈示された「文化的懐かしさ群」、実験実施時に放送されていたドラマなどの画像が呈示された「二ュートラル群」に分け、口紅やリップグロスに対する購買意図が測定された。その結果、自伝的懐かしさ群では、強い懐かしさが喚起され、懐かしさ感情におけるポジティブ感情とリラックス感情が高まり、懐かしさに関する変数が購買意図の得点に影響を与えていることが明らかになった。しかしながら、文化的懐かしさの群ではそのような傾向は認められなかった。

[PT1-35]

自伝的記憶特性質問紙 (AMCQ) 日本語版開発の試み (1)

A Development of the Japanese Version of Autobiographical Memory Characteristics Questionnaire (1)

山本 晃輔 (1); 槙 洋一 (2); 瀧川 真也 (3); 清水 寛之 (4)

Yamamoto, Kohsuke; Maki, Yoichi; Takigawa, Shinya; Shimizu, Hiroyuki

- (1) 大阪産業大学 Osaka Sangyo University
- (2) 北海道大学 Hokkaido University
- (3) 川崎医療福祉大学 Kawasaki University of Medical Welfare
- (4) 神戸学院大学 Kobe Gakuin University

個人が過去に経験した出来事に関する記憶の総体は自伝的記憶と呼ばれ、その構造やメカニズムの解明を目指し、これまで多くの研究が行われてきた。近年、Boyacioglu & Akfirat (2015) は、従来の複数の質問紙を統合し、新たに自伝的記憶特性質問紙 (Autobiographical Memory Characteristics Questionnaire, 以下 AMCQ) を開発し、注目を集めている。本研究では、この AMCQ の日本語版を開発することを目的とした。大学生 715 名を対象に、中学生時代の卒業式についての想起を求め、日本語に訳した AMCQ を実施した。その結果、全項目について Cronbach の α 係数を算出すると α =.80 であり、一定以上の信頼性が確認された。原版どおりの 14 因子を指定した確証的因子分析を行い、適合度を算出したが十分な値は確認されなかった。また、探索的因子分析を複数回行い、8 因子解と 5 因子解を見出したが、これらについても適合度を算出したところ、いずれの因子解もそれぞれの適合度が低く、適切なモデルは示唆されなかった。

[PT1-36]

情動喚起語に対する評定による符号化の効果 III 喚起された覚醒度と刺激に内包された覚醒度との比較 Effects of encoding by rating for emotional words III Comparing evoked arousal to inherent arousal

藤田 哲也 (1); 加藤 みずき (2)

FUJITA, Tetsuya; KATO, Mizuki

- (1) 法政大学 Hosei University
- (2) 多摩大学 Tama University

藤田・加藤(2018、認知心)の一連の研究から、情動喚起語が持つ属性としての覚醒度だけでなく、覚醒度評定行動自体が符号化の効果を持つこと、そしてその効果は音韻的処理よりも優れることが示された。さらに、藤田・加藤(2015)は、評定を求める際に「その刺激によって参加者か喚起されたもの(喚起)」と「その刺激自体に内包されているもの(内包)」とを区別し、刺激の感情価および覚醒度の評定を求めた後の情動喚起画像の再生成績をそれぞれ比較した。その結果、喚起と内包はことなる情動を測定していることが示唆された。本研究では情動喚起語を対象に、評定の種類(喚起 vs. 内包)の要因を加え、覚醒度評定を行った後の再生成績を比較したが、主効果・交互作用とも有意ではなかった。

【PT1-37】

情動喚起語に対する評定による符号化の効果 IV 喚起された感情価と刺激に内包された感情価との比較 Effects of encoding by rating for emotional words IV Comparing evoked valence to inherent valence

加藤 みずき (1); 藤田 哲也 (2)

KATO, Mizuki; FUJITA, Tetsuya

- (1) 多摩大学 Tama University
- (2) 法政大学 Hosei University

本研究では、情動喚起語の感情価について、藤田・加藤(2020、認知心;前件発表)と同様に、喚起評定と内包評定の比較を行った。その結果、評定以前の刺激の属性(覚醒度×感情価)の交互作用が有意となり、再生成績はポジティブ語では高覚醒<低覚醒となったのに対し、ネガティブ語では、高覚醒>低覚醒となった。それに加えて、前件発表とは異なり、評定の種類×覚醒度の交互作用が有意となり、喚起評定では、高覚醒≦低覚醒となったのに対し、内包評定では、高覚醒≧低覚醒となった。以上をまとめると、情動喚起語に対する評定による符号化の効果は、それが覚醒度に対するものか感情価に対するものか,あるいは喚起されたものか内包されたものであるかによって異なるといえる。

(PT1-38)

乾杯動作における眼・手腕協調過程

Eye-hand coordination when doing a toast

江口 健太 (1); 福井 隆雄 (1)

Eguchi, Kenta; Fukui, Takao

(1) 東京都立大学大学院 Tokyo Metropolitan University

本研究では、乾杯動作における眼・手腕協調過程と自閉傾向(AQ スコア)との関連を検討した。対人なし条件、対人あり・アイコンタクトなし条件、対人あり・アイコンタクトなし条件、対人あり・アイコンタクトなり条件を設定し、対人なし条件では固定グラスに対して、対人ありの2条件ではパートナーが把持した固定グラスに対して乾杯動作の視線・手腕動作計測を行った。またアイコンタクトあり条件では、乾杯の際にパートナーとアイコンタクトをするように教示した。その結果、対人なし条件において、AQ スコアが高い参加者ほど手首の最大速度が有意に小さかったが、対人ありのいずれの条件でもそのような傾向は認められなかった。このことから対人の有無による速度調整が自閉傾向により影響を受けることが示唆された。

[PT1-39]

空間的視点取得と他者の心的経験の推測との関連 透明性錯覚パラダイムを用いて

A link between spatial and social perspective taking An investigation with the illusion-of-transparency paradigm

神原 歩 (1); 武藤 拓之 (2, 3)

Kambara, Ayumi; Muto, Hiroyuki

- (1) 京都先端科学大学 Kyoto University of Advanced Science
- (2) 京都大学こころの未来研究センター Kokoro Research Center, Kyoto University
- (3) 立命館大学 OIC 総合研究機構 Research Organization of Open Innovation and Collaboration, Ritsumeikan University

「相手の立場にたつ」という言葉は、相手の心的経験を推測することを意味する。比喩ではなく文字通り受け取るなら、相手の(物理的な)立ち位置からの眺めを推測すること(空間的視点取得)を意味するだろう。これまでの研究結果を概観すると、これら空間的視点取得と他者の心的経験推測とのプロセスは、自分の経験(見え)を初期値とし、そこから調整して自分のそれとは異なる他者の経験(見え)を推測するという共通点が認められる。そこで本研究は、空間的視点取得能力と、他者の心的経験の推測が正確さには関連があると仮説を立て、それを検討した。学部生 45 名を対象に、透明性錯覚の実験パラダイムを用いて、各参加者の他者の心的経験の推測の正確さを測定した。続いて、空間的視点取得課題を行った。その結果、空間的視点取得課題成績が高い人ほど、他者の心的経験の推測が正確であることが示唆された。

[PT1-41]

メディアの視聴経験がリスク認知に及ぼす影響

Effects of media viewing experience on risk perception

富髙智成 (1); 山本晃輔 (2)

TOMITAKA, Tomonari; YAMAMOTO, Kohsuke

- (1) 京都医療科学大学 Kyoto College of Medical Science
- (2) 大阪産業大学 Osaka Sangyo University

本研究では、メディアの視聴経験がリスク対象への態度に及ぼす影響を検討するために、診療放射線技師を主人公としたテレビドラマの視聴経験の程度と CT 検査およびその放射線に対する態度について調査した。ドラマは週に 1 回、1 クール(約 3 か月)全12 回放映され、調査時期はドラマの放映終了約 1 か月後であった。調査では、CT 検査およびその放射線に対する態度質問紙 (e.g., Tomitaka et al.,2016) と、ドラマの視聴経験の程度やストーリーやキャストの好感度などを評定させた。視聴経験の程度をもとに、調査対象者を視聴者(2. あまり視ていない~5. 全て視た)66 名と非視聴者(1. 全く視たことがない)182 名の 2 群に分類した。2 群間における質問紙の因子平均値を比較した結果、「CT 検査とその放射線に対する不安・恐怖」因子の得点は視聴者が非視聴者よりも低い傾向がみられた。この結果から、メディアの視聴経験はリスク対象への感情に影響を及ぼす可能性が考えられた。

(PT1-42)

駅コンコースに存在するリスクに対する駅係員の認知とその影響要因について

Station staff's recognition of the risks in station concourse

小倉 有紗 (1); 和田 一成 (1)

OGURA, Arisa; WADA, Kazushige

(1) 西日本旅客鉄道株式会社 安全研究所 Safety Research Institute, West Japan Railway Company

本研究では、鉄道駅係員の「職場環境に存在するリスクに対する認知過程」に着目し調査を行った。参加者は 10 代~50 代の駅係員 74 名であった。はじめに、イラスト課題として、混雑した駅コンコースのイラストを提示し、気がかりに感じることを「報告シート」に自由に記述するよう求めた。イラスト課題の後、質問紙調査を実施した。

質問紙結果の因子分析により、「職場環境のリスクに対する態度」として5因子が得られたが、このうち「ルールや経験の参照の重視」のみが、イラスト課題の成績(気がかりの指摘数)に影響を与えていた。また、年齢の高い参加者の方が有意に多くの気がかりを指摘し、背景やハザードが具体的な結末に至る過程など記述される内容も多彩になっていた。さらに参加者自身の経験とイラスト課題の回答には関係があることが示唆され、駅係員の職場や日常生活における経験が、リスクを含む環境に対する認知に影響すると考えられた。

[PT1-43]

懐かしい自伝的記憶の共有が会話や相手の印象に及ぼす影響

Influences of sharing nostalgic autobiographical memory on impressions of the conversation and the partner

杉森 絵里子 (1); 楠見 孝 (2)

SUGIMORI, Eriko; KUSUMI, Takashi

- (1) 早稲田大学(人間科学学術院)
- (2) 京都大学

自伝的記憶に対する感情がポジティブな人とネガティブな人との間で、懐かしい自伝的記憶を共有した際に抱く会話や相手への印象に見られる違いについて検討した。高齢者と大学生に対して、懐かしさ傾向尺度を用いて、自伝的記憶に対する感情がポジティブかネガティブかで群わけをし、ポジティブ群同士2名ペア(PPペア)と、ポジティブ群1名とネガティブ群1名からなるペア(PNペア)を作成した。ペアごとに、過去の懐かしい食べ物やその匂いに関する思い出について語り合った後、会話と相手に対する印象を5段階評価で回答させた。その結果、高齢者と大学生ともに、会話に関しては、PNペアのネガティブ群が他の群と比較して「簡単でない」と回答する傾向が、相手に関しては、PNペアのポジティブ群が、他の群と比較してネガティブな印象を持つことが明らかになった。

[PT1-44]

視覚 - 嗅覚の多感覚知覚が視覚探索に与える影響の検討

The effect of the odor on visual attention in multi-sensory perception

山﨑 好純 (1, 2); 山口 真美 (1)

Yamazaki, Yoshizumi; Yamaguchi, Masami

- (1) 中央大学文学部人文社会学科 Faculty of Letters, Chuo Univ.
- (2) 京都大学大学院人間・環境学研究科

近年の視覚 - 嗅覚の多感覚知覚研究は嗅覚情報が対応する視覚オブジェクトのボトムアップ処理に影響を及ぼすことを主張してきた。しかし古典研究において匂いは曖昧な知覚表象であるとされ、嗅覚情報が視覚から一方的に利得を受け取る関係しか存在しないのではないかとされてきた。以上のことから視覚情報処理,とりわけ注意において嗅覚情報が視覚処理に与える影響については不明な点が多く残る。本研究では予備実験にて嗅覚刺激の強度と快不快度を統制した上で,Chen et al(2013) の手続きをもとに視覚 - 嗅覚の多感覚知覚状況下での視覚探索課題の成績を,呈示される匂いと標的刺激が一致する条件と,一致しない不一致条件とで比較した。その結果,先行研究とは異なり,条件間で探索成績に違いは見られなかった。この結果は嗅覚刺激が曖昧な知覚表象であるとする従来の多感覚知覚研究における知見を支持する。

(PT1-45)

形容語 - 名詞句の理解に対する名詞の属性の影響

The influence of noun's attributes on understanding adjective-noun phrase

安陪 梨沙 (1); 服部 雅史 (2)

Abe, Risa; Hattori, Masasi

- (1) 立命館大学大学院人間科学研究科 Ritsumeikan University Graduate School of Human Science
- (2) 立命館大学総合心理学部 College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University

「赤いリンゴ」「黒いリンゴ」「速いリンゴ」は、いずれも形容詞と名詞の組み合わせであるが、理解のしやすさは同じではない。本研究では、藤木・井上・中篠 (2007) の用いた属性 (色, 形など) と値 (赤, 黒など) の概念に基づいて、この理解度の差を実験的に検討した。形容語 - 名詞句を、属性と値が共に代表的なもの (典型名詞句)、属性は代表的だが値は代表的ではないもの (非典型名詞句)、属性と値が共に代表的ではないもの (他属性名詞句) の3種類に分類した。実験では、これらの形容語 - 名詞句について、それぞれの理解度、普段の使用頻度、またその反応時間を計測した。結果として、属性と値の組み合わせによって点数、反応時間に違いが生じた。このことから、属性と値の代表性による典型、非典型、他属性の分類は適切であったことが裏づけられること、各名詞句の理解過程において、名詞の属性と値の代表性の影響自体は存在することが言える。

[PT1-46]

若年者と高齢者の忘れたことに関する記憶の比較

Comparison of memory for forgotten events between young and older adults

松田 崇志 (1)

Matsuda, Takashi

(1) ルーテル学院大学

高齢者が訴える記憶に対する不安は忘れたという記憶の失敗経験の想起により生じると考えられる。本研究では、若年者と高齢者を対象に、そのような「忘れたことに関する記憶」を実験的に測定し、その特徴を明らかにすることを目的とした。まず、記憶課題を行った。その後、忘れたことに関する記憶を形成するために、フィードバックを与え、参加者による答え合わせを行うことを求めた。次に、メタ記憶判断課題として、学習刺激と新奇刺激を呈示し、それらが記憶課題において「思い出せたもの」か「忘れたもの」,あるいは「新奇」かの判断を求めた。その結果、高齢者は若年者よりも記憶課題成績の正確な判断が困難であり、自身の記憶成績のメタ記憶判断に加齢の影響があることが示唆された。さらに、高齢者は新奇項目を「忘れた」と誤って判断しており、侵入エラーの誤判断が、高齢者の記憶成績に対するネガティブな認知の原因の一つである可能性が示唆された。

[PT1-47]

親子ペアの色と形の連合が似ているか?

Children and their parents share color-shape associations?

陳娜 (1); 渡邊 克巳 (2)

Chen, Na; Watanabe, Katsumi

- (1) 国立障害者リハビリテーションセンター研究所
- (2) 早稲田大学

形と色が系統的に関連付けられることは広く知られている(例えば、円 - 赤、三角 - 黄、四角 - 青)。しかし、色と形の連合のがどのように形成されてされているのか、あるいはどのように発達するのかについてはほとんど知られていない。特に、子どもが親と同じように色と形の連合を示すかどうかについては不明であった。本研究では、親子ペアの色と形の連合を調査することを目的とした。60名の子供および60名の成人(親子は五十九組)色と形の連合のアンケート調査を参加した。結果では、8歳前後の子どもは、大人と似たようなパターンで色と形の連合が見られることが示された。しかし、親子間での色と形の連合についてはほとんど一致していなかった。これらの結果は、環境や生得的要因が、色と形の連合に及ぼす影響が限定的であることを示唆している。

(PT1-48)

懐かしさが時間評価に与える影響

Effects of nostalgia on time estimation

大寺輝 (1);田中章浩 (1)

OTERA, Hikaru; TANAKA, Akihiro

(1) 東京女子大学大

感情が 1 分といった時間の長さの感じ方 (時間評価) に与える影響について、先行研究では恐怖感情を喚起していると 1 分が経たないうちに 1 分が経過したと感じるといった知見が得られている。本研究では、時間評価に記憶が関わることから、記憶によって認知過程が支えられている懐かしさに着目し、懐かしさが時間評価にどのような影響を与えるのか検討した。実験は浅草花やしき、東京ドームシティアトラクションズ、東京女子大学で実施した。参加者が 1 分経ったと感じたときにストップウォッチを止めるよう教示し、その後感情や時間の感じ方を測定する質問紙に回答させた。その際に恐怖が喚起されていた参加者を恐怖条件、懐かしさが喚起されていた参加者を懐かしさ条件、両者ともに喚起されていなかった参加者を中立条件とした。現在までの実験結果によると、懐かしさ条件が中立条件よりも産出された時間が有意に短くなることがわかった。

(PT1-49)

所属する組織の権威差と個人の知識差が威圧的発言に与える影響

The effect of power and knowledge on intimidating behavior

堀下 智子 (1); 小倉 有紗 (1)

HORISHITA, Tomoko; OGURA, Arisa

(1) 西日本旅客鉄道株式会社 安全研究所

会社間の契約交渉のような、異なる組織に属する個人間のコミュニケーション場面では、所属する組織の力関係を背景に不適切な言動(発言や要求)が行われる場合がある。本研究では、この背景要因を明らかにするため、会社間の契約交渉を模擬した課題(堀下・小倉 (2019) を改良)を用いて実験を実施した。交渉は PC 上で行われ、実験参加者は発注者の立場で受注者(実際にはプログラムによる自動応答)と交渉を行った。会社間の権威差(あり/なし)と個人間の知識差(あり/なし)の2つの要因を操作し、参加者が交渉中に用いる威圧的発言数を比較した。その結果、権威差の主効果が認められ、権威差がある(発注者>受注者)場合には、権威差がない(発注者=受注者)場合と比べて威圧的な発言を多く用いることが示された。しかし堀下・小倉 (2019) と同様に、知識差については影響が認められなかった。

[PT1-50]

「拡散者にならないで」は「拡散しないで」よりもコロナの感染拡大防止に効果的なのか?

Is warning 'Don't be a spreader' more effective to prevent the COVID-19 pandemic than 'Don't spread'?

米満 文哉 (1, 2); 池田 鮎美 (1, 2); 吉村 直人 (1); 高嶋 魁人 (1); 森 優希 (1); 佐々木 恭志郎 (3); 錢 琨 (4); 山田 祐樹 (5)

Yonemitsu, Fumiya ; Ikeda, Ayumi; Yoshimura, Naoto; Takashima, Kaito ; Mori, Yuki; Sasaki, Kyoshiro; Kun, Qian; Yamada, Yuki

- (1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
- (2) 日本学術振興会特別研究員 Japan Society for the Promotion of Science
- (3) 関西大学総合情報学部 Faculty of Informatics, Kansai University
- (4) 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター Institute of Decision Science for a Sustainable Society, Kyushu University
 - (5) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

コロナ禍において、三密の回避といった感染予防行動を市民が自発的に実践するよう促すことは重要である。先行研究では、アイデンティティを強調する文章を呈示することで人の行動が変容しやすくなることが示されている。そこで本研究では、アイデンティティを強調した教示文が新型コロナウイルスへの感染予防意図や行動の変化に有効か検討した。参加者は「拡散者にならないで」(拡散者条件)、「拡散しないで」(拡散条件)、教示文なし(統制条件)のいずれかの条件に割り当てられ、厚生労働省のガイドラインに基づいた感染予防の意図尺度と行動尺度に回答した。その結果、感染予防意図と行動のどちらの変化にも条件間に有意差は見られなかった。この結果を、効果の大きさ、天井効果、操作チェックなどの観点から考察し、より効果的で説得力のあるメッセージングを用いた今後の手法について議論する。

[PT1-51]

COVID-19 流行による衛生マスク効果の変容

The COVID-19 epidemic has altered the sanitary-mask effect

鎌谷 美希 (1); 伊藤 資浩 (2, 3); 宮崎 由樹 (4); 河原 純一郎 (1)

Kamatani, Miki; Ito, Motohiro; Miyazaki, Yuki; Kawahara, Jun-ichiro

- (1) 北海道大学
- (2) 東京大学
- (3) 日本学術振興会
- (4) 福山大学

衛生マスクを着用することで、着用者の顔の魅力が総じて低下することが報告されている(衛生マスク効果: Miyazaki & Kawahara, 2016)。これは、マスクによって顔の一部が遮蔽されることと、マスクから想起される不健康さの2要因によって生じるとされていた。しかし、COVID-19流行でマスクの着用が常態化したことにより、マスクから想起される不健康さがその色にかかわらず低減している可能性がある。本研究では、白・黒マスク着用者に対する信念の調査(研究1)、および素顔と白・黒マスク着用顔の魅力評定実験をおこなった(研究2,3)。その結果、COVID-19流行前よりも流行後において、マスクの色にかかわらず、その着用者に対して不健康だと回答する人が減少した。また、マスク着用者に対する不健康さの知覚の低減に伴い、衛生マスク効果のうち、遮蔽の効果のみが魅力評定値に影響を与えていた。衛生マスク効果の変容は、不健康だと考えられていた黒色マスク着用顔に対してもみられた。

ポスター:2日目

[PT2-1]

VR 実験心理学研究:仮想身体の触覚が身体所有感に及ぼす影響 アバターに対するフルボディイリュージョンを用いた検討 VR experimental psychology: The effect of tactile sensation to virtual body on ownership The examination using full-body illusion for avatar

花島 諒 (1, 2); 大山 潤爾 (1, 2)

Hanashima, Ryo; Ohyama, Junji

- (1) 産業技術総合研究所 National Institute of Advanced Industrial Science and Technology
- (2) 筑波大学大学院人間総合科学研究群 Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

自己身体ではないマネキンやアバターなどの擬似身体モデルに対して自己身体であるという身体所有感が生起されるフルボディイリュージョンは,擬似身体と実身体との視覚や触覚等の多感覚の同期や形態類似性が関係すると言われている。一方で,擬似身体を動かしているという感覚である運動主体感が錯覚に与える影響が示唆されている。本研究では,実際の身体位置から離れた3人称視点で提示された男性形状のアバターに対する運動の視覚的同期と物体接触時の触覚情報の呈示を操作し,錯覚生起への影響を検討した。その結果,運動が視覚的な同期をして知覚される条件で,運動主体感が生起された。また,その条件に加えて,アバターへの形態類似性が高いと考えられる男性の実験参加者で,かつ,身体運動が視覚と触覚の多感覚情報として同期呈示された場合において,身体所有感が生起されることが示唆された。

[PT2-2]

「四季」と「色」のイメージ的結びつきによって誘発されるストループ様効果

An image connection between season and color can elicit a Stroop Like effect

朝岡 陸 (1); 浅倉 萌楓 (2); 小島 治幸 (2)

Asaoka, Riku; Asakura, Moeka; Kojima, Haruyuki

- (1) 東北大学 Tohoku University
- (2) 金沢大学 Kanazawa University

文字情報処理が色情報処理に干渉する現象はストループ効果と呼ばれ、多くの研究で議論されてきたが、文字と色が異なるものを指す場合にこのような効果が現れるかどうかは不明瞭である。本研究では文字と色がイメージ的に強い結びつきを持つものとして、四季を表す文字とそれと結びつきの強い色を用い、ストループ様効果が観察されるかどうか検討した。予備実験から、春と桃色、夏と水色、秋と茶色、冬と白色にそれぞれイメージ的結びつきがあることがわかった。本実験ではこれらの文字と色を使用し、ストループ課題を行った。実験1ではボタン押しによる回答、実験2では口頭音読による回答をそれぞれ求めた。その結果、ストループ様効果は観察された一方、色情報が文字情報処理に干渉する逆ストループ様効果は観察されなかった。よって、イメージの結びつきによってもストループ様効果が誘発されることが示唆された。

[PT2-3]

VR 空間における移動物体の手腕モデルへの衝突による擬似触知覚

Subjective feeling of pseudo-haptics induced by collision of a moving object with arm-hand model in virtual reality

品田 涼平 (1); 福井 隆雄 (1)

Shinada, Ryohei; Fukui, Takao

(1) 東京都立大学大学院 Tokyo Metropolitan University

VR 空間における接近物体が手腕モデルへ衝突する際の速度変化やその衝突位置が擬似的触知覚の生起強度にどのように影響するかを検討し、個人特性との関連も探るため自閉症スペクトラム指数(AQ スコア)を算出した。実験では、VR 空間を左から右に水平に移動する灰色の円柱物体が白い円柱物体に沿って一定の速さで流れ、白い物体に触れている手腕モデルの周辺で初速度から 0.3, 0.5, 0.7 倍に減速する映像を提示した。参加者は VR 空間の手腕モデルと一致するように手腕を台の上に置き、各試行後に 5 段階の主観的評価を行った。独立変数として減速の最も小さい 0.7 倍条件の評価値 (X1), 0.3 倍条件と 0.7 倍条件の評価値の差 (X2), 従属変数として AQ スコア (Y) を用いて重回帰分析を行い、Y に対して、X1 は負の、X2 は正の有意な関連を示した。減速率による擬似触知覚は AQ スコアにより調節されることが示唆された。

[PT2-4]

内受容感覚の個人差が身体イメージ変換過程に与える影響

Effect of individual differences in interoception on the transformation process of body imagery

笹岡 貴史 (1); 廣瀬 健司 (1)

Sasaoka, Takafumi; Hirose, Kenji

(1) 広島大学脳・こころ・感性科学研究センター Brain, Mind, and KANSEI Sciences Research Center, Hiroshima University

自己の身体イメージには、自己の身体に関する感覚である内受容感覚が関わっており、その個人差が身体イメージの変換過程に影響を与えていることが予想される.

そこで、正面/背面から見た人物が挙げている手が右手か左手かを判断させる課題成績と、参加者の心拍に様々な遅延を加えた音列を提示し、自己の心拍かどうかを回答させる心拍弁別課題から得られた指標との関係を検討した.

その結果、心拍弁別課題で自己の心拍と答える遅延時間の範囲が大きい参加者ほど、画像平面上で時計回りに90°回転させた人物の腕の左右判断の際、正面像と背面像の間の反応時間の差が大きかった。また、心拍弁別課題において自己の心拍と一致していると答えるバイアスが大きい参加者ほど、正立(0°)した人物の正面像と背面像との間の反応時間の差が大きかった。以上の結果に基づき、内受容感覚の個人差が身体イメージの変換過程に与える影響について考察を行う。

[PT2-5]

方向音痴を誇りたい 町並み評価課題による検討

A mechanism of "no sense of direction" Examination on sensory evaluation of a townscape

伊丸岡 俊秀 (1); 松村 信哉 (1)

Imaruoka, Toshihide; Matsumura, Shinya

(1) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology

方向音痴の人は「方向感覚が劣る」、「注意散漫」、「何も見ていない」など何かに劣っている人であると扱われることが多いが、それは偏った見方であり、実は優れたところがあるのではないか。本研究ではこのような仮説のもとで、ある町並みの 3D ビュー動画を刺激として方向音痴群と非方向音痴群に対して光景視聴時の視線計測と SD 法による評価課題を行った。その結果、評価結果から抽出された因子には群間の違いが見られ、非方向音痴群では評価に町並みを構成する建造物の形状や材質が影響しているのに対して、方向音痴群では町並みに関する感性的評価が影響しているという可能性が示された。

[PT2-6]

フォントが香りの印象に与える影響

The effect of font type on fragrance impression

中村 樹 (1); 西山 めぐみ (1)

Nakamura, Miki; Nishiyama, Megumi

(1) 人間環境大学 University of Human Environments

近年になり、柔軟剤や芳香剤など日常的に香りを楽しむための商品が多様化しており、香りに対する注目が高まっている。坂井 (2006) は、人間は視覚的に香りの源を知り、これにより形成された先入観が香りの感じ方に影響を及ぼすとしている。また、綾部 (2011) では形の特徴が香りの強度に影響を及ぼすことが報告されており、視覚刺激が嗅覚情報処理に影響を及ぼすことが示唆されている。そこで本研究では、香りを付与した商品のパッケージのデザイン(視覚的特徴)が香りの印象に及ぼす影響について検討することを目的とした。本研究では、商品のパッケージを構成するデザインの要素の1つである書体 (フォント) に注目し、フォントの視覚的特徴(丸みのある文字、角のある文字)が香りの印象にどのような影響を及ぼすかについて検討した。その結果、香りと同時に呈示するフォントの種類によって、香りの好ましさや強度、印象に影響を与えることが明らかになった。

[PT2-7]

ヒーローは右上を向くか? 顔の向きが印象に及ぼす影響の文化差

Do people tend to judge that a person looking up-and-right looks more heroic?

作田 由衣子 (1)

Sakuta, Yuiko

(1) 実践女子大学 Jissen Women's University

人は顔を見ると自動的かつ瞬時に様々な印象を知覚する。顔そのものの物理的特徴のみならず、照明条件や角度、姿勢などの外的要因によっても印象は変化する。Frimer & Sinclair (2016) によれば、ガンジーなどの道徳的ヒーローは右上を向いた写真が多いこと、また、右上を向いた写真はより温かみがあり英雄的であるなどの印象を抱かれやすいことなどが明らかとなった。しかし、そうした効果が普遍的なものであるか欧米独自のものであるかは不明である。本研究では、日本人を対象として、同一人物で左上を向いた写真と右上を向いた写真で印象を比較した。その結果、右上を向いた写真はより未来を見ており誇らしげであると感じられるが温かみや英雄的印象は感じられないこと、日本人はアメリカ人よりも時間が左から右向きに流れていると判断する傾向が強いことなどがわかった。日本人は左右の向きと時間的な印象のみが関連しており、英雄的印象とは関連しないことが推測される。

[PT2-8]

自我同一性(斉一性・連続性)の認知的基礎

Cognitive bases of Ego-identity (Sameness-Continuity)

板垣 文彦 (1)

Itagaki, Fumihiko

(1) 亜細亜大学 Asia University

前頭葉の成熟期である青年期は自我同一性の確立の時期でもある。先行研究では、ワーキングメモリの視点から前頭葉機能を評価する課題として注目されてきた乱数生成課題によって自我同一性の確立の背景に存在する認知機能特性を明らかにしようと試みた。その結果、自己の斉一性・連続性の感覚の維持に関わるワーキングメモリの活動が確認された。これらの側面は学生の印象評価において「成熟度」と関係があることが明らかになっているが、乱数生成課題においてはワーキングメモリ評価以外の特別な簡易指標が見出された。本研究では、この新しい指標の解釈について論じる。

[PT2-9]

人工オブジェクトの機能カテゴリは上位カテゴリよりも速く活性化する? Go-noGo 課題による反応時間の比較

Do functional categories of man-made object activate faster than superordinate categories? Comparison of reaction times by Go-noGo task

太田 直斗 (1); 北神 慎司 (1); 厳島 行雄 (2)

Ota, Naoto; Kitagami, Shinji; Itsukushima, Yukio

- (1) 名古屋大学大学院情報学研究科 Graduate School of Informatics, Nagoya University
- (2) 日本大学文理学部 College of Humanities and Sciences, Nihon University

私たちはオブジェクトを目にしたとき、たとえば「ハサミ」を「文具」や「刃物」とも認識できるように、様々な様式でオブジェクトを認識することができる。その中で、Rosch et al. (1976) はオブジェクトのカテゴリで最もよく使用されるカテゴリが存在することを明らかにし、それを基本カテゴリ (e.g. ハサミ) と呼んだ。先行研究では、基本カテゴリは上位カテゴリ (e.g. 文具) よりも速く認識されるということを、処理時間の比較などを通して明らかにしてきた。しかし、そうした先行研究は人工オブジェクトの機能を反映する上位のカテゴリ (e.g. 切る) についての検討をほとんど行なってこなかった。そこで本研究では、提示時間を操作した GonoGo 課題で機能カテゴリ、基本カテゴリ、上位カテゴリに基づくオブジェクトの判断時間を比較し、機能カテゴリの活性化の速さを検討した。その結果、機能カテゴリの活性化の速さが上位カテゴリよりも速いという可能性が示唆された。

[PT2-10]

物体の大きさを喚起する意味情報が到達把持運動に及ぼす影響

Effect of semantics on reach-to-grasp movements

保田 晃人 (1); 福井 隆雄 (1)

Hota, Akito; Fukui, Takao

(1) 東京都立大学大学院 Tokyo Metropolitan University

本研究では、物体の大きさに関する意味情報が到達把持運動にどのように影響を及ぼすかを検討した。表面に「大」または「小」と書かれた木製物体(大きさは、2 cm、5 cm、8 cm の 3 種類を設定)に対する到達把持運動課題を実施し、その運動学的特性を解析した。その結果、物体の大きさは同一であるにも関わらず、指間距離最大値は「小」よりも「大」と書かれた物体のときに大きくなる傾向が見られ、指間距離最大速度は「小」よりも「大」で有意に大きくなった。また、条件間での指間距離の時間的変化を比較したところ、「小」よりも「大」をつかむときに指間距離が運動の前半段階で大きくなる効果が認められた。英語やイタリア語を用いた先行研究同様の結果が、日本語を用いた本研究においても認められた。

[PT2-11]

電車内の動的案内表示における最適呈示時間と認知速度の関連性

Relationship between appropriate presentation duration and recognition speed in dynamic train guide display

高瀬 愛理 (1, 2); 大山 潤爾 (2, 1)

Takase, Airi; Ohyama, Junji

- (1) 筑波大学大学院 University of Tsukuba
- (2) 産業技術総合研究所 National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST)

本研究は、デジタルサイネージによる電車内動的案内表示の情報を正確に読み取るのに要する時間と主観的にちょうど良いと感じられる呈示速度の検討を目的とした。14名(平均年齢 25.64歳)の参加者を対象として、乗車中を想定した7種類の質問からランダムに呈示し、対応する案内表示画像を一画面分呈示して参加者が正答するまでに要する時間を測定した。また、一画面あたりの呈示時間とループ数を操作して実物のように複数の画面を逐次呈示し、評価(速すぎる/遅すぎる)を参加者に求め、ちょうど良いと感じられる呈示時間を算出した。その結果、一画面から情報を得るのに要する時間(約7142ミリ秒)は、主観的にちょうど良いと感じられる一画面当たりの呈示時間(約2100ミリ秒)よりも長かった。本研究では、これらの時間と複数アイテムの認知速度との関連性も検討した。

[PT2-12]

左向きの物体画像は右向きの物体画像よりも好まれる

The left-side view of a familiar object is preferred to the right-side view of the same object

水原 啓太 (1); 柴田 春香 (2); 入戸野 宏 (1)

Mizuhara, Keita; Shibata, Haruka; Nittono, Hiroshi

- (1) 大阪大学大学院人間科学研究科 Graduate School of Human Sciences, Osaka University
- (2) 大阪大学人間科学部 School of Human Sciences, Osaka University

左右対称な物体において,正面から見た画像よりも,斜めを向いた画像のほうが好まれる (Nonose et al., 2016)。斜め向きの画像は、物体についての多くの情報を表すため,見た目が良く感じられると考えられている。本研究は,左右対称な物体の画像において,物体の左右の向きが物体の選好に与える影響について検討することを目的とした。オンライン実験で,左右の向きのみが異なる日常物体100個の画像を対提示し,見た目が良いほうの画像を強制選択してもらった。画像は物体が正面を向いた状態から,鉛直軸に関して左右のどちらかに30°回転した画像と,それを左右反転した画像であった。その結果,左向きの物体を選好する割合は平均61.2%であり,有意に偏っていた。物体ごとに検討しても左向きよりも右向きのほうが有意に好まれた物体はなかった。この結果について,物体の操作可能性や左方光源優位性の観点から考察した。

[PT2-13]

「蛇の回転」錯視における刺激位置・画像ぼけ・移動方法の効果

The effect of stimulus position, blur, and motion type on the rotating snakes illusion

鐘 サン (1); 光藤 宏行 (1)

ZHONG, CAN; Mitsudo, Hiroyuki

(1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

本研究は、画像の特徴が周辺視ドリフト錯視の効果に及ぼす影響を検討することを目的とした。刺激画像は「蛇の回転」図形に基づく4色蛇の円盤からなるパッチであり、注視点の周りに円形パスに沿って回っている動きをもつ刺激を実験参加者に呈示した。異なる刺激に対して、知覚される錯視強度を評定尺度法で評価する課題を行った。10名の参加者から得られた結果を分析したところ、刺激呈示位置は錯視効果に有意な影響を与えなかったが、画像ぼけと動き方の間には交互作用があった。錯視図形がジャンプして動く場合、画像ぼけが少ないほど錯視強度が高くなった。錯視図形がスムーズに動く場合、ぼけ操作の単純主効果は見られなかった。この結果は、画像の呈示位置は蛇の回転錯視に影響を与えないが、ぼけおよび動き方は重要な要因であることを示唆する。

(PT2-14)

ア・カペラのコーラスに対する協和感評価に"音色"が及ぼす影響声音とピアノ音の和音の比較

An Influence of "Timbre" for Estimation of Feeling of Consonance of Chorus in A Cappella A Comparison between Voice Sound Chord and Piano Sound Chord

後藤 靖宏 (1)

GOTO, Yasuhiro

(1) 北星学園大学 Hokusei Gakuen University

ア・カペラにおけるコーラスがどのように評価されるのかということを明らかにするために、音色が和音に対する協和感評価に及ぼす影響を、音楽熟達度の影響に照らして調べた。実験参加者にコーラス音声である声音とピアノ音の2種類の和音を聞かせ、7件法で協和感評価させた。その結果、音色と和音の協和度は相互に影響を与え合っており、声音の不協和音はピアノ音のそれよりも不協和に感じにくいことが分かった。また、和音の協和度と音楽熟達度も相互に影響を与え合っており、音楽熟達者の方が、和音の協和度に対してより精緻な協和感評価をすることが示された。さらに、和音に対する好みの評価は、基本的には協和感の評価と同様になされ、コーラスの協和感がア・カペラ作品全体の評価に関わっている可能性も明らかになった。今後は、声音に近い楽器音との比較とともに、歌い手がどのように自身の演奏を評価しているかについても検討する必要がある。

(PT2-15)

オブジェクトの抽出と強調処理による高臨場感画質の開発

Development of high presence image by object extracting and emphasis processing

武田 信治 (1); 上泉 悠 (1); 廣田 健 (1); 宮嶋 進 (1); 山本 洋紀 (2); 延原 章平 (3); 齋木 潤 (2); 熊田 孝恒 (3)

Takeda, Shinji; Kamiizumi, Haruka; Hirota, Takeshi; Miyajima, Susumu; Yamamoto, Hiroki; Nobuhara, Shohei; Saiki, Jun; Kumada, Takatsune

- (1) パナソニック株式会社 Panasonic Corporation
- (2) 京都大学大学院人間·環境学研究科 Kyoto University, Graduate School of Human and Environmental Studies
- (3) 京都大学大学院情報学研究科 Kyoto University, Graduate School of Informatics

本研究は、目の前でスポーツを見ているような臨場感をテレビのスポーツ映像視聴でも得られる新しい映像処理方法を開発することを目的とする。視聴者の視線が主にスポーツ選手に集中するという事実に注目し、映像処理として、映像内の選手の領域をオブジェクトとして抽出し、ガンマ変換により輝度とコントラストを変更するという単純な処理を行った。この手法の有効性を評価し最適な変換を決定するために、変換の程度が異なる6つのバージョンの画像を同時に画面に表示して、観察者に臨場感の順にランク付けしてもらう実験を行った。その際、マルコフ連鎖モンテカルロ法(MCMC法)を使用して、Plackett-Luce選択モデルでランキング結果を分析し、標準のガンマ補正を上回る画質処理を実現した。こうして開発したオブジェクト強調処理を施した新映像を従来処理の旧映像と比べると、新映像の方が臨場感があるという結果が得られた。

(PT2-16)

バイオロジカルモーションの知覚処理過程における両眼網膜像差の役割

The role of binocular disparity in perceptual processing for biological motion

陳 聡頴 (1); 光藤 宏行 (1)

CHEN, CONGYING; Mitsudo, Hiroyuki

(1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

人は三次元のバイオロジカルモーションの左右運動方向を知覚する時、両眼網膜像差で提供された奥行き情報を用いることが先行研究から示唆されている。しかし両眼網膜像差の具体的な役割はまだ不明であるため、本研究では、バイオロジカルモーションの知覚処理における両眼網膜像差がどのような役割を果たすかを検討した。前または後ろに動くポイントライトウォーカーを刺激として、実験参加者は赤青眼鏡を用いて三次元のウォーカーの運動方向の左右を判断した。バイオロジカルモーションの知覚処理において像差があればバイオロジカルモーションの左右運動方向を判断しやすくなるという仮説を立てた。実験の結果、像差の効果は倒立×後ろの場合で見られ、立てた仮説は支持されなかった。今後の研究では両眼網膜像差の役割をさらに検討することが必要であると考えられる。

(PT2-17)

窓外景色と内装スタイルの印象調和が室内雰囲気評価に及ぼす効果

Effects of the harmony between window view and interior style on the evaluations of a room's indoor atmosphere

伊師 華江 (1); 桃澤 崚介 (1)

Ishi, Hanae; Momozawa, Ryosuke

(1) 仙台高等専門学校 National Institute of Technology, Sendai College

窓からの眺めの違いは室空間の雰囲気などの感性評価に影響を与えることが示されている(伊師ら、2017)。本研究は内装 2 種類 (洋風と和風)を設定し、窓から見える景色との印象調和が室内雰囲気評価に与える影響を分析した。各内装と印象調和の高い景色、低い景色を予備調査結果に基づいて選定し、それらを窓外景色として合成した洋風および和風の室空間 C G を制作した。それらを評価対象として 36 名の評価者が S D 法による室内雰囲気の評価を行った。主因子法を用いた因子分析の結果 2 つの因子が抽出され、プロマックス回転後の因子パターンからそれぞれ居心地感、華やかさ感と命名した。合成得点を用いた分析の結果、印象調和の高い窓外景色の場合、洋風内装では快適感および華やかさ感が高まり、和風内装では快適感のみが高まった。以上から、室空間と窓外景色の印象調和は室内雰囲気評価に影響を及ぼすこと、その影響は内装によって異な可能性が示唆された。

[PT2-18]

複数の道具使用が身体近傍の空間知覚へ与える影響

The effect of simultaneous use of tools on peri-personal space perception

平澤 直哉 (1); 伊丸岡 俊秀 (1)

Hirasawa, Naoya; Imaruoka, Toshihide

(1) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology

私たちの身の回りには身体を拡張する道具がある。身体を拡張する道具を長期的に使用すると、その道具を使用した行動の精度が向上することがある。このような現象は道具の身体化と呼ばれており、この原因は道具が身体表象に組み込まれるためだと考えられている。本研究では、複数の道具を同時に使用したとき、身体表象に与える影響が相互作用を引き起こすかを検討した。その結果では複数の道具使用時には行動の精度が低下することが示された。これは、身体化した道具の表象の大きさ、及び大きさの推定に対して同時使用した道具が影響を与えた可能性を示している。

(PT2-19)

歩行運動中の視覚情報が距離知覚に与える影響の方向特異性

Direction specificity of the effect of visual information during walking on distance perception.

粟生山 仁 (1); 伊丸岡 俊秀 (1)

Aoyama, Jin; Imaruoka, Toshihide

(1) 金沢工業大学 Kanazawa Institute of Technology

この実験では、Multimodally Specified Energy Expenditure (MSEE) が距離知覚に及ぼす影響を調べた。 MSEE は、光学的距離とエネルギー消費量によって決定され、トレッドミル上の歩行によって意図的に変化させることができると知られている。予備実験では、MSEE が遅い歩行速度でも距離知覚に影響することを調べた。その結果 MSEE が距離知覚に影響したのは、速い歩行速度の条件 (4km/h) でのみであった。本実験では、MSEE が方向に特異的かどうかを調べた。その結果、MSEE の影響を確認できず、方向特異性を確かめるに至らなかった。

[PT2-20]

隠そうとする意図が時間知覚に与える影響

Effects of the intention to conceal on time perception

入戸野 宏 (1); 松本 あや乃 (1); 松田 いづみ (2)

Nittono, Hiroshi; Matsumoto, Ayano; Matsuda, Izumi

- (1) 大阪大学 Osaka University
- (2) 青山学院大学 Aoyama Gakuin University

知っているのに知らないと嘘をついて隠すことは、回避したい状況であり、緊張を伴う。Gable & Poole (2012) は、強い接近動機づけを生じさせる刺激の提示時間は短く知覚されると提案した。この知見の反対がなりたつなら、強い回避動機づけの下では時間を長く感じるかもしれない。本研究では、模擬窃盗によって取得した物品を実験者に検出されないように隠すときに時間知覚が変化するかを検討した。36名の大学生・大学院生に、3種類の物品(窃盗した物品1つと同じカテゴリーの別の物品2つ)の写真をランダムな順序で1枚ずつ提示し、その提示時間を、基準となる時間と比べて「長い」「同じ」「短い」の3択で判断するように求めた。その結果、模擬窃盗を行った条件では、模擬窃盗を行っていない条件に比べて、提示されるすべての物品の時間が長く知覚された。しかし、窃盗した物品が、同じカテゴリーの別の物品よりも長く知覚されるという結果は得られなかった。

[PT2-21]

癒しの感覚をもたらす心理的変化 -2 種類の癒しについての検討-

Psychological changes that bring lyashi sensation. —Examination of two types of lyashi—

布井 雅人 (1); 高橋 衿那 (1)

Nunoi, Masato; Takahashi, Erina

(1) 聖泉大学 Seisen University

近年、「癒し」という言葉は広く受け入れられているが、その用途は多岐に渡る。そこで本研究では、癒しの感覚をもたらす心理的変化について検討した。実験では、癒しをもたらすと考えられる行為を3分間行い、その前後での心理状態(緊張覚醒・エネルギー覚醒・快感度)と癒し度の変化を検討した。実験1では、速さと正確さが求められる計算課題実施後からの癒しを検討し、実験2では、退屈なキー押し課題実施後からの癒しを検討した。実験の結果、実験1では緊張覚醒の低下が、快感度の上昇を媒介して癒し度の上昇に影響を及ぼしていた。実験2では緊張覚醒の低下とエネルギー覚醒の上昇の両者が、快感度の上昇を媒介して癒し度の上昇に影響を及ぼしていた。これらより、癒しという感覚に、緊張が緩和されることによってもたらされる鎮静的な側面と、エネルギーが湧き、元気が出てくるということによってもたらされる覚醒的な側面があることが明らかになった。

[PT2-22]

攻撃性の種類によって多次元的な共感性との関連は異なるか?

The relationships between the multidimensional empathy and aggression differ depends on the type of aggression

柏原 志保 (1, 2); 難波 修史 (1); 中尾 敬 (1)

Kashihara, Shiho; Namba, Shushi; Nakao, Takashi

- (1) 広島大学大学院教育学研究科 Hiroshima University
- (2) 日本学術振興会特別研究員 JSPS Research Fellowship for Young Scientists

共感性と攻撃性の関連を調べた研究では、共感性が低いと攻撃性が高いことを示唆する報告と、共感性の高さと攻撃性の高さの関連を示唆する報告とがあり一貫していない。近年、共感性を認知的・感情的側面に分類し、次元別に攻撃性との関連が検討されているが、共感の多次元性が着目される一方で、攻撃性の種類の影響は考慮されてこなかった。そこで本研究では、攻撃内容や動機によって攻撃性を分けて捉え、攻撃性の種類別に多次元的な共感性との関連を調査した。その結果、内容、動機いずれで分類した場合でも、攻撃性の種類によって共感性との関連は異なっていた。また、感情的共感に関わる因子である共感的関心は様々な攻撃性と負に関連していたが、感情的共感に関わる別の因子である個人的苦痛とは攻撃性との関連の方向が一致しなかった。よって、攻撃性の種類を考慮した上で、攻撃性と多次元的な共感性の関連を詳細に検討することの重要性が示唆された。

[PT2-23]

シャーデンフロイデの喚起に及ぼす親しさと値する信念の影響

The Role of Closeness and Deservingness in Triggering Schadenfreude

孫 詩榕 (1); 楠見 孝 (1)

Sun, Shirong; Kusumi, Takashi

(1) 京都大学 Kyoto University

Schadenfreude, "pleasure-in-others'-misfortune", showed lots of connections with negative emotions, and researchers focused on schadenfreude triggered by enemies or rivals, but little was mentioned about schadenfreude triggered by friends. Two studies reviewed schadenfreude in friendship and hostile relationship. Two hundred and two college students (118 females, 84 males) answered online survey which included real-life based scenarios and personality scales in Study 1. Results showed that conflict was necessary to evoke schadenfreude in friendship. Schadenfreude was predicted positively by narcissistic personality, and negatively by self-esteem. Forty-eight college students (24 females, 24 males) participated in experiments which included self-report of schadenfreude episodes in Study 2. Results showed that schadenfreude was evoked when misfortune was perceived deserved, and would be mediated by intimacy. High superiority of target would lower feeling of schadenfreude in real life. Japanese culture-specific "iikimi" represented close to "malicious pleasure", and differ from traditional schadenfreude measured by "pleasure" in previous studies.

[PT2-24]

マネキン課題を用いた幼児顔に対する潜在的な接近傾向の検討

Measuring Implicit Approach Motivation for Infant Faces by the Manikin Task.

富田 瑛智 (1); 八木 佑都 (1); 入戸野 宏 (1)

Tomita, Akitoshi; Yagi, Yuto; Nittono, Hiroshi

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科 Graduate School of Human Sciences, Osaka University

ベビースキーマの特徴を持つ幼児顔は、かわいいと感じられ、接近動機づけを高めるとされる。幼児顔と接近動機づけの関係については、主観評定や注視時間に関する研究が行われてきた。本研究では、潜在的な接近 - 回避傾向を測定するマネキン課題を用いて、幼児顔に接近しようとする行動傾向が存在するかを検討した。40名の大学生・大学院生が、幼児顔と成人顔を用いたマネキン課題を行った。また、得られる効果が顔特有の全体処理に影響されるかを検討するため、正立顔条件に加えて倒立顔条件も実施した。実験の結果、正立顔条件では、幼児顔に対して接近傾向が、成人顔に対して回避傾向が有意に認められた。一方、倒立顔条件では、幼児顔に対する接近傾向は変わらなかったが、成人顔に対する回避傾向は有意ではなくなった。以上の結果は、幼児顔に接近しようとする潜在的な行動傾向があること、その効果は顔特有の全体処理によるものではないことを示している。

[PT2-25]

嫌悪のスーパースプレッダー ―ヒトを介した道徳性嫌悪のベクター感染―

Super-spreaders of Disgust

池田 鮎美 (1); 山田 祐樹 (2)

Ikeda, Ayumi; Yamada, Yuki

- (1) 九州大学人間環境学府 Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University.
- (2) 九州大学基幹教育院 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

道徳的に嫌悪される人物と物理的に接触した対象は、その人物の非道徳性に感染し、嫌悪され回避されるようになる。このような 道徳性嫌悪の感染では病原体感染の回避行動と同様の反応が生起するが、ヒトからヒトへの感染における詳細な特性は不明である。そ こで、本研究ではヒトを介した道徳性嫌悪感染の感染力の強さと感染経路、及びそれらに対する感受性の影響を検討した。結果、感染 や嫌悪に対して敏感な群は道徳的嫌悪人物にタッチされた人物との接触を拒否し、この傾向は中立的な人間を複数経由しても維持され た。また、道徳的嫌悪人物と視覚的に密着して呈示された中立的人物は、離して呈示された中立的人物より有意に接触を嫌悪された。 したがって、ヒトからヒトにおける道徳性嫌悪の感染は、視覚的密着が感染経路として成立し、中立的な人物を複数経由しても嫌悪や 感染に敏感な個人には嫌悪感が維持されるという可能性が示唆された。

[PT2-26]

畏敬の念が拡散的思考に及ぼす影響

Influence of Awe on the Divergent Thinking

澤田 和輝 (1); 野村 理朗 (1)

Sawada, Kazuki; Nomura, Michio

(1) 京都大学大学院教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

大自然や偉大な人物などの,既存の認知的枠組みの更新を必要とする広大な刺激に対し生じる感情反応を畏敬の念と呼ぶ.先行研究より,畏敬の念は認知的制約からの解放を促し,拡散的創造性を高めることが示されているが,その詳細な心理学的機序については不明な点が多い.とりわけ,いくつかの快感情が拡散的思考を促進することを考慮すると,未検討である他の快感情との比較検討を行う必要がある.したがって,本研究では、学生21名を対象に、VR動画による感情導入(畏敬/楽しさ/中性)と、日用品の創造的な用途を生成する代替用途課題を用いて,先行研究であるChirico et al. (2017)の概念的追試を行い,畏敬の念が拡散的思考に及ぼす影響について検討した.その結果、畏敬条件において,統制条件よりも,創造性得点(e.g.,流暢性)が高かった.この結果は,先行研究の結果を再現するだけでなく,他の快感情に見られない畏敬特有の効果を示唆している.

[PT2-27]

速聴が思考速度と感情に及ぼす影響

Effects of speed listening on thought speed and emotion.

中村 風雲 (1); 入戸野 宏 (1)

Nakamura, Fuma; Nittono, Hiroshi

(1) 大阪大学大学院人間科学研究科 Graduate School of Human Sciences, Osaka Univ.

感情状態が認知処理に影響を及ぼすことはよく知られている。特に、ポジティブ感情の下では、注意焦点が拡大することが示されている。Pronin, Jacobs, & Wegner (2008)は、速読や再生速度の速い映像の聴取などで、参加者の思考速度を加速させると、ポジティブ感情が誘発されると報告した。この結果は、認知処理が感情状態に影響を及ぼすことを示唆している。本研究では、速聴を用いて思考速度を加速させるとポジティブ感情が誘発されるか検討した。感情測定には多面的感情状態尺度短縮版を用いた。また、注意焦点の範囲を大域 - 局所課題を用いて測定した。その結果、速いスピードで文章を聞いた群では、通常のスピードで同じ内容を聴いた群に比べて、「驚愕」と「敵意」の得点が有意に高くなり、「非活動的快」の得点が有意に低くなった。思考速度の自己評価や大域 - 局所課題の成績に有意差はなかった。以上の結果は、速聴は全体的にネガティブ感情を誘発することを示している。

[PT2-28]

無謀な賭けの発生メカニズムの検討 感情ヒューリスティック理論の観点から

Underlying Mechanisms of Reckless Betting from the Perspective of Affect Heuristic Theory

田岡 大樹 (1); 楠見 孝 (1)

TAOKA, Daiki; KUSUMI, Takashi

(1) 京都大学教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

事前に多くの勝ちを経験すると、ギャンブル中のポジティブ感情が喚起され、リスクに対する楽観的な判断がなされ、無謀な賭けが引き起こされると考えられている。すなわち、無謀な賭けの背景には、感情に基づいたリスク・ベネフィット知覚(感情ヒューリスティック)があると考えられる。本研究では、無謀な賭けの発生メカニズムについて検討を行うため、勝敗数の実験操作(24 勝/30 戦,12 勝/30 戦,6 勝/30 戦の3 通り)の前後において感情および知覚されたリスク・ベネフィットを測定し、その変化を調べた。その結果、多くの負けを経験した群において、ポジティブ感情の低下およびネガティブ感情の増大が見られると同時に、知覚されたリスクが増大し知覚されたベネフィットが低下していた。パス解析を行ったところ、感情ヒューリスティック理論に基づいたモデルがデータと比較的良い適合を示したものの、賭けの無謀さを十分に説明しなかった。

[PT2-29]

自伝的エピソードが懐かしさ体験に及ぼす影響

The effects of autobiographical episodes on the nostalgic experiences

池田 寛香 (1); 楠見 孝 (1)

Ikeda, Hiroka; Kusumi, Takashi

(1) 京都大学大学院教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

人々は、自分自身の過去を想起する時だけでなく、直接経験していない物事や風景に対しても懐かしさを感じることがある。しかし、エピソードを伴わない非自伝的懐かしさに関しては未だ不明な点が多い。よって本研究は、刺激に対する感情の評定値と、懐かしさのトリガーとなるエピソードの有無を記録することにより、自伝的エピソードの存在が懐かしさとその他評定に及ぼす影響を検討した。その結果、懐かしさ、快不快、覚醒度は、自伝的懐かしさ条件において有意に評定値が高かった。また、自伝的懐かしさに対して快さを感じやすい個人は懐かしさポジティブ傾向が高く、非自伝的懐かしさに対して快さを感じやすい個人は懐かしさネガティブ傾向・回想傾向が高いという関連がみられた。これらの結果より、自伝的エピソードの存在は懐かしさ体験に伴う快さと覚醒度を強めるが、個人特性によって自伝的・非自伝的懐かしさ体験に伴う快さが異なることが示された。

[PT2-30]

セクシュアリティによる性的刺激への反応特性の違い―生物学的性と性的志向の影響―

Differences in responsiveness to sexual stimuli due to sexuality — Effects of biological gender and sexual orientation —

小林 麻衣子 (1); 中村 航洋 (1, 2); 渡邊 克巳 (1)

Kobayashi, Maiko; Nakamura, Koyo; Watanabe, Katsumi

- (1) 早稲田大学理工学術院 Faculty of Science and Engineering, Waseda University
- (2) 日本学術振興会
- (3) 慶應義塾大学先導研究センター

性的な指向はパートナー選択に大きな影響力を持つが、性的な指向や生物学的な性が性的な刺激に対する動機付けにどのような影響を与えるのかはわかっていない。本研究では、性的な指向と生物学的な性が性的な画像(2種類の性的覚醒度の男性、女性、カップル画像)に対する動機付けの強さを検討するため、実験参加者が画像の提示時間の増減ができるキー押し課題を使用した。実験参加者は、51名の異性愛者と、40名の非異性愛者であった。実験の結果、非異性愛の男性は異性愛の男性よりも男性の画像や性的覚醒度の低いカップルの画像に対し強い動機付けを持っていた。また、異性愛者の女性は非異性愛者の女性よりも覚醒度の低いカップル画像に対して強い動機付けを示した。特に覚醒度の低いカップルの画像に対する動機付けが生物学的な性と性的嗜好により変化することが示唆された。

[PT2-31]

映像により喚起する快感情が意思決定に及ぼす影響の検討(1)

The effect of positive emotions elicited by films on decision making (1)

眞田 和恵 (1); 門地 里絵 (1); 原水 聡史 (1); 中村 純二 (1); 木村 健太 (2)

Sanada, Kazue; Monchi, Rie; Haramizu, Satoshi; Nakamura, Junji; Kimura, Kenta

- (1) 花王株式会社 Kao Corporation
- (2) 産業技術総合研究所

本研究は、快感情の種類の違いが意思決定に及ぼす影響を明らかにすることを目的として、高覚醒の快感情である陽気と感動が報酬学習課題における選択のランダム性に及ぼす影響を検討した。実験参加者は陽気映像、感動映像、統制映像のいずれかを視聴し、視聴前後に課題を行った。課題中の選択のランダム性の指標として行動エントロピーを算出するとともに、課題中と映像視聴中の生体データ、および快と覚醒度の評定値を取得した。その結果、陽気条件では映像視聴後の快評定値と行動エントロピーに正の関連がみられた。一方、感動条件と統制条件ではそのような関連性はみられなかった。本研究の結果は、快感情の中でも陽気の喚起が探索的な行動傾向と関連すること、快感情の種類の違いが意思決定に異なる影響を及ぼすことを示唆する。

[PT2-32]

視覚的手がかりによる心的操作能力の補正と環境圧との関連

The relationship between the compensability of mental transformations using visual references and the environmental pressure

景山望(1)

Kageyama, Nozomu

(1) 海上自衛隊潜水医学実験隊 Undersea Medical Center, JMSDF

心的操作能力は、前庭機能の疾患によって低下するとされている。昨年度、操作対象以外に視覚的手がかりが存在する場合、前庭機能が低下する高気圧環境であっても心的操作能力は低下しないことを報告した。しかし、昨年度では、認知機能の低下がみられる 31 気圧以下の環境圧下(21 気圧)で検討した。このため、視覚的手がかりによる遂行能力の補正が、曝露される環境圧に依存しないかについては不明であった。よって、本実験では、高気圧曝露時の環境圧と心的操作時の視覚的手がかりとの関連について、1 気圧と 45 気圧環境下の平面ディスプレイによる Mental body rotation tasks (MBRT) の課題成績と重心動揺検査の前庭機能評価に用いるロンベルグ率によって検討した。本研究において、先行研究と同様にロンベルグ率は高気圧曝露によって増加したものの、MBRT の成績は変化しなかった。これは、視覚的手がかりによる心的操作能力の補正は、曝露される環境圧に依存しないことを示唆する.

[PT2-33]

中高年者の交通事故における住民検診データに基づく認知機能要因の検討

Population-based study of cognitive factors related to traffic accidents in middle-aged and elderly drivers

木村 貴彦 (1); 岩原 昭彦 (2); 八田 武志 (1)

Kimura, Takahiko; Iwahara, Akihiko; Hatta, Takeshi

- (1) 関西福祉科学大学 Kansai University of Welfare Sciences
- (2) 京都女子大学 Kyoto Women's University

本研究の目的は、中高年の認知特性の変化から交通事故に関連する要因を検討することである。住民検診に参加した 295 名を対象として、質問紙での回答と検診当日に実施した認知機能検査の関係について検討を行った。質問紙から自動車事故に関連した経験を抽出した。また、実施された認知機能検査のうち、文字抹消検査 (D-CAT:1文字条件と3文字条件)、抑制機能を評価する Stroop テスト (統制のドット条件と文字条件)、空間認知検査の結果を抽出した。65 歳未満 (中年) と 65 歳以上 (高齢) に区別して変化率を算出した。D-CAT (1文字条件) では後進時の事故経験・最近 1年間での事故経験がある場合に低下がみられるが、D-CAT (3文字条件)では大きな変化がみられなかった。また、Stroop テストでは後進時の事故経験・最近 1年間での事故経験がある場合に遅延の程度が大きくみられた。これらのことから、情報処理速度と抑制機能が交通事故に関連する可能性が示唆された。

[PT2-34]

Disturbing 画像を構成する意味

The semantic structure in disturbing photographs

Chanthavong souphatta (1); 時津 裕子 (1)

Chanthavong, Souphatta; Tokitsu, Yuko

(1) 徳山大学 Tokuyama University

見る者に不快感や不安感などネガティブな感情を抱かせる "disturbing" 画像がインターネット上で人気を博している。本研究の目的は、これらの画像群を構成する意味構造について明らかにすることである。127 枚の disturbing 画像における意味要素 31 種の存否状況を変数として数量化Ⅲ類よる分析を実施した。その結果 disturbing 画像群は、特定の意味要素だけで構成される画像と、複数の意味要素がまとまって構成される画像に大別されることが確認された。前者の画像群は傷や孔の集合体など生理的嫌悪につながる意味要素で構成され、比較的低次の処理過程から disturbingness がもたらされると推測される。一方、後者の画像群には死や儀式を連想させる要素や、文脈との不一致から生じる違和感などの要素によって構成されており、高次の思考・認知過程を経て disturbingness が生起すると推察される。

[PT2-35]

インターネット怪談における意味の構造

The semantic structure of Japanese horror stories on the web.

時津 裕子 (1)

Tokitsu, Yuko

(1) 徳山大学 Tokuyama University

かつては口承で語り継がれた怪談が、Web 上のテキストで楽しまれるようになって久しい。そこで描かれる恐怖がどのようなものであるか知ることは、現代日本人の心性や文化的特性を考える上で不可欠だろう。本研究の目的は、現代のネット怪談がもつ意味的構造を解明することである。まとめサイトに掲載されたランキング上位 100 篇の怪談を収集し、作中に登場する恐怖の喚起につながると考えられる 112 件の物語要素を抽出した。つづいて、各話におけるこれら要素の存否状況をダミー変数として、数量化理論Ⅲ類による分析を実施した。カテゴリー布置から、1 軸が、作中で発生する出来事の原因に明確な説明が成り立つかどうか(「ルール明示/ルール不明瞭」)を、2 軸が怪異や霊的存在が目に見える形で登場するかどうか(「恐怖の直接呈示/間接呈示」)を表すと解釈でき、ネット怪談はこれら 2 軸の組み合わせにより 4 類型に分類できることがわかった。

[PT2-36]

映像に基づく置き忘れ判定における観察者の着目点の検討

How do we detect left-behind objects based on video images?

小島 隆次 (1); 田中 未来哉 (2); 角所 考 (2)

Kojima, Takatsugu; Tanaka, Mikiya; Kakusho, Koh

- (1) 滋賀医科大学 Shiga University of Medical Science
- (2) 関西学院大学 Kwansei Gakuin University

オフィス等で放置された物が、意図的に置かれたのか、置き忘れであるのかを防犯カメラ等の映像からヒューリスティックに自動推定するシステムの開発に向け(cf. 田中ら, 2019)、本研究では以下の調査を行った。調査は web サーベイ形式で、参加者は映像を見た後いくつかの質問に回答した。刺激映像(無音)は、大学生が研究室の自分の机に、ノート PC、スマホ、水筒を持参する場面から始まり、スマホを放置して立ち去るという内容であった。参加者はこの動画を見て、スマホが置き忘れられた程度を評価するとともに、その評価理由を回答した。また、置き忘れ判定の要因として、場所の公共性、持参物の数等を挙げ、それらの重要性も評価した。調査の結果、映像に基づく置き忘れ判定には、物体数や所有者の視野・視線方向のような映像から判断可能なものだけではなく、それら事実に対する認識・評価も考慮する必要があることが示唆された。

(PT2-37)

アファンタジア傾向者の視覚イメージ特性に関する一事例研究

A Single-case Study of the Properties of Visual Imagery in Aphantasia

高橋 純一 (1); 行場 次朗 (2)

Takahashi, Junichi; Gyoba, Jiro

- (1) 福島大学 Fukushima University
- (2) 尚絅学院大学 Shokei Gakuin University

本研究では、アファンタジア傾向者の視覚イメージ特性について一事例検討を行った。アファンタジアとは、視知覚に異常は認められないにも関わらず、視覚イメージの形成に困難を示す状態である。本研究の事例(K)について、視覚能力(レーブン・テスト)とイメージ能力(鮮明性、統御性、常用性[認知スタイル])の測定を行った。結果から、Kの視覚能力について問題は見られなかった。イメージ能力では、視覚、触覚や痛覚などに関するイメージは皆無であったが、聴覚イメージのみ弱く保たれていた。また、視覚イメージの欠如から、統御性は判断ができなかった。さらに、認知スタイルについては、視覚処理よりも言語処理の優位性が明らかとなった。以上より、アファンタジア傾向者では、視覚イメージが欠如している一方で、他の感覚モダリティに関するイメージ(e.g.、聴覚イメージ)の残存性と言語処理の優位性について、認知の代償性が存在すると考える。

(PT2-38)

座席選択行動に与えるパーソナリティの影響

The influence of personality on seat selection

山内 裕斗 (1); 髙橋 亨輔 (2); 小野 史典 (2)

Yamauchi, Hiroto; Takahashi, Kyosuke; Ono, Fuminori

- (1) 岡山大学大学院
- (2) 山口大学大学院

本研究では、友人などの他者と一緒にいる状況ではなく自分一人でいる状況ですべての座席が空席であることを想定した場面を設定し、出入口の位置と教卓の有無を操作したうえで、座席選択の志向性が、出入口の位置と教卓の有無によって異なるか否か、また、座席選択の志向性とパーソナリティとの関連について、182名の協力者のもと、Web 調査を行った。調査の結果、出入口の影響がある群の人数は教室よりも自習室の方が多く、出入口の影響がない群は自習室よりも教室の方が多かった。また、教室においては、出入口の影響なし群よりも出入口の影響あり群の方が、神経症傾向が高く、出入口の影響あり群よりも出入口の影響なし群の方が、勤勉性が高い傾向にあることが示された。座席選択行動が、出入口の位置や教卓の有無といった部屋のつくりや用途の違いによって影響を受けること、その影響の度合いが選択者のパーソナリティによって異なる可能性が示唆された。

[PT2-39]

変化する表情に対する感情認知特性:系列位置の効果

The effect of serial position on the recognition of dynamic changes in emotional faces

原田 佑規 (1, 2); 大山 潤爾 (2); 和田 真 (1)

Harada, Yuki; Ohyama, Junji; Wada, Makoto

- (1) 国立障害者リハビリテーションセンター研究所 Research Institute of National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities
 - (2) 国立研究開発法人産業技術総合研究所 National Institute of Advanced Industrial Science and Technology

他者の気持ちを推定するうえで、表情の変化は重要な手がかりの一つである。しかしながら、表情の変化には時間的比率や系列位置などのパラメータがあるものの、これらが表情認知に及ぼす影響は明らかでない。そこで本研究では、感情表情の出現の系列位置が表情認知に及ぼす効果を定量的に検証した。実験では、表情写真が3 秒呈示された。この3 秒 は 0.6 秒ごとに5 つの系列に区切られており、そのうち4 つの位置では中性表情が、1 つの位置では感情表情(怒り、嫌悪、恐怖、喜び、悲しみ、驚きのいずれか)が呈示された。その後、表情の感情強度を7 件法で評定させた(例:1 まったく怒っていない;7 とても怒っている)。実験の結果、感情の種類を問わず、系列位置における親近性効果が観察された。この結果は、変化する表情を観察すると、感情表情の認知は最近の表情の影響を受けやすいことを示唆する。

[PT2-40]

統合失調型パーソナリティと幻覚様体験の媒介要因の探索

Potential mediators between schizotypy and hallucinatory experiences

田上 初夏 (1); 今泉 修 (2)

Tagami, Ubuka; Imaizumi, Shu

- (1) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
- (2) お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所

統合失調型パーソナリティの強い健常者は幻覚様体験を経験しやすいが、そのメカニズムは明らかではない。先行研究により、統合失調型パーソナリティと幻覚様体験の媒介要因としてマインドフルネス特性やストレスが示唆されてきた。また、マインドフルネス特性は、直接的かつストレスを媒介して間接的に幻覚様体験の生起を予測する。本研究は、統合失調型パーソナリティがマインドフルネス特性とストレスを媒介して幻覚様体験を予測するという仮説を立て、事前登録済オンライン調査 (n = 458) を実施した。共分散構造分析の結果、概ね仮説通りの変数間の関連が認められたが、ストレスは媒介要因として認められなかった。また、モデル適合度は十分でなかった。今後は探索的分析によってモデルの修正を行う必要がある。

[PT2-41]

実時計を用いた intentional binding の計測

Measuring Intentional Binding Effect Using Physical Libet Clock

樋田 浩一 (1); 齋藤 五大 (2)

TOIDA, Koichi; Saito, Godai

- (1) 東北大学加齢医学研究所
- (2) 東北大学大学院文学研究科

随意運動とそれに付随する感覚情報は、不随意運動とそれに付随する感覚情報と比較して、知覚的に結びつきやすいことが知られている (intentional binding). 運動に伴い僅かに遅れて聴覚刺激を呈示すると、運動の知覚時刻は刺激側へ、聴覚刺激の知覚時刻は運動側へとシフトし、結果として、実際よりも両者の知覚間隔が近接する時間知覚バイアスが発現する. この代表的な測定方法として、運動ないしは聴覚刺激が、1 周 2,560 ms で運針する時計 (リベット時計) 上のどの時刻で生じたかを報告する手法がある. 本研究では、このリベット時計と不随意運動を実現するスイッチを物理的に製作し、intentional binding の再現性について確認した. 実験の結果は、先行研究の結果を再現し、我々が開発・構築した実験系が intentional binding の計測に有用であることを示した.

[PT2-42]

視聴覚刺激間の協応関係が同時性知覚の再較正に与える影響

Influence of crossmodal correspondence on the recalibration of audiovisual simultaneity

宇野 究人 (1, 2); 横澤 一彦 (1)

Uno, Kyuto; Yokosawa, Kazuhiko

- (1) 東京大学
- (2) 日本学術振興会

視覚刺激と聴覚刺激が一定順序で連続提示されると、2 刺激に対する同時性判断が提示順序の方向へシフトする(同時性知覚の再較正)。本研究では、「高音と高い位置の視覚刺激、低音と低い位置の視覚刺激が結びつきやすい」という刺激間の関係性(感覚間協応)が、同時性知覚の再較正に与える影響について検討した。参加者は順応フェーズで交互に提示される視聴覚刺激を観察後、一対の視聴覚刺激に対する同時性判断課題を行った。順応フェーズの刺激系列は、協応関係に整合する視聴覚刺激をグループとみなした時にグループ内で視覚刺激が先行する場合(高音 - 低位置 - 低音 - 高位置 - 高音…)と、聴覚刺激が先行する場合があった。これら2条件それぞれについて、順応フェーズ後の同時性判断の結果から主観的同時点を算出したところ、条件間で有意な差が見られた。この結果は、感覚間協応に基づくグルーピングに従って、同時性知覚が再較正されることを示している。

(PT2-43)

ひらがなとカタカナの主観的な複雑さを反映する指標としての周囲長複雑度の妥当性

The validity of perimetric complexity as an indicator of the subjective complexity of hiragana and katakana characters

齋藤 岳人 (1); 樋口 大樹 (2); 井上 和哉 (3); 小林 哲生 (2)

SAITOU, Taketo; HIGUCHI, Hiroki; INOUE, Kazuya; KOBAYASHI, Tessei

- (1) 所属なし
- (2) NTT コミュニケーション科学基礎研究所
- (3) 東京都立大学

文字の物理的な情報量をもとに計算される周囲長複雑度がひらがなとカタカナの主観的複雑度を反映する指標として妥当かどうかを検証した。主観的複雑度は日本語話者と英語話者を対象としたWeb 調査により7件法のリッカート法で取得した。話者ごとに各文字の主観的複雑度の平均を求め、(1)周囲長複雑度と主観的複雑度の相関係数を算出し、(2)その相関係数を主観的複雑度と画数の相関係数と比較した。(1)より、両話者で高い正の相関が認められ、周囲長複雑度がひらがなとカタカナの主観的複雑度を表す指標として妥当であることが示された。(2)より、主観的複雑度との相関係数は周囲長複雑度の方が高く、画数よりも周囲長複雑度の方が主観的複雑度を反映する指標として妥当であることが示された。加えて、(1)より得られた傾きは、英語話者よりも日本語話者の方が小さく、日本語話者の評定は言語的知識の影響も受けていることが示唆された。

(PT2-44)

操作非関連なオブジェクト応答による自動制御オブジェクトに対する主体感の錯覚的 変化

Task-irrelevant object response modulates sense of agency illusorily in automatic control situation

中島 亮一 (1, 2); 熊田 孝恒 (1, 2)

Nakashima, Ryoichi; Kumada, Takatsune

- (1) 京都大学大学院情報学研究科 Graduate School of Informatics, Kyoto University
- (2) 理研 CBS-トヨタ連携センタ RIKEN CBS-TOYOTA Collaboration Center

自動で動くオブジェクトに対する主体感は、通常低くなる(自分が操作しているとは思えない)。本研究では、自分の操作に対する(操作非関連な)オブジェクト応答が、自動制御オブジェクトの操作に対する主体感を変化させるかを検討した。実験では、画面上を移動する黒円をキー押しによりゴール付近に停止させる課題を行った。その際、キー押しの瞬間に円が白く瞬く条件と、変化しない条件を設定した。また、参加者には、キー押しとは無関係にボールが停止する試行(自動制御試行)が存在することを教示した。その結果、自動制御試行において、瞬き有条件では無条件よりも主体感は高かった。また、キー押しとは独立に瞬きが生じると主体感は低下し、キー押しと同時にオブジェクト以外の位置に瞬きが生じても主体感は変化しないことも示された。つまり、自分の行為に対するオブジェクト応答により、自動制御オブジェクト操作に対する主体感が錯覚的に上昇する。

[PT2-45]

Intentional Binding 課題のオンライン化

Verifying online form of intentional binding task

中村 杏奈 (1); 田中 章浩 (2)

Nakamura, Anna; Tanaka, Akihiro

- (1) 東京女子大学大学院人間科学研究科
- (2) 東京女子大学現代教養学部

自己主体感は、観察された運動が自分の行動の結果だという感覚であり、その異常は抑うつ状態をはじめとした精神疾患の症状に繋がることが指摘される。Intentional binding (IB) 課題は、意図した行動とその結果の時間間隔が短く知覚される錯覚を利用して、潜在的な自己主体感を測定するものである。抑うつ状態では意図による時間間隔の短縮が見られにくく、自己主体感が低いことが示唆されている。繊細な時間知覚を測定する IB 課題をより簡便に使用することを目的としてオンライン化する。36 名の一般成人を対象として、二つの音の時間間隔と、自発的なキー押しとそれに続く音の時間間隔を測定した。結果、オンラインでも IB 課題での時間知覚の差が検出された一方で、抑うつ状態との相関は予想と逆の結果(抑うつが強いほど IB が強く、自己主体感が強い)となった。課題で意図の有無を測定できていたか、実験者の不在が課題への取り組みに影響した可能性について検討が求められる。

[PT2-46]

映像により喚起する快感情が意思決定に及ぼす影響の検討(2)

The effect of positive emotions elicited by films on decision making (2)

木村 健太 (1); 眞田 和恵 (2); 門地 里絵 (2); 原水 聡史 (2); 中村 純二 (2)

Kimura, Kenta; Sanada, Kazue; Monchi, Rie; Haramizu, Satoshi; Nakamura, Junji

- (1) 産業技術総合研究所
- (2) 花王株式会社

本研究は、快感情が意思決定に及ぼす影響が快感情の種類により異なるかを明らかにすることを目的として、高覚醒の快感情である陽気と感動が報酬学習課題における強化学習パラメータに及ぼす影響を検討した。実験参加者は陽気映像、感動映像、統制映像のいずれかを視聴し、視聴前後に課題を行った。課題中の選択と報酬のデータに対してQ学習による強化学習モデルを用いて学習率 α と逆温度 β を算出した。加えて、映像視聴中の生理活動、快と覚醒度の評定値を測定した。その結果、感動条件では映像視聴前後の快評定値の変化と映像視聴前から視聴後の逆温度 β の変化に正の相関が観察された。一方、陽気条件と統制条件ではそのような関連性はみられなかった。本研究の結果は、感動の誘発が学習された行動価値を重視した意思決定傾向と関連すること、快感情の種類により意思決定への影響が異なることを示唆する。

[PT2-47]

触覚感情表出の文化内共通性と参加者間個別性の検討

Commonality and Variety in Tactile Emotional Expression

大屋 里佳 (1); 田中 章浩 (2)

Oya, Rika; Tanaka, Akihiro

- (1) 東京女子大学大学院人間科学研究科
- (2) 東京女子大学現代教養学部

相手に触れて感情を伝える際,どのように触れれば感情が伝わりやすいだろうか。ある文化の参加者の触覚感情表出を感情別に分類したとき、表出には参加者間で共通性(文化内共通性)と個別性の両面が見られる。そこで本研究では、触覚表出を構成するどの要素に(例:動作)、どのような共通性・個別性があるのか検討するため、動作解析を実施した。Oya and Tanaka (2020) で正しく感情が伝わった接触について、①表出者が接触に用いた部位、②解読者が接触された部位、③動作、④動作の継続時間の4つの指標を検討した。その結果、12 感情が、正しく伝わる場合に共通している要素(共通性要因)と個別性が高い要素(可変要因)の両方をもつことが示された。さらに、共通性要因は感情ごとに異なることを明らかにした。たとえば怒りでは、動作やその継続時間は問わず(可変要因)、指の手のひら側で相手の手の甲に触れた場合に(共通性要因)、怒りが伝わりやすいことが示された。

[PT2-48]

離人症者は外的刺激の自己関連づけが困難なのか?

Do people with depersonalization disorder feel difficulty to associate external stimuli with self?

山本 一希 (1); 本多 樹 (1); 中尾 敬 (2)

Yamamoto, Kazuki; Honda, Tatsuru; Nakao, Takashi

- (1) 広島大学大学院教育学研究科
- (2) 広島大学大学院人間社会科学研究科

離人の主要な特徴として,非現実感がある。非現実感とは,自身の思考や行為が外界の環境や自分自身と切り離されている感覚であり,離人症者は外的刺激を自己と結び付けることに困難を感じていることが先行研究により示唆されている。しかし,先行研究では刺激として参加者の自己顔しか用いられていない。そこで本研究では,離人の程度が高い人々は自己顔以外の刺激に対しても自己関連性の認識に困難を示すのか検討を行った。離人の程度は質問紙を用いて測定し,自己関連性の認識の困難さは幾何学図形と自己や他人とのマッチング課題遂行時の反応時間と正確さを用いた。

その結果、離人の程度とマッチング課題から得られた両指標とには関連が認められなかった。このことから、離人症者の自己関連性の認識の困難さは、自己顔といった日常的に自己と関連付けられるる刺激に対して引き起こされる可能性が示された。

[PT2-49]

その食事どこから見るか? - 摂食動画の視点の違いがもたらす空腹感の変容 -

From where do you see one's eating? The viewpoint of eating movies influence observer's hunger.

高木 あい (1); 佐々木 恭志郎 (2); 中村 航洋 (1); 渡邊 克巳 (1)

Takagi, Ai; Sasaki, Kyoshiro; Nakamura, Koyo; Watanabe, Katsumi

- (1) 早稲田大学 Waseda University
- (2) 関西大学 Kansai University

近年、動画投稿サイトで摂食動画が注目を集めている。このような動画が観察者の食欲にもたらす影響については、ばらつきがあるように思える。このばらつきには、観察者の内的特性、特に他者の心的状態の理解に関わる共感性の個人差が関与しているかもしれない。本研究では、摂食動画が観察者の食欲に与える影響について共感性の観点から検討した。参加者は摂食動画視聴前後に食欲を回答した。研究1では、多次元共感性尺度を用いて共感性との関連を探索的に検討したところ、共感性、特に他者指向性が高いほど視聴後に空腹になることが明らかになった。研究2では、摂食動画の視点(自己視点・他者視点)の影響を検討したところ、自己視点の動画を観察した方が摂食可能量や空腹が増すことが示された。これらの結果は、摂食動画の観察による食欲の変化プロセスには、動画内の人物への共感が関与することを示唆する。

協賛企業広告



北大路書房

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393 http://www.kitaohji.com

マンガの認知科学

ービジュアル言語で読み解くその世界一 N. コーン著 **中澤 潤訳** A5上製・288頁・本体4800円+税 私た ちはマンガをどうやって理解するのか? 言語学,認 知心理学、認知神経科学、比較文化学による検証を通じ、 マンガ読解の仕組みのカギとなるビジュアル言語の構 造を探る。

音楽知覚認知ハンドブック

ー音楽の不思議の解明に挑む科学ー 大串健吾・桑野 **園子・難波精一郎監修** B5・416頁・本体5800円+税 実証科学的で学際的なアプローチにより、音楽という 経験とそれを支える仕組みの解明を試みる。認知的側面, 人間行動および生理的側面、情報や人間への影響的側 面から,音響,感情,脳,演奏,音楽療法など多彩な テーマを取り扱う。

ワーキングメモリの探究

佐伯恵里奈・齊藤 智監訳 A5上製・432頁・本体 5900円+税 バドリー教授自らが厳選した論文を収録。 WMと長期-短期記憶,あるいは注意の働きとの関係 など, 今なお論争の最前線にある問題について, 第一 人者がどう考察を進めてきたのかを辿り、その研究の 全体像を窺い知ることができる。

認知心理学の動機づけと認知コントロール

報酬・感情・生涯発達の視点から T.S. ブレイ バー編著 清水寛之・金城 光・松田崇志訳 A5・ 448頁・本体4800円+税 動機づけが認知を, また, 認 知が動機づけを支えるメカニズムについて、神経科学 との融合分野から解説。注意,学習,記憶という認知 プロセスと感情を含む動機づけのプロセスとの関係に ついて最新の研究状況を俯瞰する。

教育AIが変える21世紀の学び

-指導と学習の新たなかたちー C.ファデル他著 関口貴裕編訳 東京学芸大学大学院・教育AI研究プロ グラム訳 A5・272頁・本体2500円 + 税 AIが教育に もたらす影響を、カリキュラム設計と実際の利活用法 の2点から解説。新学習指導要領がめざす方向性を深 く理解できる。

新・動機づけ研究の最前線

上淵 寿・大芦 治編著 A5・248頁・本体3200円 + 税 好評の既刊書から15年を経て、この間の膨大な知 見の集積をベースに新版として登場。社会文化的なア プローチや発達的観点も織り込みつつ、達成目標理論 の細分化や自己決定理論の進展に伴う実証研究。さら には学習観の変遷に伴う動機づけとの関係など, 最新 の研究成果を紹介する。

認知心理学の ワーキングメモリと日常

-人生を切り拓く新しい知性ー T.P. アロウェイ・ R. G. アロウェイ編著 湯澤正通・湯澤美紀監訳 A5・ 356頁・本体3800円+税 生涯にわたる発達において、 WMはどのような役割を果たすのか。成功(専門知識 の獲得) や失敗 (嗜癖行動, 不適切な意思決定) との 関係を明らかにし、日常生活に与える影響を示す。ト レーニングの利点も言及。

別の理学の神経経済学と意思決定

- 心理学,神経科学,行動経済学からの総合的展望-E.A. ウィルヘルムス・V.F. レイナ編著 竹村和久・ 高橋英彦監訳 A5・340頁・本体3800円+税 研究の 歴史的基礎, 認知的一貫性と非一貫性, ヒューリステ ィクスとバイアス, 神経経済学と神経生物学, 発達段 階の差異と個人差、意思決定の改善の6つの分野に焦 点を当て詳説。

い埋字って面白そう! どんな仕事で活かされている? シリーズ **心理学と仕事 (全20巻)**

シリーズ 監修 太田信夫

●A5判·約160~220頁·予価2000~2600円+税

- 感覚・知覚心理学
- 2 神経・生理心理学
- 3 認知心理学
- 学習心理学
- 5 発達心理学

- 6 高齢者心理学
- 7 教育・学校心理学
- 8 臨床心理学
- 9 知能・性格心理学
- 10 社会心理学

- 11 産業・組織心理学 12 健康心理学
- 13 スポーツ心理学
- 14 福祉心理学
- 15 障害者心理学

- 16 司法・犯罪心理学 17 環境心理学
- 18 交通心理学
- 19 音響・音楽心理学

心理学関係学術図書のご案内

価格は税別。

パターン認知の心理物理学

濱田 治良著

7500円

本書では、心理物理学と実験現象学の立場から長い歴史を 辿りつつ対称性認知と知覚的体制化についてまとめて、 心理学実験を重視した理論モデルを考察した新著。

視野と奥行知覚に関する研究

太田 雅夫著

6000

非交差視野と交差視野における対象の網膜像が、大脳の 視覚野へ伝達・変換される過程や奥行知覚が成立する しくみ等を検討すると共に諸仮説を実験によって検証する。

老年期の心理査定と心理支援紫研究

渡辺 恭子著

3200円

老年期の心理的特性や身体機能の変化について概説し、 特に精神疾患とその心理査定を解説。心理面・生活面から 高齢者の支援を考える。

学習方略が関するメタ認知的知識と達成目標の役割

山口 剛著

6500円

本書は、学習方略の使用に関する研究報告をまとめた。 学習方略の使用について、個人内の変数としてメタ認知を、 個人差変数として達成目標を取り上げている。

写真のなかの距離の知覚

竹澤 智美著

8000円

写真に代表される実際空間を撮影した画像のなかの距離は, 撮影方法や提示方法によってどの様に変化して見えるのか。 厖大な実験結果に基づいて科学的に解明した新著。

だが影物語理解過程の心理学的検討

梶井 直親著

5000円

アニメーション媒体で表現された物語を我々はどのような 過程で理解しているかについて,文章の物語理解過程 モデルを援用し,映像固有の要因を含めて検討した。

パートナーに対する暴力のメカニズム

喜入 暁著

7000円

パートナー暴力にかかわる個人の特徴とそのメカニズムを、 従来の至近要因へのアプローチに加え究極要因への アプローチにも着目した統合的モデルにて明らかにする。

嗅覚と自伝的記憶環心理学的研究

山本 晃輔著

500P

ブルースト現象(匂い・香りによって過去の出来事の記憶が 想起される現象)の認知メカニズムについて実証的・ 理論的に検討し、新たなモデルの提案を試みた。

傾いた図形の同一性認知の発達的研究

野田 満著

10500円

幼児期から児童期のメンタルローテーションが特徴分析的で あることを解明。子ども特有の認識の在り方を, 自己と 対象との関係性から捉え直す。

展望的記憶の自発的想起と無意図的想起

森田 泰介著

5500円

将来実行しようと意図された行為の記憶は、どのようにして 自発的・無意図的に想起されるのか。実証的・理論的に 検討し、そのメカニズムの解明を試みた。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34 TEL 03-3291-5729 FAX 03-3291-5757

風 間 書 房

(URL) https://www.kazamashobo.co.jp メールアドレス pub@kazamashobo.co.jp

TalkEye Lite Wireless



- ●被験者は小型処理装置をリュック等に入れて装着
- ●小型処理装置の操作・測定画面をワイヤレスで、外部モニタに表示
- ●小型処理装置の操作もワイヤレスマウスで操作可能
- ●ワイヤレス通信が切れても小型処理装置はデータ取得を継続



無線で接続

受信機



無線で操作

外部モニタ

ワイヤレスマウス

人間の可能性を科学する

1000 竹并機器工業採式會社

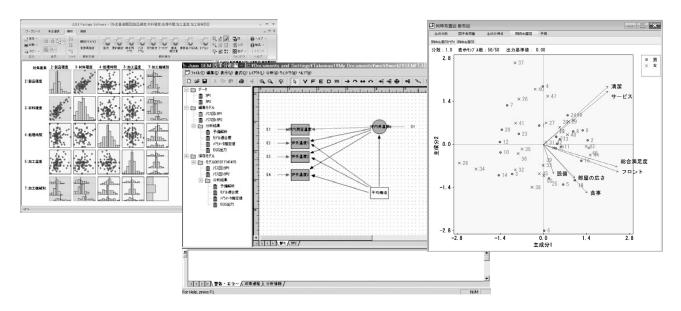
本社/〒956-0113 新潟県新潟市秋葉区矢代田619 TEL.0250(38)4132 FAX.0250(61)1211 https://www.takei-si.co.jp

JUSE-StatWorks_®/V5

構造方程式モデリング・共分散構造分析

SEM因果分析編

JUSE-StatWorks/V5 は初心者の方にも使いやすい統計解析ソフトです. 実験計画法,多変量解析,SEM(構造方程式モデリング)因果分析など, 商品設計,官能評価,マーケティング調査などで活用できる手法を多数搭載しています.



まずは,無料体験版をダウンロードし,お試しください https://www.i-juse.co.jp/st/r/COGPSY20



価格 JUSE-StatWorks/V5 SEM因果分析編

標 準 価 格:78,000円(税抜) アカデミック価格:39,000円(税抜)

アカデミック価格は通常価格の50%オフ

稼働環境

OS: Windows 10/8.1

CPU:IntelまたはAMDプロセッサ 1GHz以上

HDD:700MB以上の空き容量

ディスプレイ:1024×768(XGA)以上の解像度 ディスク装置:CD-ROMまたはDVD-ROMドライブ



前田印刷様広告スペース

